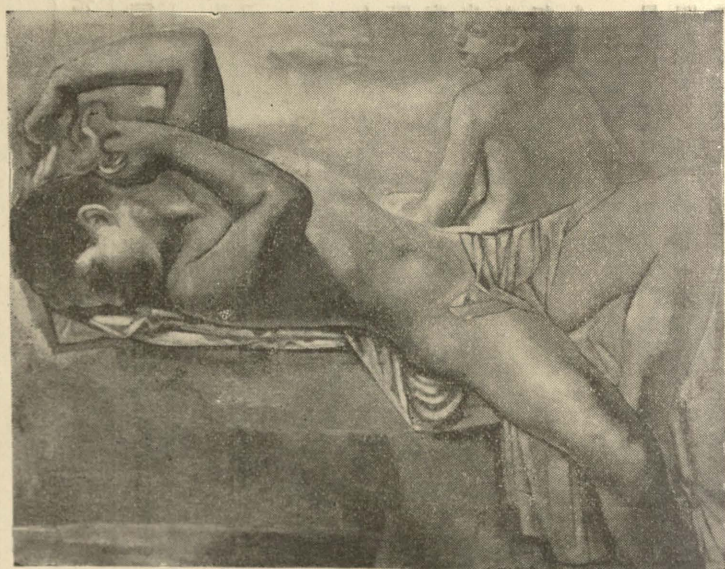
自己愛の研究

精神分析

★第6巻・第8號★昭和13年・9月★

自己愛神話の主人公ナルチス

原作油繪……………大內青坡氏作

東京精神分析學研究所出版部

戰爭が生んだ偉大な英雄ナポレオンの新しき認識の書がここに出現した。軍國の下精神文化の高揚を期すべきの秋敢て本書の必讀を奬むるものである。

ナポレオンの精神分析

ルードヰヒ・イエケルス著
延島英一譯

定價一圓五十錢
四六判輕裝

本書は原著者ルードヰヒ・イエケルス博士が、多くの資料を綜合して、それに分析學の鋭きメスを加へた完璧の研究書で、從來のナポレオン傳記作者が、ナ翁の偉大な史的足跡に眩惑され、嚴正な批判を下し得なかつた短所を見事に剔抉し、明快なる分析振りと共にその豊富な創見を發表されたものである。

また譯者延島英一氏は精神分析學界の惑星にして、また世界事情の精通家として文明批評家として令名あり、本書に於けるその周密明快なる譯出は、正にその人を得たるものと言ふべきであらう。

目次概要

御一報次第圖書目錄御送りします

東京・神田・淡路町
振替東京二五九三五番
電話神田二〇一〇・二〇一一番

岡倉書房

自己愛の研究・内容目次

『精神分析』第六巻・第八號

雜誌維持委員制の廢止に就いて

我等今日この非常時に際し、紙價、印刷諸費暴騰のため一般出版界不調に拘らず、本誌は幸にして異常の發展を示し、冊子精神分析の增刊を企てゝなほ綽々餘裕あるに至りましたことは、偏に、創刊以來多大の犧牲を惜まれなかつた雜誌維持委員諸氏の誠意と讀者諸賢の熱心なる支持に負ふものと、深く感謝いたしてをります。それ故に本誌は本年上半期を以て斷然維持委員制を廢止することに致しました。維持委員として久しく恩顧を垂れられたる方々は

岩倉具榮、長谷川誠也、長崎文治、

大久保眞太郎、大槻憲二、（イロハ順）

の五氏でありますが、また臨時に援助又は寄附の形式にて維持に資せられた方々には高橋鐵、廣井重一、奥本島田その他の諸氏がありました。諸氏がこの美擧はひとり本研究所のためのみならず、またわが國文化史上の功績として永く銘記せらるべきものと信じます。

こゝにこの制度を廢止するに當り、永年の御好意を深謝すると共に、本誌がこの域にまで發展したることを同慶したいと存じます。げに、質實なる高級學術雜誌としてこの程度の發展も、比類少き成功の內に數へらるべきものと信じます。

なほ今後とも一層の努力を惜まぬつもりでありますから、種々の形式にて諸賢の末長き御援助を切望いたします。

文献維持委員制の新設に就いて

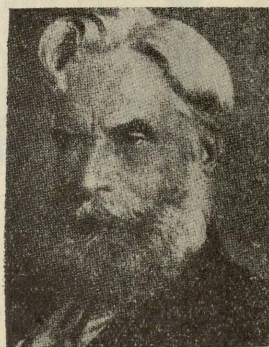
本誌經營上の發展に伴ひ雜誌維持委員制の廢止を見るに至りましたと同時に、別に文献維持委員制を新設したいと存じますにつき、廣く一般誌友の間からこの擧に御參加下さる方々の多からむことを切望いたします。文献維持とは世界各國語の斯學關係文献を今にして蒐集しておかなければ將來は益々困難になることを虞れるために、思ひ立つたのであります。殊に前墺國ヴィンに於ける斯學會及び同會所屬出版部の行く行くの解散（未だ存續的に事務をとり、新書の出版はせぬやうです）は一層その不安を大ならしめるものがありますにつき、今からでも遲すぎはせぬと思ひ、諸君の御援助を期待する次第であります。

維持費は一口五十圓とし、幾口にても御加入下さつて當方としては多々益々便ずるわけであります。維持委員諸氏に對しては、本研究所は十分にその御好意に酬ゆるの道を考へてをります。何事によらず人の好意に無償に縋らうとするやうな蟲のよい考へ方は——よしんばその目的が如何に崇高であらうとも——分析者の恥づるところでなければなりません。但し五十や百のはした金に一々代償を考へるとはあまりに神經質すぎると苦笑をされるやうな太つ腹な方々があるならば、必ずしも我々は代償をとつてくれなければ絶對に好意をも受けないと頑張るやうな偏屈人でもないと云ふことを斷つておいてもいゝです。とにかく原則としては御好意に報いる道を考へてゐます。それは本研究所關係の出版物（但し雜誌は別）は出版部の出版物なると否とを問はず、永く全部無償で謹呈する（從つてその總價は維持費を超ゆるの時期至るべきは當然）と共に、蒐集せられたる文献の閲覽權を認めることは勿論、その他、御希望の件は何なりと、當所の力に協ふ限り、應へたいと考へてゐるのであります。

維持費支拂は一時に全額を御支拂ひ下さるに越したことは御座いませんが、都合により分納にてもよろしく、但し一年以内に全納願上げたく存じます。

『精神分析』第六巻第八號巻頭言

★自己愛ディレムマの時代

現代ほど日本民族のナルチスムスが膨れ上つてゐる時代は、我が民族の過去の歴史に於いて嘗てなかつた。膨れ上つてゐると云ふよりは、膨れ上らさねばならなくなつてゐる時代、或は膨れ上らすべく餘儀なくされてゐる時代と云つた方が穩當かも知れない。とにかくこれは素晴らしい時代でもあらうが、また恐ろしい時代であるかも知れない。この時代に生れ合はせたことは、我々の幸福でもあり災難でもある。併し何處に、反面災難を意味しない幸福があらう。その災難にはいろ〳〵の意味があるであらうが、就中その尤なる點は、一面に於いてそれほど膨れ上らすべく餘儀なくされてゐるナルチスムスが、他面に於いて自由に脹らすべく許されてゐないと云ふことだ。換言すれば、民族として脹れ上らせるにはいくら脹れ上らせてもよいが、個人としては甚だ多くの制限が嚴重に加へられることだ。果してこのディレムマを潜りぬけて行く藝當が首尾よく行くかどうか。少くとも分析の酯でも飲んで心の屈伸を自由自在ならしめてかゝらぬことには、足許が危いと警告しておく。

フロイドのナルチスムス觀

ハヴロック・エリス

延島英一譯

はしがき——

ハヴロック・エリス Havelock Ellis（1859——）について日本の讀書人の一般にいだいてゐる概念は、彼が變態性慾の研究者であるといふことであらう。しかしこの概念ほどエリスについて間違つてゐるものはない。エリスは變態性慾の本質を明かにすることに非常に貢献したが、しかし變態性慾そのもののためにに性問題を研究したのではなかつた。彼が性問題の研究に生涯を捧げてゐるのは、この最も秘密におほはれ、從つて最も迷信に支配されてゐる人類生活の重要部分を科學の光に照して明かにし、人類に合理的な、幸福な、自由で强權的でない性生活を送らせることに寄與したいといふ念願に動かされたのであつた。

その意味でエリスは、故エドワード・カーペンターと並んで、英國に於ける一般にアナーキズムと呼ばれる傾向の社會的・思想的運動の代表者と認められてゐる。

エリスの性問題一般、またそれと關聯して精神分析に對してとつてゐる態度は、彼の次の言が明かに示してゐる。

「性問題と關聯して我々が今日の精神分析學者から最も明白に學び得る點は、精神分析は必然的に、愛の何たるかを啓示する望ましい道であり、また可能な道でさへあるといふことである。賢明な精神分析學者は、エネルギー及衛

動を抑壓乃至毀傷してゐる外界及內界の支配力から個人を解放する方法は、彼の天性の自由な活動に對する禁制を除去することにあると主張してゐる。

この方法は眞實の意味の敎育の方法であつて、自然の衝動を禁壓する方法でもなく、確固たる準則や規準をその統御のために注入する方法でもなく、また個人の特殊傾向を强制する方法でもなく、個人の特殊傾向を導き出す方法である。

精神分析は禁制を除去する。個人に課された禁制であらうと、個人が意識的にまたは無意識的に自分に課した禁制であらうと、すべての禁制を最高の道德的意圖を以つて除去し、その禁制の除去によつて一層大きな、一層自由な、一層自然な本能的道德に活動の機會を賦與するのである。

精神分析がこの影響力を及ぼすのは、何よりも先づ性の領域——自然に最も强力な禁制が課されて、自然の傾向がタブーと恐怖に最もとりかこまれ、外來的な古臭い傳統から生じた不淨と墮落の人工的な汚點にそれが最も彩られてゐる性の領域である。

かくて精神分析學者の手で行はれた治療上の實驗に依つて、我々は生理學及心理學、また生活の直接の經驗から學んだところのものを愈々確められるのである。」

エリスの著作で日本で最もよく知られてゐるのは、『性心理研究』七卷であらう。この書はそれに『男性と女性』及『結婚と性敎育』の二卷を加へ、前後九卷の書として、昭和七－八年、日月社から醫學士增田一朗氏の邦譯が出版されてゐる。また大正十一年頃には鷲尾浩氏譯『愛と苦痛』、『女子の性慾衝動』、『性愛の技巧』などの諸書が冬夏社から出版せられてゐる。

エリスは英國人であるが、性に關する彼の著作の出版を英國政府が好まないため、その大部分は米國で發行されてゐる。しかるに最近フランスに於て、パリのメルキュール・ド・フランス社が彼の性問題研究をフランス語を以つて出版することに着手した。既に十八卷が上梓されてゐる。それは大體彼の舊著『性心理研究』を基礎とするものであ

るが、全部書換へられ、最新の資料によつてその面目を全く一新してゐる。

こゝに譯出した小篇は、そのフランス語版の『性的偏向の機構。ナルシシスム』と題する書の一部分である。ナルシシスム(ナルチスムス)は、エリスがはじめて觀察した色情現象であるが、それがフロイドの手で研究されるに及んで、人間の心理生活に於ける最も重大な現象であることが明かにされたものである。譯文の中でエリスがいつてゐるやうに、彼はナルチスムスを對象を缺く性的表現(彼のいはゆる自己色情)と見、これを生來的な原因によるものと解し、從つて人によつてその現はれる者と現はれぬ者があると考へたのである。しかるにフロイドは神經症及幼兒の觀察によつて、ナルチスムスはすべての人間に例外なく存在する心的傾向であることを發見したのであつた。エリスはこのフロイドの發見に一面敬意を表しながら、フロイドの所見が彼を全幅的に承服させぬこと、エリスの見解を支持する心理學者が非分析派の人々に多いことを述べてゐる。また彼はフロイド自身の見解が、多年の中に多少の變遷を經たこと(併しその事は科學者の場合、必ずしも恥辱とするに當らぬ。)を指摘してゐる。

この小篇を譯出した所以は、エリスの所說がナルチスムス觀の發生と發達を明かにするのみならず、それと關聯してフロイドの所說の一層の理解に役立つ點があると考へたからである。(譯者)

初期のナルチスムス觀

ナルチスムス(自己愛)を精密にフロイド的概念に從つて研究したのは、オットー・ランクをもつて嚆矢とする。ランクの研究は一九一一年に公表された。(註一) 彼は先づ私がこの現象について學界の注意を促がして以來、多くの學者がこの「病的狀態」——これはランクの言である——の研究をはじめたことを述べ、次いでかういつてゐる。

「しかし特にエリスの手になる一二の興味ある文學的記述を除けば、この特異現象の由來と深い意味を明かにした研究は一つも發表されてゐない。」

かう述べた上で、ランクはある一人の若い女性のナルチスムス的な夢を詳細に記述してゐる。この女性に於ては、

覺醒時に於てもナルチスムス的傾向が極めて明瞭に見られたのである。ランクはこの夢は本人にも意識されて居らぬ潜在的な同性愛と關聯してゐるものと見た。この少女はある男性に心を惹かれ、その當時は常態的なナルチスムスの段階を脱してゐたのである。しかも彼女は「私は私があの方に愛されるのでなければ、あの方を愛せませんわ。あの方が私を愛さぬなら、私には愛することはできませんわ」といつたのであつた。

ランクは、この言葉を頗る意味深長にとつた。すなはち彼女が男性に愛を感ずるには、その愛が先づ自分を迂回した上でなければならぬといふ意味にとつた。彼女はその自らいふところによれば、鏡を前にして髪を梳つてゐる時往々性的昂奮を感じたといふ。ランクはこれと關聯して、「ナルチスムスと手淫との間に存する極めて密接な明白な」關係にも觸れてゐる。ランクのこの興味と示唆に富む研究は、彼のすべての著作と同じく、この問題に關聯する文献の該博な渉獵と完全な知識に於て極めて注目に値するものである。

フロイドのナルチスムスに關する最初の、そしてまた最も重要な研究は、一九一四年に發表された。（註二）その中でフロイドは、ナルチスムスに「人類の常則的發展に於ける一つの位置を與へ」、變態の部類からそれを脱せしめた功績をランクに歸してゐる。だがこれに關して私はかういふことをいつて置きたい。それは私はナルチスムスを自己色情の表現の中に概括したが、しかし自己色情を以つて變態と認めたことは決してないといふことである。

フロイドは、ランクがナルチスムスといふ言葉に擴大した意味を與へた結果、この現象は「自己保存本能の自己中心性、あらゆる生物の中に常態的に見得る態度に對するリビドオ方面からの補足」と見られるやうになつたといつてゐる。リビドオがその發達途上に於て障碍を蒙つた人に於て、殊に自己が戀愛對象の原型に選ばれるのが見られる。彼等は自分自身を戀愛の對象として眺めるが、ナルチスムス的對象選擇とは、かゝる態度を指していふのである。

これを説明してフロイドは、人間は原始的な性對象を二つ持つてゐるといふ。すなはち自分自身と、自分を育てゝくれた女性（普通母親）がそれである。「從つて我々は、各個人の中に第一次的ナルチスムスの存在するのを假定し得るわけである。」そしてそれは往々究局的に戀愛對象の選擇にまで支配を及ぼすことがある。故に人間が戀愛の對

象を選擇するに當つては、二つの原型があることになる。一つは依憑的原型、すなはちそれに凭れて對象を選擇する原型、母親が第一次的具象化である原型である。他の一つはいまいつたナルチスムス的原型である。依憑的原型による完全な對象愛は、本來男性の特質である。それに反して女性に於ては、原始的なナルチスムスの嵩ずるのが見られるのが普通である。「特に鬼も十八、番茶も出花といふ頃になると、女性には對象を要せず、自分一人で足るといふある程度の自足的な傾向が現はれる。そのために女性は、戀愛對象の選擇上に加はる社會的制限を餘り感ぜずに濟むわけである。ところが子供となると、この自分一人だけで足り、對象を要しない自足的傾向が常態である。子供の我々に魅力を感じさせる點が、大體に於てそのナルチスムスと、自足的傾向と、感受性の缺如にあるのは、ある種の動物の持つ魅力と同じである。」

だが戀愛對象をナルチスムス的に選擇するといつても、人によつてその愛するところに從ひ、いろ／＼な仕方があるわけである。例へば（イ）現在の自分自身を原型とする者もあれば、（ロ）過去の自分自身、（ハ）將來なると思はれる自分自身、または（ニ）過去に於て自分自身の一部と考へてゐた誰かを原型とする者もあらう。フロイドはまたアドラーが性格構成及神經症構成の殆んど唯一の本能力と看做してゐる「男性的抗議」についても、それは實際に於てはナルチスムス的なものであつて、去勢コムプレクスから生じたものと看做してゐる。

ナルチスムス觀の變遷

フロイドはその後の著作に於て、原始的な精神分析的概念を擴大したり、訂正したりしながら、絕へずナルチスムスの問題に挿話的に言及してゐる。一九一六年、彼はナルチスムスの第一次的段階のリビドオは、完全に對象に轉嫁されはせぬと主張し、「ある程度のナルチスムスは持續する」と述べてゐる。すなはちリビドオが對象と自己の間を往復し、それによつてある有益な機能を果すことがあるといふのである。この同じ一九一六年、睡眠時のナルチスムスを論じた折に、彼はその點を更に明確に次のごとく述べてゐる。

「ナルチスムスとエゴイスムス（自己中心性）とは全然同一であつて何んの相違もない。ナルチスムスといふ言葉は、たゞこのエゴイスムスがリビドオ的な形態をとつたのを表すのに用ひられたに過ぎない。ナルチスムスはまた、エゴイスムスの色情的な形態だといつても差支へない。」

フロイドはまた「精神分析入門」（註三）の卷末で、夢のナルチスムスを説明してかういつてゐる。

「睡眠中の人に於ては、リビドオ分配の第一次的狀態、すなはちリビドオと自我本能がその中に相衝突せず併存し、對象を要せぬ自足の自我の中で區別され得なくなるナルチスムスの再び現はれるのが見られる。」

フロイドにとつては、ナルチスムスを原始人の特質と見ることは避け難いことであつた。その結果彼は、原始人の信ずる魔術の起源を過度なナルチスムスの適用の中にもとめたのであつた。しかしフロイドは、人間の一般的なナルチスムスは、科學の手で三つの重大な打擊を與へられたといつてゐる。

一、コペルニクスは、地球が宇宙の中心に位してゐるといふ信仰を破却し、それによつて人間の自尊心に天文學的打擊を與へた。

二、ダーウィンの進化論は、人間に人間が動物の一種であることを敎へ、その結果人間のナルチスムスは生物學的打擊を蒙つた。

三、精神分析は、人間は人間が自分で信じてゐるやうに自分自身の支配者ではなく、自分の力では完全に動かし得ぬ本能と意識下の力に服してゐるものであることを明かにし、それによつて人間のナルチスムスに心理學的打擊を加へた。

更に「性說に關する三論文」（註四）の第四版（一九二〇年）の中で、フロイドはナルチスムス的自我・リビドオを、そこからして戀愛の對象が外に流出し、また內に流入する大貯水池に譬へてゐる。自我に對するナルチスムス的リビドオ纏綿は、最初赤ん坊時代に實現され、次いで後年の色情的成長に粉飾され、その陰にかくれて存在を續けるものだといふのである。

こゝで附加へて置きたいのは、フロイド派の精神分析學者は、大抵皆以上の見解と相似た見解をいだいてゐるといふことである。例へばサドガーはナルチスムスを定義して、「性的衝動を自我衝動から區別する分界が根本的一致に還元された概念境界」だといつてゐる。サドガーの見るところでは、ナルチスムスは本質的には常態であるが、たゞその定着と誇大が生ずる場合にのみ病理的現象となるのだといふ。一定程度のナルチスムスは、對象の選擇と兩立し得る。けだし「誰でも多少の程度自分に戀慕してゐない者はない」からである。しかしサドガーはそれに附加へて、常態的なエゴイスムスと、自分自身の買ひ被りを基礎として發生するリビドオ的ナルチスムスは、明確に區別せねばならぬといふのである。このリビドオ的ナルチスムスは、幼兒に見られる特徴的態度であり、この態度はその周圍の年長者によつて促進されるものであるといふ。サドガーはフリードユングの言葉を引いて、例へば療病の際子供にいふことを聞かせやうと思つたら、そのナルチスムスに愬へるのが一番いゝといつてゐる。彼は女性に於ては、戀愛は普通この段階を脱しないとして、かういつてゐる。

「女性が戀愛で愛するのは、自分自身である。女性がある男性を愛するのは、その男性が自分を愛するからに過ぎず、決してその男性の男性的資質のためではない。女性の欲するのは、愛することでなく愛されることである。女性が、戀愛する男性の特徴である性的買ひ被りに陷らぬ所以は、けだしその點にあるとせねばならぬ。」

サドガーはまた友情は、ある人々に想像してゐるやうに精神化された同性愛といふよりは、擴大されたナルチスムスといふ方が正當だと主張してゐる。我々が友人をアルタ・エゴと呼ぶ所以はそこにあるといふのが彼の見解である。

非フロイド派のナルチスムス觀

嚴密な意味のフロイド派正統から離脱した精神分析學者の間でも、ナルチスムスに非常な重要性を附する態度は一般に變りがない。例へば最近の著作に於けるステーケルの態度がそれであつて、たゞその見方がフロイド派と違ふと

いふだけのことである。ステーケルは、憎惡を以つて愛よりは原始的、第一次的なものと看做し、愛を「文化所産」だと考へてゐる。愛は原始的には、自我に向けられるものだといふ。生物はどれでも皆悉く、原始的にはナルチスムス的方向をとるものである。從つてナルチスムスが源泉となつて愛他的感情は發生するのであつて、私がお前を愛するのは、お前が私に快樂を與へるからだといふ過程がそこにはある。嬰兒が母親や乳母に對していだく愛はそこから生れるのである。ステーケルはさういふ一方、また別にナルチスムスを以つて、あらゆる性的倒錯に說明を與へるものと考へてゐる。性的倒錯は、すべて悉く傷つけられた自己愛の表現だといふのである。マゾヒスムス症、サヂスムス症、崇物症などの患者は、一見その願望の對象が自分以外にあるやうには見へるが、實は自分自身のこと以外は何も考へて居らぬとして、から述べてゐる。

「性的衝動の病的變態は、すべて悉く內的病的性質の（鏡に映ずるごとき）反射影像ならぬものはない。」（註五）

サドガーのナルチスムスに關する小篇は、それが正統フロイド派精神分析學者の所論であるにもかゝはらず、ナルチスムス的現象の根本的定義に關してフロイドの見るところと對立してゐる。それはフロイドその人が、後年の著作で絕へずナルチスムスの定義に訂正を加へたからである。だがこの改變に證明を與へたのは非分析派の心理學者であつて、精神分析派の學者ではなかつた。そしてそれは心理學者をして、ナルチスムスに關し臆病な態度をとらせる原因となつたのである。

マクドゥガルは、その「異常心理學」の中で、フロイドの一般的概念に極めて同情ある態度を示してゐるに拘はらず、ナルチスムスには殆んど全く觸れてゐない。ローレダーは、ナルチスムスに自己性慾といふ亂暴極る名稱を附した上で、それを三つの基本的な性的衝動の一つに數へてゐる。三つの基本的衝動とは、ナルチスムス（自己愛）と同性愛と異性愛とである。しかし彼はナルチスムスを極く稀有な現象と看做し、その例證をたゞ數例あげるに止め、そしてそれに嚴密な定義を下してゐる。彼の見るところでは、ナルチスムスの存在はある特定な性感情のあるところにしか見られないといふのである。いひかへれば、それは過度の自惚と關聯してゐるといふのである。彼はナルチスムス

を他の變態症、例へば變裝症、殊に崇物症と連絡させてゐる。彼のあげてゐる例證――その一つは極く完全なものである――は、すべて悉く男性の場合に限られてゐる。

ローレダーは、かゝる變態症の原因は、腦性中樞の先天性疾患にあるのではないかと見てゐる。この見解がフロイドのそれと異ることは一見して明かである。フロイドはナルチスムスを性的發達の常態的な一段階と見てゐるのである。

ヒルシュフェルトのナルチスムス觀も、原則的にはローレダーのそれと異らない。たゞヒルシュフェルトは、ナルチスムス的表現をローレダーほど稀有なものと認めず、自己單獨性慾といふ言葉を用ひて、ナルチスムス症を他の變裝症、崇物症、露出症などの諸形態と同一群に概括してゐるのである。普通他の性科學者はかゝる概括を用ひない。彼はナルチスムスをあらゆる精神的・性的發達の常態的な一般階とするフロイド派の學說を決定的に排斥し、ナルチスムス症が永續的に持續する一種の幼兒性であることを絕對に認めない。彼によれば性的引力に對する反應不可能性は、我々にはまだ分らぬ例外的な、重大な疾患に基づく特殊な缺陷であるといふ。それは明白な性的倒錯であり、他のいろ〳〵な倒錯、殊に嗜糞症と關聯があるといふ。ヒルシュフェルトは、これは旣にペーターマンが想定したごとく、自己の一つの分身が他の分身、「理想的同類」を眺める一種の人格分裂症ではないかといふ示唆を提出し、鏡の蠱惑力はそれを以つて說明されるといふ。しかし我々はこの理想的同類、この別自我は常態的なものであり、白晝夢及子供の夢で常に觀察されることをいつて置きたい。子供は夢の中で勝手に想像的な友を作り出し、それと自分の感情及經驗を分ち合ふのが普通である。(註六)

ナルチスムスと自己色情

前にもいつたごとくフロイドは、實際的な臨床的考察のみに止つてはゐられなかつた。ナルチスムスといふ觀念は、彼の手にかゝつてから少からぬ意義と重要性を帶びるに至つた。フロイドの手にかゝると、何ごとでもすべてそ

の後で新しい意味を帶びるに至つてゐる（これがまた彼の天才の證據である）。私の見るところをいへば、私はこの轉換は、ナルチスムスといふ觀念がそれから發生した原始的な觀察の正當な適用と看做すものである。私にとつては、ナルチスムスとは自己色情 auto-erotism の形態であつた。この自己色情といふ言葉について、私はそれが特定の對象を全く缺く性的衝動の自働的表現一切を概括する言葉であつたことに注意を喚起せざるを得ぬ。そして睡眠中の色情的な夢が、この自己色情的活動の典型であつた。從つて本來的な意味に於ける自己色情は、決して倒錯ではなく、たゞ性的引力の常態的な對象を犧牲として、放縱に追求される場合に倒錯となり得るものであつたのである。

しかるに精神分析派は、この自己色情といふ言葉を採用するに當つて、私の遺憾とする別種の意義をそれに附したのであつた。けだしそれは正當でないばかりか、その結果不便が生じたからである。精神分析派は、自己色情といふ言葉を、一般に自己を對象とする性的活動の意味に用ひてゐる。（註七）この用法は正當でない。けだし auto といふ接頭字の附される言葉は、automobile（自働車）または autonomy（自治）などの例で明かなやうに、あるものを對象とするのではなく、それ自體を意味してゐるからである。またそれが不便を生ずるといふ所以は、さういふ意味の混用を行ふと、對象のない性的表現——私がそれを表すために自己色情といふ言葉を作り出した對象のない性的表現を意味する言葉がほかになくなるからである。

それはそれとして、自己色情といふ觀念に制限を加へた結果、フロイドはそれにナルチスムスを含ませることができなくなつたのである。ナルチスムスとは、幼兒時代に於て自己色情であつたものゝ後期の一段階といふことになつたのである。私はナルチスムス的なすべての表現は、その起源に於ては生來的なものであり、必らずしもすべての個人に於て現はれるものではないと考へたが、フロイドは反對に、それを以つてあらゆる成人の性的成熟への發達途上に於ける不可避な段階、常態的に必須な段階と見やうと試みた。その點でフロイドの見方は、印象的であり、產出力に富んでゐる。だがそれが一度一般化されると、我々はその見方が極めて思辨的であるといふ感じを禁じ得ないのである。

この態度は、博識で愼重な心理學者の大部分、精神分析派に臣事せぬ心理學者のとつてゐる態度である。その一人に、いつもその意見が傾聽に値するレーヴェンフェルトがある。彼はナルチスムスに關聯して私の最初の觀察に遡り、ナルチスムスはそれが眞實の性的昂奮の因となる場合にのみ倒錯と變ずることを認め、精神分析派がそれが同性愛を促す傾向があるといふのには同意するが、しかしナルチスムスを以て自己色情から對象愛へ轉換する常態的な一段階とする見解には賛成できぬことを明かにしたのである。

このナルチスムスを以つて同性愛の因とする見解は、常にフロイド派、殊にサドガーによつて支持されてゐるものであつて、彼は「我々は同性愛を以つて、本質的にナルチスムス的な倒錯だといひ得るのである」といつてゐる。更にサドガーは附言して、倒錯症患者の主要特質は、その自惚（この主張は他の點で正確を缺いてゐる）にあり、彼等のナルチスムスに加へられた毀損を決して赦さぬことにあるといつてゐる。（註八）

註一。オットオ・ランク「ナルチスムス論」

註二。フロイド「ナルチスムス概論」（邦譯全集第九巻「分析戀愛論」所收）

註三。本誌に現在連載中である。

註四。邦譯版全集第五巻「性慾論・禁制論」所收。

註五。「幼兒期異常不脱症」一九二二年刊、第二十二章。ステーケルはナルチスムスを詳細に論述した上、ナルチスムスに幼兒に於ては常態であり、成年者に於ては一定時期に現はれる自分自身に對する戀愛狀態といふ定義を下してゐる。

註六。この現象は極めて數多く記述されてゐる。殊にフォレスト・レードの自叙傳「アポスタート」第十章に優れた記述がある。

註七。しかしアーネスト・ジョーンズは、自己色情は對象を持たぬとし、ナルチスムスは自己といふ對象を持つてゐる點でそれと異るといつてゐる。

註八。ナルチスムスと同性愛との特別な結合は、ステーケル門下のＫ・Ｗ・ゲルスターもまた認めてゐる。彼は同性愛者に於ては、その人格の男性的要素と女性的要素との間に兩極化的傾向が存在し、その兩者の連絡は、ナルチスムスを以つてはじめて行はれ得ると考へてゐる。（「ナルチスムスの同性愛に對する關係」性科學雜誌第二巻、一九二六年所載）

ナルチスムスの本質

大槻憲二

一、ナルチスス神話への種々な解釋

澄明な池の水鏡に映る自分の美しい姿に見惚れて我を忘れ、遂に水中に溺れて死んだと云ふギリシアの半神話的美少年ナルチススの物語は、あらゆる民族の文藝作品中に、永遠の青年として幾世紀の間、謳はれ續けて來た。このやうに種々の時代、種々の民族を通じて詩人たちの間になつかしい内的交渉を持つに至つたナルチススは、彼等の本質の一部分となり、心的態度の代理者となつて、遂にそこにナルチスムスと云ふ語が生れるに至つたのである。傳説や文藝の存在するところ、そこには必ず一團の解説者の附隨するものであるが、ナルチスス傳説の場合もその例に洩れない。併しそこには種々な解釋の可能性を認めて却つて面白いのであつて、一を以て他を一概に排斥すると云ふはいさゝか偏狹に過ぐる場合もある。加何なる解釋がこの傳説に對して加へられて來てゐるかと云ふと、例へば、原始人が水の魅力について感じたところを表現したものであるとか、或はあらゆる美が早期に萎微し消衰して了ふ思想を表はしたものであるとか、或はその眼に睨まれると不幸になるとの所謂邪視の迷信を示したものであるとか、或は冷やかな自己愛の象徴であるとか、或は美少年愛への敵視を警告的に防禦したものであるとか、或は肉體のために靈を痴呆的に犧牲にすることの恐るべき實例であるとか、或は冬期と云ふものを象徴的に粉飾したものであるとか、或は安息と死との惡魔的體現であるとか、或は母權の原則に就いての罪障に對する懲罰であるとか、或は靈と生命とを對立

させることに就いての懲罰であるとか、或は靜的なものゝ象徴化として世界文學の中に發見せられる最も完全なものであつて動的なものをファウストが體現してゐるのと最も對蹠的に對立するものだと云ふ如きである。かう云ふ風にいろ〳〵なむつかしい、觀念論的な解釋を聞かされると、聖書にあるピラトの質問――眞理の證據を目に見せよとキリストに要求したピラトの質問――と同じく、こゝでもそれ等の多くの眞理は何ら證據が擧げてないことを認めないわけに行かない。

證據を擧げてゐないと云ふことは觀念論であると云ふことであつて、これに科學的解釋を下すと云ふこと以外には證據の擧げようはないわけである。さうしてその科學的解釋を精神病理的方面から下すことがやうやくこの十年來試みられて來、今やナルチスムスはギリシヤ神話の一形式であり一遺産であるのみならず、また一般人類に共通なる無意識心理の病根の一種に根差すものである、との認識に到達したのである。これは從前の諸學者の多少の暗示もあるとは云へ、主としてジグムント・フロイドの力に負ふものである。然るに偏狹にして排他的な神話學者や民俗學者たちは精神分析學の研究結果を寛大に取容れることに躊躇し、そのために彼等の方が莫大な學問上の損失を招いてゐるのである。併し古典的な學者の中でも、ドイツ現代の言語學者オットー・キーフェル(Otto Kiefer, Berlin, 1933)の如く、自己愛的なナルチスムスの形は「極めて古代的な神話の一つで、人間心理の最も屢々見られる特徴を甚だ深刻に認識したものであると云つてゐる人もある。果してキーフェルの云ふやうに神話と精神神經症との間に關係があるかどうかを明かにするために、我々はまづ次のやうな課題を我々自身に課して見よう。――第二次仕上げの加はらない、本來の神話の形は如何なるものであつたか? 換言すれば、詩人たちがそこに種々な想像を附加へる以前の純粹の傳説形態は如何なるものであつたらうか? 精神分析の歸結に照してこの神話を認識して如何なる利益があるか? そのやうな關係づけや比較からして得られる唯一可能にしてまた唯一正確なる解釋とは如何なる解釋であらうかと云ふこと。それよりも、一體、從來のやり方のやうにこの神話を或は自然神話的に、或は悪魔觀的に、或は道德的に、或は時代習俗的に、或は人間の型が一對になつてゐるとする說に從つて說明して見ることに何かの意味があるのであ

らうか？　それよりも、それ等の見方や解釋標準を、後代の詩人たちのナルチスティッシュな體驗への評價鑑賞に資するに如何なる程度まで可能であらうか。この事がまづ問題である。

聖書には「太初に言葉（ロゴス）ありき」と書いてあるが、果してあつたかなかつたか、それは誰も知らない。あつたとするのは、我々の理性ではなくて我々の願望である。故にこれはドクマであつて認識ではない。ドクマから出發するところに宗教があり、認識から出發するところに科學がある。我々は宗教の云ふところには、否定も肯定もせぬ。たゞ事實の認識からして、過去を類推する。始めに事實があつて、そこに解釋が加へられる。その事實を人間と云ふ概念でおきかへるならば、始めに人間が生じて、そこに神話が生じて來た。神話があつて、それに人間が適合して出來たとは考へられない。まづ始めに人間がある。その人間がさまぐ〵な體驗を、懷疑を、苦悶を、煩悶をなす。そこで彼はそれ等の心的過程を何とか表白して見ようと云ふ氣になるのである。それ等を現實に投出することに依り自分の祕密や驚異を扮飾しようとする。そこで始めて神話なるものが生ずるのである。然るに出來上つた神話なるものを後世人から見ると、彼が神祕的な、有難い、超現實的な時代の存在を彷彿するものであるかの如くに考へられて來る。それは丁度、我々の夢を我々の生活や經驗から抽象して、それ自身に獨立し遊離した存在として取扱ふが故に、夢が有難い、神祕的なものと考へられて來るのと同じである。併し神話はその最上の形に於いては常に人間には謎として分らぬ神祕なことの象徵的表現である。エディポスの傳說が、フロイドの證明した如く、人類の原始的な精神的經驗の葛藤の物語的形式化であるのと同じに、ナルチススの神話的童話とその悲劇的な最期とは、個々の人類が無意識の仄暗い力と鬪爭して來たところを傳說的な形にして述べたものに外ならない。そこで我々はナルチスムス的神經症の本質と特徵とに就いて述べ、次いでこの病症に關係してゐる神話の意義と形態とに就いて、述べて見たいと思ふ。

二、神經症としてのナルチスムス

フロイドは既に彼以前から臨床術語として用ゐられてゐたこのナルチスムスを採用し、その內容を擴大して人間心理の或る種の異常性を正確に意味せしめたのである。ナルチスムスとは成熟の過程にある人間がその戀愛生活に於いて對象選擇を病的に遲延せしめてゐることを云ふのである。乳兒は本然的にナルチストである。彼等はその肉體的な滿足の體驗から全然自己色情的にその對象を求めるのである。その頃は、自己と對象との區別はつかぬのであらう。例へば母の乳房と自己の指先との間に自他の區別があらうとは考へられない。これを分析は原始的ナルチスムスと名付ける。この原始的ナルチスムスは萬人に於いて無意識的であり、且つ後年になつてそれを想起するの力はないが、それ自身に於いて體驗せられてゐるのだ。漸次生長するにつれて對象は自分自身から自分を世話し哺乳し守護してくれる者へと轉位せられて行く。かくて自己愛から對象愛へと自然に移行する。

　このやうに移行が自然に行はれないのは快樂原則と現實原則との間に遺傳素質的に、又は後天環境的に葛藤が生じ、正常な對象選擇が阻止せられてゐる個人の場合である。遺傳素質と云ふのはこの場合には正常なる性感覺を忌避する既存的傾向（これは昇華的な抑壓が自分の身體に對して加へられるところから來るらしい）か、或は病的素質のために人格感が分裂を來たしてゐること（所謂二重人格コムプレクス）か、何れかである。それ以外の禁制的葛藤は男女の別に依つてその現はれ方は區々であるが、素質的なのは大抵男の場合であつて、女の場合には特に顯著に現れる。このやうに對象愛が阻まれると退行的となり、早期の心理過程の或る點に停滯するやうになるから、第二次的の神經症的ナルチムスの狀態が生じて來る。それは丁度あつものに懲りて膾を吹くの狀態に似てゐる。卽ち現實から不安症的に逃避し、自分の身體の限界に立籠ることになる。今や自分の心身の長所（又は長所と妄信せられたるもの）の知覺が誇張的な快感的體驗となり、さうしてそれが幾度も繰返されて行く。さう云ふ心理狀態を亂すやうな邪魔な觀念は熱心に意識面から排除せられ、殊に熱烈に頑强に排除せられるのは死の觀念である。何となれば、獨尊自愛者にとつて自分も亦死すると云ふことは何ものにもまして最も苦痛な觀念であるからである。もしこの抑壓が首尾よく成功しないときには、死と云ふこと、並びに死と密接に結びついてゐる老年と云ふことが意識にとつて甚だ堪え難い

ことに思はれ、その苦痛を逃れるために一思ひに自殺してしまふやうになることがある。死の恐怖から遁れるために却つて死の懷の中に飛込むと云ふ心理に就いては、私かつて論じたことがあつたが（『精神分析讀本』二三七頁參照）、詩人生田春月の自殺心理の中にはエディポス的要素以外にかう云ふ傾向が多分に含まれてゐたことを認めなければならない。彼は生前屢々四十歳以上には絕對にならぬと豪語（？）してゐたと傳へられてゐる。かう云ふ點に於いてはナルチスムスと鬱憂症とが一つに融合してゐる。鬱憂症者も亦、不斷の死の不安の中に生きてゐるのであつて、それを逃れるために死の中に飛込む。それ故にあらゆるナルチストたちは神祕的な沈鬱の影に掩はれてゐるのである。

例へば、トルストイの如きはその典型的の實例であつて、異常な本能の定着のあつたことは四歳頃まで辿つて行つて見ることが出來る。當時彼は或る日入浴の際に彼の最も幸福な印象を偶然受けたのである。「始めて私は自分の小さな肉體の肋骨の見える胸のあたりを眺め、大好きになつた」と彼は自ら述懷してゐる。彼は後年世人の利己主義を猛烈な勢で難じたけれども、それは彼自身が永遠のナルチストであつて、それを享樂し、決して自分以外のものを愛し得ないことが抑壓せられてあのやうな形をとつて現れたのであらうと或る傳記者は評してゐる。彼を後年に於いてあれほど苦めた大袈裟な死の恐怖は時々自殺の域にまで彼を追ひつめたほどであつたが、その恐怖は生命を失ひはせぬかとの不安に外ならなかつたのだ。さうしてその不安は生活感情が自分の肉體に對する大袈裟な愛情となつて凝縮すればするほど、愈々增大して行くべきことは明かである。

ナルチスムスの今一つの型は英國の文豪オスカ・ワイルドに於いて見られる。彼の小說『ドーリアン・グレーの肖像畫』は彼獨特のナルチスムスを存分に描き込んだ作品である。美術家ベージル・ホールワードはこのドーリアンをまづその古代ギリシアの大先輩の體現として描き現はした。卽ち、「貴君はギリシアのとある森林の靜かな水潦の上に覘き込んでゐるのだ、さうして水の沈默の白銀の中に貴君自身の驚くべき美しい顏を見入つてゐる のだ。」そこで畫家はドーリアン・グレーを實際あるがまゝに活々と描き表はしたので、その畫はドーリアンにとつては別自我（ドッペルゲンゲル）となり、年齡その他さま〴〵の放縱の結果を畫の方で引受け、本人はいつまでも清純な美少年として

殘つてゐたのである。「自分が老いて行きつゝあることを知つたら、俺は自殺する」とドーリアンは力をこめて叫ぶ。さうしてオスカ・ワイルドも常々この言葉を口にしてゐたと云ふことである。第二のナルチススの如くに、ドーリアンはこの謎の肖像を時々接吻し、幾時間もその前に坐して見惚れてゐた。このナルチスティシュな心理的態度の中に――この點に於いてドーリアン・グレーは全然その作者オスカ・ワイルドの生寫しであるのだが――彼の自己中心主義、彼の對他愛の不可能、彼の異常性の根源が存するのだ。女性は彼にとつては單に假りそめの、純粹に動物的な享樂を供し得るに過ぎず、そこには精神的結合の要素は全然見られない。併し、若い男たちに對する彼の關係も、たゞ自分自身及びその複寫への惚込みに一種の代償滿足を供しようとの試みに外ならないのである。このやうに對他愛の不能と云ふ點はドーリアン・グレー及びオスカ・ワイドが一切のナルチストたちと共有するところであつて、その心境はドーリアンが明かに自己認識して作中で次のやうに叫んでゐる。――「人を愛することが出來ないものかなア」とドーリアンはその聲に深い哀調を含めて叫んだ。「併し俺はさう云ふ情熱を失ひ、さう云ふ慾望を忘れたらしい。俺の心持はあまりに俺自身に集中してゐる。」と。

スヱーデンの文豪ストリンドベルグの戀愛生活及びその對婦人態度も典型的にナルチスティッシュな基礎の上に立つてゐる。彼の作『傳說の書』の中に次のやうな個所があるが、そこに明かに現れてゐる。「我々は我々の精神の一片又一片を女に押付けることに依つて彼女等を愛し始めるのだ。我々は我々の人格を二重化するのだ。從前には無關心であり、中立的であつた愛人が我々の別我の衣裳を纏ひ始める。かくて彼女は我等の別我となるのだ。」と。つまり、換言すれば、ストリンドベルクが女に於いて愛し崇拜したところのものは自分の自我に外ならないのであつて、それを彼は愛人として外化したに過ぎないのだ。

以上は文藝家や詩人のナルチスムスであつて、その對象は自分の容貌や肉體が主になつてゐるが、哲學者のナルチスムスは彼の人格や精神と云ふやうな抽象的なものがその對象となつてゐる場合が多いので一見して詩人や畫家の場合のやうに分りよくはないが、その病理性は屢々一層膏盲に入るのではないかと思はれる。

ナルチスムスなるものは何よりもまづ、對象選擇の性心理的段階に於ける一つの問題であり隨伴現象であるから、兩性間のこの選擇の自由が自然や社會秩序に影響せられてゐることが極めて種々雜多な豫備條件となつてゐることは殆ど自明のことである。男には自由決定の凡百の方途と可能性とが開かれてゐるが、女には性及び道德の幾百の拘束と禁制とが臨んでゐる。果してさうであるならば、男は能動性を表はし女は受動性を表はすと云ふ命題はこの場合にも適合するのである。即ち、生活上でも戀愛上でも兩者の關係は男が進取し、女は男が進取し來るのも待つてゐると云ふことになるのである。この事は精神分析學者のみならず舊來の哲學者と雖も或る者は認識してゐたのであつて、例へば英國の哲學者ジョン・ステュアート・ミルの如きも、その思想は今日では勿論時效にかゝつてゐるとは云へ、その『婦人の從屬性』てふ小著の中で大體同じやうな論旨を取扱つてゐるのである。併しながらこのやうに婦人はその對象選擇に於いて男子よりも遙かに自然及び傳統の制約を受けること甚大である故に、彼女等がナルチスムスへと轉落し行くことの危險は男子に於けるよりも大きいのである。何となれば、女が眞にナルチスムスに安住し得るためには以上の如き消極的な條件のみならず、更に積極的な條件（特別の美貌とか優秀な才能とか或は兩者揃つて）が備はらねばならないからである。そこで種々な心理的苦鬪の結果、第一次（幼兒期）のナルチスムスに退行しようとするが、この第一次的ナルチスムスは今や全然新たな條件の下に立つてゐるので、第二次的のナルチスムスへと墮せざるを得ないのである。この第二次的ナルチスムスは第一次のものよりはその衝動に於いて遙かに一面的であり、その效果に於いて一層苦しいものである。そのやうな婦人はたゞ自分自身をのみ愛し、自己を崇拜し、自分の方からは愛し返さずしてたゞ自分だけが愛せられることを好む。かう云ふ婦人は全然結婚に適しないわけではない。やがて寧ろ結婚を望むやうになるが、勿論男への要求からではなく、子供への憧憬からである。子供はやがて自分のナルチスムスの肉體的顯現としてその感情に滿足を與へるからである。併しながら既に存在してゐる（對象愛への）禁制や障碍を强化する要素（男性的性格の才能や天分）が附加せられてあると、いさゝか持合せてゐた結婚要求も押流されてしまつて、寧ろ積極的に結婚忌避の傾向が助長せられるやうになつて來ることは必然である。男性的對象選擇が禁制せら

れ、或は全然拒否せられてある時、それの部分的代償となるのは、道徳的に全然非難の餘地のない友情關係を精神的に高尙な、立派な婦人と共に結ぶことである。併しこの場合とても危險がないではない。と云ふのは、女性心理の常としてマゾヒスムス的從屬及び被虐へと傾いて行くことである。一體、男にせよ女にせよ、宗教的體驗なるものは、卽ち神又は神的なものへの關係は、ナルチスムスの光被圈内に於いて實現せられるものであると思はれる。この方面の研究は心理學者の間に於いて既に相當の成果を擧げてゐる。

以上はたゞ文献的材料の報告に過ぎないが、とにかく病的ナルチスムスが如何なる樣相の下に顯現するかは大體明かになつたことゝ思ふ。醫家の研究に依ると、ナルチスムスは醫學的影響の及び得る限界を示すもので、約言すれば、治療し難いものであると云ふ。今から約二千年前に、無意識的にもせよナルチススの神話を生み出した人々は同じ認識に到達してゐたのであらうか。この問題に對しても亦、これが解決を齎すものは(ナルチスス自身の場合に於けるが如く)たゞ死あるのみであらう。

三、ナルチスムス神話傳説の原型

ナルチスス神話傳説の心理的意義を正確に把握し得るためには、この神話傳説の本來の形を――そこに後世詩人の空想の附加せられる以前の形を――探索し知覺することが必要であることは既に前に論じた通りである。この神話の古代的源泉に就いて述べてゐる文献はその數極めて少く、從つてこれを類別するにさして困難を感ずるほどではない。

一、必ずしも最早期のものであると云はぬが、併し最古の、今日では既に湮滅してゐる文献に就いて述べてゐるものは、西暦二世紀頃の人パウザニアス(Pausanias)がギリシア國に就いて記述してゐる書物に於いて見られる。その書の第九篇第三十一章に次のやうにある。「テスピエの地方にドナコン(蘆の床)と名付くる川あり、そのほとりにナルチススの淵と呼ぶところあり。この水中をナルチススは覗き込みしが、そこに映ぜるを自己の影とは氣付かず、不覺にもその姿にいたく惚れ込み、この淵を愛するのあまり遂にそこに溺れて死せり。さりながら、既に戀を覺え得

べき年齢に達せる人が生ける者と水中の影との區別を立て得ざりしとするは愚かなる事どもなり。」と。

またナルチススの憔れ死んだあとから水仙の花が始めて咲き出でたとする説をもパウザニアスは否認しようとしてゐる。何となれば、この花の事はナルチスス神話發生よりも遙か以前の傳說中に既に現れてゐるからだと彼は主張してゐるのである。

二、その同じパウザニアスが同じ神話の甚だ形の違つたもの丶存在してゐたことを知つてゐたのである。それは後世の批評家たちに依つて大抵は默殺せられてゐるけれども、この傳說の起源を知るためには極めて重要なものである。その傳說に依ると、ナルチスムスには一人の双生兒の妹があつて、それに對して彼は戀愛してゐた。二人は非常によく似てゐて屢々間違へられる程であつた。着物から髮形から同じやうな姿をし、始終くつ丶いて步き、協力して狩獵をする位好きな暇つぶしは彼等にはなかつた。やがて少女の方は死ぬので、生き殘つた少年の方にとつては池の水鏡に自分の姿を映して見るのが唯一の樂みとなつた。何となれば、そこには死んだ愛人と生寫しの顏がありありと見えるからであつた。

三、最後に紹介する形態はキリスト降誕當時に發生したものでコノン(Konon)の傳說書に載錄せられてゐる。因みにコノンは西暦紀元前一世紀の後半の人で或はも少し遲いかも知れないと云はれ、ギリシアの古詩を編纂した。コノンの書中にある話は次の如くである。容貌美しき評判のナルチスス少年は慕ひ寄る多くの人々や若者やを袖にしたばかりでなく、美神をも蔑んだ。ところが、こ丶にアメイニアスなるものあり、彼のみは如何に無愛想に扱はれても冷淡にせられても一向僻易せず、執念くつきまとつたので、ナルチススは遂に彼に色よい返事の代りに短刀を送つたので、彼は失望のあまり極端な自愛家ナルチススの門前で自殺した。それをきいて愛神エロスは機嫌を損じてナルチススを叱責した。そこでナルチススは泉のほとりの水鏡に自分の美しい姿を映し、自分自身の愛人たるべき自分の悲しい運命を嘆じた。自分の境遇と懲罰とを不可解とし泉のほとりで自殺した。それ以來テスピエの人々は愛神をいよいよ畏敬するやうになつた。さうしてナルチスス(水仙)の花はこの美少年の死んだあとから萠え出でたものである

と彼等は信じてゐるのである。

これ以外の諸文献は悉くパウザニアス又はコーン、或はオーヴィドの詩に依據するものであるが、彼等は河神ケフィソスと泉の精レイリエッサ（又はレイリオーペ）とをナルチススの兩親とし、更にナルチススの死んだのは泉のほとり（とパウザニアスとコノンとはしてゐるが）ではなく、水中に沒して溺死したのだとしてゐるが、それ等はあまり重要視するに足りない。中にはコリシウス（Choricius）とセルヴィウス（Servius）の如く、ナルチススは死んだ後に轉身して同名の花となつたと云ふものも出て來た。かう云ふ次第であるから我々はこの傳說の古文獻を心理學的見地から分類し解釋するにさして躊躇することは要らないのである。たゞその前に、二三の一般的命題に就いて論及しておきたいことがある。

抑々神話（ミュトス）には大體二種の別を認めることが出來る。それは人間に關するものと人間の環境（世界）に關するものとである。換言すれば、前者は心理的神話であり、これに依つて人々は自己の內部を照破しその精神構造を認識せんとする。後者は自然的神話であつて、その內には生殖、創造、再生などに關するものも包含せられる。それに依つて人間は外界の謎、事物の關係などを說明しようと試みる。それ以外のものは神話（ミュトス）にあらずして傳說（ザーゲ）である。神話は人間がその發達の或る段階に於いて理性（ロゴス）を以てしては未だ把握しきれず處理しきれないものを何とか解釋し片付けようとする。その姿の現はれである神話は知識への躍進に役立つものであり、傳說はそれ自身として評量する時はたゞ說話的要求の滿足のための古代的形式に過ぎない。さうしてナルチススの話は勿論心理的神話に屬するものである。

四、影に關する原始心理

パウザニアスの傳へてゐるナルチススの神話を讀む者は、それとコノンの傳へるところとの間に一つの重大な相違點の存することを知るであらう。コノンに依ればナルチススは「彼の容貌と彼の形と」を見てそれに惚れ込んだとなつてゐるが、パウザニアスは少年が「彼の影」を見たと云つてゐる。こゝに後世の神話の根柢に横はる原始傳說（ウルザーゲ）（心

理）が見えてゐる。これに依つて我々は古代人の物の考へ方――パウサニアスの時代の人々には既に分らなくなつてゐたに相違ない考へ方――を察知することが出來るのである。自分自身の影は原始人にとつては自分の本質の自然の姿であり、且つ最も早くから存してゐる姿であつたのであらう。何となれば、影なるものは古代人が自分の姿を鏡の中に見るやうになつたよりは遙か以前に自分の身邊につきまとうものとして親しみを感じてゐたであらうから……。

肉體と影とを結ぶ魔術的の結帶はやがて發見せられた。たゞ生きとし生ける者にのみ、立つて行くことの出來るものにのみ影はつきまうのである。死者又は横たはるものには影がない。影はかくて、生命であり靈魂であると云ふことになつた。パタゴニア族（die Patagoiner）やアツテク族（die Azteken）は影は靈魂であると考へてゐた。アロワク族（die Arowaken）は影、靈、姿などの諸概念を現はすためにたゞueja の一語を有するのみである。ヤビム族（die Jabim）は同じ諸概念のために katu の一語を有するばかりである。バストー族（die Basutos）は自分の影が河中に落ちないやうに警戒した、でないと鰐が自分の Seriti（影卽靈）を喰つてしまふであらうことを恐れたのである。支那に於いて、さうしてその影響を受けて日本に於いても、三尺退いて師の影を踏まずとの道德を生じたのも、その無意識根據はそこにあらう。また或る民族に於いては、人間が死に近付くと影が弱くなると信ぜられてゐる。日本に於いても、「どうも影がうすくなつた」と云ふやうな言葉は今なほ用ゐられてゐる。人間のみならず、動物でも、木石でも、一切のものがそれ自身の影を持つことは勿論である。それ故に古代人は萬象は靈を有すると信じてゐた。アニミスムスの根據の一つはそこにあらう。

自分自身から切離された影を水鏡の中に眺めると云ふことは、多くの民族にとつては、生きながら死ぬと云ふことである。そこに因果を認めることは容易であつた。形影分離に依つて靈肉の合致は破壞せられ、肉は死に陷るのである。またもつと原始的段階に於いては、右の如き考へ方の中には水魔がその影を喰つてしまふと信ずる信念が入つてゐた。丁度、右に述べたやうに、バスト族に於いて今日なほ鰐が影を喰つてしまふと信じてゐるのと同じやうに……。

メラネシアの鞍島に於いては、河水を導入した池があつて、そこを覗き込めば必ず死ぬにきまつてゐると云はれてゐ

る。アフリカの或る種族に於いては、水鏡には一寸でも覗き込むことが嚴禁せられてある。インドの最高階級たる婆羅門の間に於いては、水鏡に顏を映じてはならないと云ふことが宗法に依つて定められてゐる。古代ギリシア人の間に於いては別にさう云ふ文律はなかつたが、併し同じやうな趣旨を示す迷信は存在してゐた。即ち、人々が影又は姿を水中に見たと夢見たゞけでもその人はやがて死ぬと信ぜられてゐたのだ。ナルチススの原始傳說はこのやうに久しく神話にはならなかつたが、物語の形式で精神觀、心理說を傳へてゐる迷信ではあつたのだ。「迷信」の語義はこゝでは正しく理解せられねばならない。一切の迷信は嘗ては正信であつたのだ。現實への認識が得られてその「正信」が排斥せられた時、それは迷信として低落するのだ。只今我々が扱つてゐる問題の場合に於いては、當然まだ正信であつたところのものに從へば、水鏡に顏を覗き込めば汝は死なねばならないと事ふわけである。故に、ナルチススはこの禁制を犯したがために死んだのだ。

何時頃この原始傳說が神話化したか、それは勿論我々には分らないし、またそれを證明すべき文献も遺品も何も殘つてゐるわけではないが、併し論理的に推定して見ても、ギリシア民族の精神的發展のある時期に於いて、「人間心理の最も屢々見られる特徴を甚だ深刻に認識したものだ」(先に引用したるオットー・キーフェルの言)と云ふことが分つて來て、これを神話に組成するやうになつたのであらうと考へることが出來る。

五、古代ギリシャ人のナルチスムス觀

ナルチスムスの本質に就いては我等既に詳述して來た通りであるが、併し古代ギリシア人がナルチスムスの心理狀態の存在を果して意識してゐたかどうか、それを自他に就いて經驗し、且つこれを問題として考へたことがあるかどうかと云ふ問題に對しては我等は次の如く答へることが出來るであらう。古代ギリシアの住民たちは戀愛に就いてはあらゆる形式あらゆる種類を承知し親熟してゐた。高尙な夫婦愛から、結婚外戀愛、自由戀愛、姦通戀愛、近親戀愛、美少年愛、レスボス(地名)的亂倫戀愛に至るまで、即ち純粹の生殖的戀愛からその正反對の犧牲的な、沒我的な、

超性慾的戀愛に至るまで、悉くこれを知つてゐた。その間にはまた靈肉合致的な娼妓戀愛と云ふのもあつて、その對象は精神力に滿ちた、教養のある藝者の如きもので、日本の江戸時代の遊女や明治時代の俠氣ある藝者などを相手とした戀愛などもこの類の一つと見られるのではないかと思はれる。また神の化身として獸類を愛するのもあつた。これはわが國の葛の葉物語の如き人獸婚譚に似たものかと思はれる。この他、魔術的戀愛と稱する神祕的な戀愛もあつたらしく、この方面の生活の如何に光彩陸離たるものがあつたは想像に餘りがあるのであるから、ナルチスムス的自己戀愛が彼等の戀愛生活の一種として多少とも意識せられてゐなかつたと考へることが寧ろ無理であると云ふことが出來るであらう。併しギリシア人がナルチスムスを一種の「神經症」として呼んでゐたとは考へられないと共に、ナルチスム的戀愛が近代人の文化中毒の結果として生じた精神病理であるとのみは斷じ去るわけにも行かないであらう。實際、人間精神のあらゆる歪曲、變形は最古の文明人と共に古いことは丁度、癌腫、盲腸炎、消耗性疾患、又は老耗性腐骨疽などに於けると同じであらう。近代になつて必ずしもかう云ふ病氣が急に始まつたのではなく、たゞこれを正當に認識し病因として發見したのが近代の功績として擧げらるべきであらう。

ギリシア人の戀愛生活を全面的によりよく理解するためには、さうしてその中に於けるナルチスムスの位置と意義とを一層よく知悉するためには、我々はまづ次のことを眼中に置く必要がある。即ち、もしフロイドの所定に從つて、人々が性的牽引を感ずる相手を性對象と呼び、性本能に驅られて爲すところの行動を性目的と名付けるならば、これ等二種の概念は古代ギリシア人と近代歐州人とに於いては非常にその價値的內容を異にし、否むしろ正反對であつて、古代ギリシア人に於いては性目的が性對象の上位に置かれたに對し、近代歐州人に於いては性對象が性目的よりも重視せられてゐる。この事は近代歐州人に於いてのみならず、その影響下にある現代文化的日本人に就いても同樣に云へるのである。ギリシア人は本能に奉仕すること神への如く、かゝる本能崇拜に依つて我々には劣等に思はれる對象をも高め、感覺を快適ならしめることが出來たのである。然るに我等近代人にとつては高き、貴き、骨折り甲斐のある對象なるが故にやうやく動物的に卑しき本能行爲をも爲すを是認せしめるのである。このやうに考へて見る

と、古代ギリシア人がその廣汎自由な戀愛觀の中に於いてナルチスムスに自然な位置を承認してゐたことが一層よく理解せられるのである。

以上縷述して來た通りであるから、ナルチスムスは精神神經症ではないまでも、變態の戀愛態度であり、性的貧困であるとは、古代ギリシア人も考へてゐたに相違ないのである。ところでかゝる戀愛心理現象を粉飾表現するに用ゐた神話は、一切の神話傳說が然るが如く、集合的無意識の顯現である。かゝる神話は民族の全般に亙つてゐたところの種々の葛藤や難問の解決を努めるものである。何となれば、一切の戀愛するものが自分自身に就いて、また自分の身近の者についてそのことをまざ〳〵と感ぜしめられる次第だからである。では、そこに努められたる葛藤解決の方途は如何？　如何にしてこの神話はその最古の永遠の任務を正しく果すであらうか。個人の文化的調整を民族的全般性の中に反映し、それに隨伴し、それを促進することが如何にして出來るであらうか。それに對する答辯は次の如くである。――第二次のものはともかく第一次ナルチスムスは近代の精神病學の經驗したところでは凡そ人間の治療法では齒の立たないものであり、何とも救ひようのないものであると。そのことは一九一三年度の『精神分析及び精神病理學的研究年報』の報告するところである。このギリシア傳說もまたこの癖を「不治」なるものと裁斷し、たゞ死のみがその解消の途なりとし、たゞ死後に身代りの美しき花を萠え出でしめて纔に慰めとしてゐるのである。ナルチストはギリシア人の感覺にとつては愛するに足るべき、誰にも分る、民族性の一部分であつたのだ。そこには別に不快なものや反感を覺えしめるものはなかつた。そこにはこの神話に見られる通りの優しい美しさがあつた。そこには或る特殊な人間の最高の完成の美があつた。そこには人々がまたしても示す無意識を端的に表現する不幸なる少年の愛すべき卒直さがあつた。そこにはまた死と墓とを超えてこの物語の詩美と香氣とを救ふ華やかさがあつた。併しそれにも拘らず、ナルチスムスはよく實る樹にある枯枝の如きもので、對象に興味がなければ當然社會生活の目的には協はないと云ふ重大な缺陷がある。ギリシア人も優美なる手向の花（水仙）を以てその死を弔したのであらう。死を弔したと云ふ意味は、そこに再生の願望を寓したと云ふことである。靈前や佛前に花を供するのもその意味であらう。*

註。拙著『一茶の精神分析』の中に一茶の俳句「撫子や地蔵菩薩のあとさきに」を分析鑑賞した中に「撫子」の花を一茶の死児の再生願望を寓してゐるとの解釋を下しておいたが、その心理機制は人類普通的であることがこゝに明かになると共に、私の分析鑑賞の妥當性がこゝに證明の一端を得たことにもなるであらう。

但し花の象徴は實は直接には母胎の象徴であつて、その花が(パウザニアスの報告によれば)「蘆の床」と名付ける川に咲出たと云ふことは愈々偶然ではなくなる。何となれば床は女(母)の象徴に外ならぬからであつて、それはわが「寢覺の床」*の語源の無意識的動機と揆を一にするものであらう。

註。「寢覺の床」の再生的意義に就いては拙著『分析家の手帖』を參照ありたし。

以上は『イマゴー』誌一九三五年度第三册所載ルドヰヒ・プファンドル(Ludwig Pfandl)氏稿『ナルチススの概念』に依據しつゝ、私の所見を附加したものであることをこゝに斷つておく。(完)

ヂョヴァンニ・セガンチイニ

精神分析的研究（カアル・アブラハム）

岩倉具榮譯

フロイド及びその學派の精神分析的研究は心理生涯の類型的現象に新しい光りを投ずる。無意識に對する之等の研究から、吾々は藝術的創造を支配する法則に就て重大な結論を引出すことが出來るのである。『レオナルド ダヴィンチの幼兒期回想』*と稱する、フロイドの近頃の一論文は、その他の價値もさることながら、この巨匠の藝術的個性に重要な透視を與へた。一方、未だ何人も精神分析家の見地から創造的藝術家の全生涯と心理的個性の考察をなし、又は彼の藝術の中に如何に無意識の影響が現はれてゐるかを明かにしようと企てたものはないのである。現代の創造的藝術家の間にあつてヂョヴァンニ・セガンチイニは力強い獨立の個性として際立つてゐる。彼の發展、その外部的又內部的生活、彼の藝術、彼の作品は極めて判然と個性的であるので、それ等は心理學の

原著者序文

ヂョヴァンニ・セガンチイニの生涯と藝術に就てはフランツ・セルヴェス（Franz Servaes）の手に成る澤山の斷片的記事と尨(ぼう)大な傳記とがある。オーストリア政府によつてセガンチイニ記念出版として公刊されたのであるが、それには普及版のものもある。セルヴェスは凡ゆる方面から、人として又藝術家としてのセガンチイニを美事に描寫してゐる。それ故吾人は本論に於てセルヴェスの美事な描寫以上に出でようとするやうな了見は毛頭ない。吾々の問題は自ら別途にある。吾々の目的はセガンチイニの特異性をもう一度記述し直さうと云ふのではなくして、それ等を心理學的に說明せんとするにあるのである。

前に未解決な諸問題の全部を提示してゐる。之等を精神分析學の見地から見るのが、著者の目的である。

註。邦譯フロイド全集第六巻『分析藝術論』の內に收載。（譯者）

この新しい方法によつて藝術家の心の生活を分析しようとするのは醫者ではないか、醫者に藝術家の心理が分るかと讀者は云はれるかも知れない。現に、精神分析學はその發達の過程から云つても元來の目的が心の不健康な狀態の未知の根原を見出すことにあつたのだ、そして斯學はやがて間もなくそのやうな狹苦しい範域を越えて心理生活の多種多様の狀態への效果多き研究方法であることが分つて來たとは云へ、矢張その主張者の仲間は主として醫者ではないかと云ふのが、讀者の懸念の理由である。分析によつて神經症患者の無意識に就て完全な知識を得てゐる醫者は、他の觀察者よりも斷然有利な立場にある。彼は神經症患者の研究から自分によく分つてゐる多くの心理的特性を藝術家の中に見出す。この論文の目的と精神分析學の醫療的用途との間には重要な差違のあることは勿論である。醫學的心理療法家は患者と協力して共通の仕事を行ふ。徐々に彼は患者の無意識に深い洞察を持つやうになり、患者が供する助力に依つて彼の材料にある偶然のギャップを滿し得るまで待つてゐればよいのだが、もはや生きてゐない人間の心理生活を分析するとなると事情が違ふ。この時は殆ど最もよくそれ等に相應する經驗と比較することによつて、與へられたる材料を說明しなければならない。

その作品、ノート、手紙、又は他人によつて集められたものなど、セガンチイニの遺品材料には、自然ギャップがなくもない。それ故私の分析も凡ゆる問題に解答を與へるわけに行かないだらうといふ事實は、自分でもよく承知してゐる。とは云へこれだけの材料でやつて見てやれないと云ふ理由にはなるまい。セガンチイニの豐かな個性は稀有にして魅力的な多くのものを提供してゐるので、我々は彼の分析研究の試みを放棄するに忍びないほどである。セガンチイニの様な優秀な藝術家、偉大なる人間は、彼の同時代人たる吾々が彼の生き方と習慣とを探索してそれ等を諒解せんと試みるべき當然の義務があるわけである。

一、幼兒セガンチイニとその母親の幻影

一八九九年九月廿八日にセガンチイニは死んだが、その死は、彼の創造的活動のさ中より彼を奪つたのであつた。たつた十日前に彼は『アルプス風景』の三幅對の中央部を山頂で完成するためポントレシナ近くの羊山に登

つたばかりであつた。この最後の大作は彼にとつて單に高山の光榮をたゝへるより遙か以上のものであつた。何故なら、彼の藝術觀は決して、彼が認識したものを正確に再現するだけに止まらうとしなかつたからである。藝術は藝術家の最も親炙してゐる思想と感情とを表現すべきであると彼は信じてゐた。この理由のために彼は自然を慈愛ある恩惠者として、胸に幼兒を抱く母、人間的な母として、又動物的な母として描いた。彼は目覺め行くあけぼの、目覺める自然、人類の創生を描き、凡ゆる生物をその發展の頂點に於て描き、遂に日の終り、凍つた自然と人間の最後を描いた、かくて最後の傑作に於いて彼は凡ゆる生物の自然に對する共通の關係と彼等の共通の運命とを、嘗ての何れの作に於るよりも更に强固に表現した。

セガンチイニは以前には凡て之等のものを、個々に又はいろんな風にまとめて描いた――而もそこに常に新しい變化を與へつゝ……。かくして彼はその永遠の傑作たる『母』、『アルプスの春』、『エンガーディンの耕作』、『母國への歸り』、その他澤山のものを制作した。而も尙彼はその最後のものとなるべきもう一つの傑作を描く切望を感じた。この人生の交響樂の中に彼は彼にとつて人生の本質的意義と價値を現した凡ゆるものを表現しようと望んだ。

我々は藝術家のこの考へを決して繪そのもののみを證據として想像すべく强ひられるのではないのだ。彼は又この考へを文字で表現したのである。時々彼は繪筆をペンと代へて自分の藝術の本質に對する解釋を他人の意見に對立して辯護しようとした事がある。死ぬ一年前、彼はトルストイの『藝術とは何ぞや』の問題に答へを綴つた。この解答で彼は如何なる藝術作品でも倫理的觀念をその基本に持つてゐることの重要さを大いに强調した。藝術行動は彼にとつては一つの聖儀であり、勞働、愛、女性、死などを光榮化し變貌すべき一つの宗教である。セガンチイニ自身の言葉を用ひれば、こゝにこそ、常に彼の藝術的創造の流れを十分に供した泉がある。

他の藝術家達も勿論同じ源から靈感を引出したのである。併しセガンチイニにとつて凡て之等の泉は一つの川に流れ込み、明らかに廣く分離した諸々の思想のグループは實際に於いて必然的に關聯してゐたといふのがセガンチイニの個性の特質である。セガンチイニの生涯を一瞥すれば、彼の個性は彼の藝術を支配した同じ法則によつて支配されてゐたことが分る「彼の成就した事、彼の生き方は、何處からこの傾向を受けてゐるのかと云ふ點を假りに問題にするならば、模範と教育は何等積極的役割

をしてゐないことは確かだ。何故ならセガンチイニは五歲で既に兩親を失つたのであつた。彼の若い時の境遇は彼の精神又道德的發展の何等の助けにもならなかつた。彼は別に正當の敎育を受けないで成長した。そして彼の義兄弟（や義姉妹？）の亂暴な取扱の下に送つた數年も、矯正學校で送つた數年も、彼に洗練となる影響を及ぼしたとは期待出來ない。彼の若い時は少ししか太陽の光りを惠まれなかつた。それは不親切な環境に對する絕えざる爭鬪であつた。彼の藝術思想、その性格、彼の人生觀、殆ど凡ては、彼が自分一人で創り上げねばならなかつた。

精神分析的研究方法のみが彼の發展のこの謎に對して正當な解決を下し得るのである。何故ならこの方法はその觀察を幼時期の本能に基づけるものであるからだ。そしてこの方法を適用するに當つて、權威あらしめるために私はセガンチイニ自身をして語らしめよう。彼は或る手紙の中でかう書いてゐる。「野生の自然の間に於いて殆ど野蠻な生活を送つてゐたに拘らずその中でどうして私の思想や藝術が發展し得たかとのお尋ねですが、實は私にも何とお答へしていゝか分らないのです。多分滿足すべき說明を得るには、人はその根原に下りて、かくて魂の凡ゆる感情を、最初の、さうだ、幼時期の最深の微動をまでも研究し分析せねばならない。」と。

かくして、この藝術家の忠告に從つて、私は彼の幼年時代に歸る。セガンチイニの幼年時代に於る最も重大な事件は、母の若死であつた。彼がこの損失を被つたのはやつと五歲になるかならぬ時であつた。セガンチイニの樣な愛を以て母の記憶をはぐくんだ幼兒は殆ど稀である。そしてこの愛は年と共に益々大きくなつた。彼の母は段々理想の存在、女神となつた。息子の藝術は彼女への崇拜となつて捧げ盡された。かくも早く孤兒となつた彼はその全靑年時代を通じて何等の愛情を知らなかつた。彼が所謂母性の畫家となつたのはこの缺乏のためであつたらうか。彼は人生では決して享受しなかつた理想をその藝術の中で作つたのであらうか。說明はこれで判然してゐるやうに思はれるが、實はまだ不完全だといふことが間もなく分つて來るであらう。

いとけない時に吾が藝術家と同じ不幸に惱む子供達は多い。併し乍ら、普通、彼等は、その損失の重大さを殆ど諒解せず、間もなく慰められ、又大人達が何か死者に就いての思ひ出を語る時にだけその人の事を思ひ出す。たゞ時として思ひ出や子供らしい感情はそのやうに容易に消されないことがある。併しセガンチイニの場合は少し樣子が違つてゐるやうである。彼は決して母の面影を忘れない。彼の空想はその面影を發展させて遂に知的世

界全體の中樞たらしめた。この消極的な動機——母に世話して貰はなかつたことだけでは母性理想がこの樣に優勢になつたわけを說明することは出來ない。この力の根原を何處に求むべきかは、セガンチイニ自身が最も明白に指示してゐる。吾々は彼の自傳の始めに次の言葉を見出す、「私は私の母を思ひ出の中に保つてゐる、そして彼女がもう一度この瞬間私の前に現れることが可能なら、私は三十一年後の今日でも尙これこそ私の母だと認めることが出來ると信ずる。私の心眼には疲れて步いてゐる母の丈高い姿が、尙もありありと見える。彼女は美しかつた、茜さす朝や眞晝の樣ではなくて、春の夕暮の樣であつた。母が死んだ時には未だ二十九歲にもならなかつたのだ。」と。成熟した人間の之等の言葉の中には何等母に愛されたことや世話して貰つたことなどは言及せられてゐないことを注意せられたい！　そして彼の母の死と共に明けた悲しい時期の記述を吾々が讀む時に、彼が母と一緒に送つた幸福な時とそれに續いた悲しい年との間の相違が如何に大きかつたかに就いてさぞ何とか書いてあるだらうと期待してもそれは無駄である。之に就て一言も書いてない。それどころか、彼は全く違ふことを語つてゐる。卽ち母の美と姿體・動作、身振、又は若さ、その繪姿がいつも彼の心の目の中にあるあの母について……。

上の引用文中に「私の母」の三字が略されてあつたと想像して御覽なさい。さうすれば人々はその行（ライン）の意味の說明を求めねばならない。唯一の可能の說明は、愛する者が失つた愛人について語つてゐるといふことであらう。かく解することに依つてのみ用ひられてゐる言葉に含まれた感情の深さが說明され得るのだ。

この大人の言葉の中に吾々は幼兒の愛情生活を聞く樣に思はれる。息子の愛情生活の最初の表現は常に母に向けられるといふ說は精神分析學の見解に依つて吾々には既に物珍しくはなくなつてゐる。之等の愛の感情は、五歲位迄の幼兒期にその特質が全く偏見を持たない觀察者には明白であるが、幼年時代が進行する間に段々その特徵的外貌が變化して來る。幼兒の原始的愛情生活は純粹に主我的であつてその對象を無制限に所有しようとし、それに對して若し他人がやはり近づいて快樂を得ればそれを妬む。そこには愛と同じく憎しみの表白がある。衝動と本能とが未だ訓練されない時期には、少年の愛は攻擊的な、むしろ殘酷な傾向とさへ結び付く。

神經症者の心理を硏究して見ると、或る人々にあつては之等凡ての衝動が特に強い形で存在することが明かになつたのである。後年に强迫神經症にかゝる人々の幼兒

期には極端な例が見出される。彼等の本能生活は愛と憎しみの感情が絶えずまざり合つてきびしい葛藤（カツトウ）を起すといふのが、その著しい點である。この樣な場合には兩親に對する壓倒的な愛と共にその死を望むまでに至る憎しみの感情が存在することが常に必らず見出されるのである。

代償と昇華との過程による之等諸本能の禁壓は、常態者の場合及び神經症者の場合にも共に幼兒期の次の數年間に續いて現れる。この樣にして社會生活上重要な抑壓が形造られ、それに依つて本能の力は壓縮せられ、又はある場合にはそれ等は全く消滅せしめられて了ふか、或ひは他のもつと愛他的の目的に向けられるか、何れかである。個人の心的傾向の如何に依つて、この性的精力の一部は、心的活動は、例へば、科學的又は藝術的活動に變形せられる。本能本來の力が大きければ大きい程、個人が本能の要求に完全に屈する前に必要な昇華が愈々烈しく愈々完全になるのである。

從前信ぜられてゐた意見とは違つて、兩親に對する原始的感情は、例へば愛憎の表現と丁度同じに、幼兒の性的感情から起るとの意見が受容せられてゐる。個人は後に、父と母の名譽のため、文明の要求に從はねばならない。戒律は人に兩親を愛する樣に命じては居ないことを注意して御覽なさい。何故なら之は只、憎しみの感情を禁じてゐるに過ぎないのであらうから。戒律は、同じ程度に於いて、愛と憎しみの兩方に反對してゐる。それは、兩方とも本質的には性的表現であるからだ。愛憎ともに近親姦禁止とは葛藤する。さうしてそれ等兩者の共通の昇華から沒性的崇拜の感情が生ずるのだ。

それなら吾々はその完全な精神化がセガンチイニの作品に特徴的の刻印を與へてゐる母性崇拜が、性的根據に基くことを諒解すべきであらうか。精神分析學の研究はこの問題に對して決定的に肯定の答へを與へることを吾々に許す。成程、前にも述べた如く、この知識の大部分は神經症の研究から得られたものには相違ないから、セガンチイニの個性を論ずに當つて吾々はこの經驗を利用する前に多少自分自身を是認しておかねばならぬ。兩方の場合に吾々は本來的に變態の力の本能を持つてゐるが、その本能は特に完全な代償と昇華とによつて完全な變化を被つてゐるのである。藝術家と神經症者は共に現實には只一本の足を踏入れてゐるのみで、他方の足は彼等自身の幻想の世界に踏入れてゐる。神經症者の場合には彼の押除けられた本能はその病氣の徵候となつて變形されてゐる。藝術家の本能はその作品に表現せられるが、併し作品にだけ現れるわけではない。吾々は常に藝

術家の中に神經症者の特徴を見出す。彼はその押除けられた本能の昇華に於て決して完全に成功してゐない。その本能は、ある程度まで、いつも神經症的現象を生ぜしめてゐる。セガンチイニの場合もこの通りである。

神經症者を精神分析して見て分つたところであるが、代償の過程は少年の感情に重要な轉位を生ぜしめる。過度に強いエロティックな關心は彼の意識の中では、彼の面倒を見てくれた母に對する感謝的、崇拜的の愛によつて置き代へられる。一方で、近親姦的感情は抑壓せられ、他方で母性の評價が甚だしく强調せられる。* 母性に對するこの埋合せ的賞被りは、特にセガンチイニに於て强い、丁度吾々が神經症者の中にそれを見出す様に……。

註。この過程と關聯してゐる別の效果に就いては後節に論及するところあり。

後に論ぜらるべきあれやこれやの表白から見ると、セガンチイニの幼兒性感は、愛と憎しみとの極端な感情の中に彼の母に向けられたが、後にはそれが完全に昇華せられたといふ結論に達する。この性感は精神化して、私が見る如くんば、母の崇拜、母性の深い禮拜、凡ゆる創造物を抱擁した無我の對他的愛となつた。

精神症者の場合と丁度同じ様に、セガンチイニに於いて時たま、抑壓された本能の爆發を見るのである。幼兒の本來的性愛は完全に昇華されるわけには行かない。もつとおだやかな形で現れるとは云へ、時たまにその徴候が觀られる。セガンチイニがその母について與へた描寫の中には性愛的要素を認めないわけに行かない。勿論その性愛的要素には恐るべき洗練の過程が明らかに見られはするが……。藝術の力をかりて彼は母の姿を靈化し、又それを凡ゆる世俗的の感情の上に高めようとした。セガンチイニの最も美しい一聯の作品には、母親が胸に抱く幼兒をやさしく眺めてゐる所が描いてある。之等の作品は何れも、ほつそりした、若々しい女人の姿、かゞみ加減の姿勢と纖細な美しい顏に依つて觀者を魅了する。之等の繪はセガンチイニ三十歳當時に作られ、その時彼はグロイブンデン地方のサヴォーニンに住んでゐた。この頃彼はモデルなしに、全く空想から種々の繪を創造した。それ等の二つは吾々にとつて大變興味のある特別の境遇で構想された。

セガンチイニは吾々に語つて曰く、嘗てばらの花を見て殆ど肉感的な感情を覺え、それがなかなか忘れられないのだと。徐ろに花瓣をむしりながら、彼はばらの様な若々しい顏の幻を見た、この幻に動かされて、彼は肺病で死んで行く少女がばらの樣に美しい若い女に變形された初期の繪を描いた。

こゝにも一つ同じやうな實例があるがそれを考へる時吾々はこの出來事をもつとよく諒解することが出來る。この記述はセルヴェスの傳記から得たのだ。「セガンチイニがある日——自分でさう云つてゐるのだ——高い山の最後の坂を上つてゐた時、頂上からたつた數歩の所で彼は大きな花を見た。それは明るい青い空からくつきりと浮き出して見えハッキリと影繪の樣になつてゐた。それは大變美しい花の樣に思はれ、彼はその色を今迄かつて見たことがない樣な氣がした。傾斜地に平らに横はつて彼はその美しいものを見つめた。その時それは空の全部の光りを受けて獨り立つてゐた。すると花は、云はゞ、彼の眼の前で巨人の樣になり、彼の想像の中で、魅力ある人の形となつたのである。大きな莖は曲つた枝となり、その上にブロンドのばらの樣に美しい若い女の坐つた姿が凡ゆる魅力を見せて休み、その膝には裸の子供が抱かれてゐた。子供は手に暗赤色のリンゴを持ち、花からとび出した丈夫な雌蕊が正にそれに當つてゐた。セガンチイニはかくてこの幻を描きそれを『アルプスの花に』と名付けた。後に彼はその繪を『愛の果實』と改名した。」

この藝術家は直ちに花の美とずつと前に死んだ母の美とを聯想した。この瞬間花と母とは彼にとつて同一であつた。彼の目の前で花は聖母の繪姿となる。この空想にエロティックな背景のあることは、現にこゝに見られる如き、人間想像の凡ゆる創造につきまとふある象徴の意味を見逃さないものには特に判然たるものがあらう。

セルヴェスは正しくも次の如く云つてゐる。即ち『愛の果實』といふ繪の中の子供の姿は、弱々しく見える母と對照して、如何にも強壯で健康さうなのが注意を引くと、かくも生々と見える子供の形をとつて、この美術家が自分を母の側に描いたといふことがあり得ようか。セガンチイニが生れた時は大變弱かつたので、彼は內輪で洗禮を受けねばならなかつたといふ事實は之の反對を語つてゐる樣に思はれる。ところがもう一つ別の事情があつて吾々の假說を肯定する。自傳に於て彼は云つてゐる。「私の誕生は母の健康を弱める原因となり、その結果五年後に母は死んだ。この病弱から回復するため母は四年目にトリエントに行つた。が、その治療も彼女には何の役にも立たなかつた。」若い妻は回復しなかつた、そして亡くなつた。その間に彼女の力を奪つた子供は大きくなつて母よりも長生をした。

併し乍ら、こゝに引用した言葉は尙もう一つの理由のために注意する價値がある。愛する人の死の原因となつたといふ考へは神經症患者に屢々起る。既に述べた如

く、神經症患者の子供らしいリビドーは强い憎しみの感情がその特徴である。之等は愛する人の死の空想となつて表現せられ、若し後者が本當に死ぬなら、滿足の感情を現し、殘酷な喜びをさへも現す。後に抑壓の力が生ずると、神經症患者が打ち勝つことの出來ない罪障感が起る、たとへ彼の意識的記憶では之等の自己非難に對する何等の理由を見出せないにしても……。彼は父母の死に責任があることで自らを責める、併し彼の子供らしい罪は禁壓された幻想と感情にのみ存する。之等の自責に對してはやがて、わが害惡をつぐなはふとの試みがなされる。强迫神經症では、特に之等の試みが極めて誇張される。愛する人の思ひ出は、後光に取りまかれて、過度に强められた愛を以て懷かれる。又はさうでなければ、意識から死の事實を追ひ出し、そして死せる者を空想の中に生きがへらせる試みがなされる。

彼自身が吾々に語つてゐる幼兒期の一事件に依つて見ると、セガンチイニにとつて母崇拜は幼兒期に於いて彼が抱いた不親切な殘酷な感情に對して作り上げた補償であつたことが明かに分る。「私が何か描かうとして初めて手に鉛筆を執つたのは、ある女が近くのものにかう云つてゐるのを聞いた時であつた。『おゝ！　あの子の繪姿を作つておきたいなア、あんなにも美しい娘であつたのに！』と。之等の言葉に深く動かされて私は若い、絕望してゐる或る母親の美しい顏を見た。そこにゐた女の一人は私を指して云つた、『この子供に描かして御覽、この子は大變上手ですよ。』涙にあふれた、若い母親の美しい眼が、私の方に向いた。彼女は何も云はなかつたが、死の部屋に入つて行き、私は彼女の後に從つた。ゆりかごの中に一歲以上とは思はれない可愛いゝ少女の身體が横たはつてゐた。彼女の母は私に紙と鉛筆を呉れたので、私は描き始めた。私は數時間も描き續けた、母親は少女が生きてゐた時の通りに描いてくれる樣に私に賴んだ。藝術的見地から見てその繪がどんな出來振りであつたか私は知らないが、一瞬間その哀れな女は悲しみを忘れてゐる樣に思はれた程幸福に見えたのを私は覺えてゐる。併しその鉛筆は哀れな母の家に殘つてゐた。そして何年も經つてから始めて私はもう一度素描を取上げた。併し多分この事件が芽になつて、後に私はかう云ふ方法でやれば感情に表現を與へ得るとの考へが生ずるやうになつたのであらう。」

この少年に氣高い、情け深い感情があつたので、それによつてこの最初の藝術作品が出來たのだと說明することは全く單純であらう。人間としてのセガンチイニは特別この樣な感情には銳敏であつたことを特に吾々は知つ

てゐるから。併しさう云ふ風に解釋したのでは、この事件に關する本當に注意すべき事實を見失ふであらう。

セガンチイニはその時正に十二歳であつた。それ故恐怖の感じなしに死體と一緒に何時間も止まることが出來たといふのは私には驚くべきことに思はれる。恐怖や哀れみの如き反應は殘酷の感情の昇華を通じてのみ幼兒期の內に段々發展して行く。若しも殘虐の感情が並はづれて强いと、他人の苦しみに對して哀れみの感情が特に强く、死の恐怖感も相當なものとなる。セガンチイニの場合には、之等二種の感情が後年の生活に於いて特に强く見えてゐる。併し彼が死んだ子供を描いた時には、この方向の昇華過程は勿論大したことはなかつたのだ。そこでかう結論することが出來る、卽ち十二歳以後にも特に强い殘酷の要素が昇華の完全に行はれることの邪魔になつたのであつたと。

上述の場面に於て殘酷の要素は子供の死體を見、母の悲しみを見て滿足を覺えたのである。併し彼の同情感は美しい若い母を喜ばせて彼女の悲しみを輕くするために繪を描くことによつて滿されてゐる。

その事件を語りつゝセガンチイニは自分の母の事を述べた時のと同じやり方で、若い女が美しいと二度云つてゐる。彼の前にそこに立つてゐる女は直ちに、彼の空想では、轉嫁に依つて自分の母の代償となり、彼の內部に藝術衝動を目覺めさせることになつた。母を喜ばすために彼は藝術家となる。セガンチイニは、神經症患者の樣に、自分の母の死を望んでその償ひをしなかつたから、今この他所の母に對して償ひをしようとしてゐるのだと想像するなら、その話の別の條でこの想像の當つてゐる事が確かめられる。死體の側に數時間を坐してゐた理由は悲しめる母の希望により死んだ子供を生きたものとして表現するためであつたと、セガンチイニは云つてゐる。して見ればこれは、云はゞ、死者をよみがへらせる技術であつたのだ！後年に彼は藝術の力によつて何度も母を生きかへらせようとした。吾々は今や諒解する、自分が幼兒期に犯した罪のためにその懺悔を少年に課する成人の行動がそこにあることを。この行動は强迫神經症患者が――勿論違つた方法でゞはあるが――自分に懺悔の行爲を課するのと非常によく似てゐる。

之等の最初の模索的な試みの內に數年は過ぎたが、その內にセガンチイニは絕望的な境遇の壓迫の下に素描を放棄すべく余儀なくされた。遂に彼はミランのブレラ・アカデミーに首尾よく入學することが出來た。彼自身の空想から今や仕上げた最初の繪は、素描に對する最初期の子供らしい試みと主題に於て大變よく似てゐたので、

その時から一日も經つてゐなかつたと信ずることも出來る。彼が描いた繪は死か母性かを現はしてゐた。セガンチイニは、アカデミーの學生として、最初に仕上げて『ニオベの頭』は展覽會に出品した。それは子供の死に對する母の悲しみを非常に生々と現してゐたので、その繪がセンセイションを起したと云はれる。

この頃セガンチイニは急に肉體的にも精神的にも成長しつゝあつた。この年代は幼兒期の第二期に眠つてゐた凡ゆるものを人間の中に代償と昇華を通じて發動させることを吾々は知つてゐる。それは若者が愛を傾けてゐる人に對して決定的の態度を取る時である。彼がその本源的感情を以て幼兒期の愛對象に定着するか、又はそれから身を引いて之等の感情を同じ年頃の者に移すかどうかゞ決定されざるを得ない。この時期の間に彼がどの程度まで本能を抑壓して變形するかも亦決定される。

セガンチイニにはずつと前に死んだ母に對する愛の感情の又しても燃え上るのを吾々は特に見出す。この樣なリビドーの定着は恐るべき性の抑壓に導かれるやうになり、その結果を吾々はセガンチイニの生涯と作品を通じて認める。彼の生涯のその時期に關する報道を見ても、吾々は若い藝術家について一般に期待せられてゐる樣な變愛事件を一向聞かないのである。それどころか、彼は女の前では赤くなり恥づかしがる方であつた。彼は會話では默つてゐて凡ゆるいやな言葉を避ける點では彼の同時代者達と違つてゐた。この事から吾々はセガンチイニの本能生活が禁壓されてゐたことを知る、又母に對する直接のリビドー定着に基いてのみこの事實は說明され得るのである。

二十二歲になる迄彼は初戀を經驗しなかつた。最早期の幼兒時代からその青年時代まで、彼は眞の初戀――母への愛――によつて完全に支配されてゐたのであつた。今でさへ母への愛はその力を示してゐた。セガンチイニの場合には、彼の慾望の目的物の撰擇に關して最も普通でない禁制を吾々は見出す。彼は、普通の若い人々の樣に、他の人間と關係して後に別れるやうなことは出來なかつた。彼の最初の撰擇は又最後のものであつた。吾々が神經症患者の中には遭遇するこの單婚(モノガミイ)への傾向は、セガンチイニに於て全く驚くべき形で現れてゐる。

二十三の時(一八八一年)にセガンチイニは初めてエロティックな主題の繪を描いた。そしてそれはさういふ型(タイプ)の最初にして最後のものとなつた。――その後に描かれた二三の田園風景は例外として……。彼の友人、カルロ・ブガティを通じて、セガンチイニは友人の妹ベアトリチェにモデルになつて吳れる樣に賴んだ。彼は中世の貴族

の女の衣裝で彼女を描いた。鷹が彼女の左手にとまり、右手で彼女はその鳥に餌をやつてゐる。その繪は『鷹を飼ふ女』といふ名を持つてゐる。その繪は、一目見れば畫家が戀愛に陷つてゐたことが分るとセルヴヱスは云つてゐるが、それは正しい。そして、實際、セガンチイニは戀愛に陷り間もなくこの美しいモデルと結婚した。

彼のベアトリチェ――親戚間の愛稱ではビチェ――に對する愛は母に對する愛の樣に熱烈で變らなかつた。彼の結婚生活には藝術家の結婚にありがちな樣子は少しもなかつた。このことのため私は單にセガンチイニがよい夫であつたと云ふのではない。彼の生活の最後迄彼は生涯の友と情熱的に愛し合つた。時々彼等が別れてゐた時、セガンチイニが妻に書いた手紙は、この證據を與へる。そこには青春のほとばしりの樣なひゞきがある。それ等の中に隱されてゐる感情は彼が自傳で母のことを書く時の場合の一つを思ひ出させる。

吾々はこゝに、いと珍らしい出來事を見出す、卽ちセガンチイニの生涯の凡ゆる愛は早期の結婚の限界內に含まれてゐたといふことである。併し乍らこの藝術家の極めて力強い本能は、昇華された形で無限の人々にまで達することを許される場合にのみ、かういふ風に限定されるものに止まり得たことは明らかである。彼はその性愛に於ては極めて單婚的であつたからこそ、彼の精神的の愛は凡ゆる人、凡ゆる自然に向けられる事になつたのであつた。

こゝで吾々は姑く筆を止めねばならない。吾々は生長した人間の藝術と生活に對する之等本能の影響を分析に附さうとしてゐるのだ。併し吾々は彼の生活に於る母と同樣父の重要さをしらべないで、彼の靑年時代に別れを告げるわけに行かない。（未完）

譯者附言――

右はフロイドの高弟カール・アブラハム（Karl Abraham）の論文 Giovanni Segantini, ein psychoanalytischer Versuch. Schriften zur angewandten Seelenkunde; H. XI, P. 65. Wien: Deuticke, 1191 を Dorothea Townshend Carew 女史の英譯せるものから重譯した。女史の英譯は米誌『精神分析季刊』昨年度第四冊に掲載せられた。こゝに譯したのはその序と第一節とであつて、なほ數回連載せねばならぬ。何と面白い內容ではないだらうか。アブラハムは分析學への幾多の貢獻を遺して一九二六年（昭和元年）に死んでゐる。その偉材たることはこの論文を一讀して疑ふ餘地がない。彼の論文の邦譯せられたるはこれを以て最初とす。

夏目漱石の精神分析（神經症より精神症へ（一））

―果して漱石は狂人なりや？―

北山　隆

一、則天去私への傾向

既に度々述べた通り、漱石の神經症は修善寺の大患を契機として、殊に大正年代に入つてから、確に著しい變化を來（きた）した。それはあらゆる點に於て違つて來た。常識的な語意に於る「内向」の傾向は愈々その度を高め、又その言動は甚だ宗教的となつた。

之は彼が從來から奉じ來つた合理主義とは全く背馳する物であつた。彼は元來が烈しい宗教反對論者であつたのである。

「神は苦しまぎれに捏造せる土偶のみ、人間のせつなの糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃んで安しと云ふ」（吾輩は猫である、狂人天道公平の手紙）

「僕は禪坊主だの、悟つたのは大嫌だ」（同右、迷亭の言）

「無信心な彼は何うしても『神には能く解つてゐる』と云ふ事が出來なかつた。もし左右いひ得たならば、どんなに仕合せだらうといふ氣さへ起らなかつた。彼の道德は何時でも自己に始つた。さうして自己に終るぎりであつた」（道草）

「知らざるを知らずとす、是知らざるなり、知らざるを知るとす、飽くまでも知るなり」（三十四年斷片）

といふ執拗な研究的合理主義を主張してゐた彼は、今や突如として一種の宗教雰圍氣の中に沒入せんと試みるのであつた。もとより其の宗教は、彼の父母への愛憎（エディポス・コムプレックス）からしても、また自己本位的感情の强さからしても、決して他力本願に傾く筈はなかつた。甚しい自力本願、即ち禪宗に近似せるもの――いはゆる「則天去私」がそれで

あつた。

漱石はこの言葉を最も多く用ひ、其他に「我師自然」、「自然隨順」、「自然法爾」等の言葉をも用ひたが、意味は共に異るものではなかつた。

之等の言葉を漱石が用ひ出したのは、彼の死の直前、即ち大正五年に入つてからであつたが、之に至る傾向は隨分と早くより表はれてゐる。少年時代から、現實よりも風月を愛した彼は、神經症に惱む度に之を免れる唯一の方法として、自然の靜寂へと目を向けた。神經症發作の甚しくなる都度、彼が自慰的な南畫を書いたのも、實はその爲であつた。

「近頃非常ニ不愉快ナリ、クダラヌ事ガ氣ニカカル、神經病カト怪マル、然シ一方デハ非常ニヅーヅー敷處ガアル、妙ダ、酒々落々光風霽月トハ中々ユカン、駄目／＼」（三十四年七月、日記）

「只出來るものは自分の心丈だからね、心さへ自由に修業したら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平氣なものではないか」（吾輩は猫である、八木獨仙の言）

「鈴木の藤さんは金と衆に從へと主人に教へたのである。甘木先生は催眠術で神經を鎭めろと助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ろと說法したのである」（同右）

「無理を通さうとするから苦しいのだ。つまらない、自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つてゐるのは馬鹿氣てゐる。（中略）と前足も後足も頭も尾も自然の力に任せて、抵抗しない事にした。次第に樂になつて來る。苦しいのだか、有難いのだか見當がつかない」（同右、猫が水甕の中で溺死する所）

「與し易い男だ――健三は他から斯う思はれるのが癪に障つた。彼の神經は、此癇癪を乘り超えた人に向つて、鋭い懷しみを感じた。（中略）けれども彼自身は何うしても其域に達せられなかつた。だから猶さういふ人が眼に着いた。又さういふ人を餘計尊敬したくなつた」（道草）

明治三十年代の彼は、右の如き「消極的悟り」の境地の安易と樂天とを充分に知つてはゐたが、自ら之に沒入する氣にはなれなかつた。

實際に劣等であり乍ら、之を自ら知覺する事を禁制して平然たる人、自己本位感情の最も高められた人――を、彼は羨望し尊敬した。併し自分が其處に至らうとは試みなかつた。當時の彼は、まだ／＼世と爭ひ不正と戰つて、自己の勝利を確保せんとする自信を有したのである。

併しやがて修善寺の大患は、彼に一大轉換の機會を與へた。彼が「消極的悟り」に自ら近づかんとする強い傾

向を示したのは、實にこの頃からであつた。

「私は今、道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にもせよ、道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません、冷淡で道に入れるものはありません」(大正二年六月書簡)

「自分の今の考、無我になるべき覺悟を話す」(大正四年三月二十一日、日記)

「私は私相應に自分の分のある丈の方針と心掛で、道を修める積です、氣がついて見ると、すべていたらぬ事ばかりです、行住坐臥ともに虚僞で充ち〳〵てゐます」(五年十一月十日、即ち死の一箇月以前の書簡)

「變な事をいひますが、私は五十になつて始めて道に志ざす事に氣がついた愚物です。其道がいつ手に入るだらうと考へると、大變な距離があるやうに思はれて、吃驚してゐます」(同右)

而して彼が、「則天去私」の語を明かに口にしたのは死の僅か一・二ケ月前からであつたらしい。故に彼の之の語に對する解釋が如何なるものであつたかは、甚だ把握し難い。先づ從來の說を參照して見ると、小宮豐隆氏は次の如くに云はれて居る。

「漱石の一生は漱石を奪ひ合ふ、自然と人間との戰であつたと云つても可かつた。漱石が晩年そのモットーとした『則天去私』の境地は、漱石が自分の中のこの自然と人間との對立を、もう一つ高い立場から、一つのものに止揚しようとした境地であつたに外ならない」(漱石襍記)

右の批評は哲學的・價値觀的に過ぎて些か不明瞭である。次に松岡讓氏が大正五年十一月初旬の木曜會に於て、漱石の口から物語られた「則天去私」につき、當時の記臆を辿つて書綴られた物がある故、之を參照しよう。

「あるものを、あるがまゝに見る。それが信といふものではあるまいか、例へば今こゝで、そこの唐紙をひらいて、娘が顏を出すとする。ひよいと顏を見ると、どうしたのか娘が無殘やめつかちになつて居たとする。普通なら大騷動をするだらう。しかし今の僕なら、多分あゝさうかといつて、それを平靜に眺める事が出來るだらうと思ふ。『そりや先生殘酷ぢやありませんか』凡そ眞理といふものは、みんな殘酷なものだよ。(中略)頭の中では死を克服出來たと信じて居ても、やつぱり其場になつたら、死ぬのはいやだらうよ。それは人間の本能の力なんだね。『すると悟りとは、その本能の力を打ち敗かすことですか』さうではない。それに順つてそれを自在にコントロールする事だらうな、そこにつまり修行がいるんだね。(中略)漸く自分

も此頃になつて一つのさうした境地が出た。『則天去私』と自分ではよんで居るのだが、つまり普通自分々々といふ所謂小我の私を去つて、もつと大きな、謂はゞ普遍的な大我の命ずるまゝに、自分をまかせるといつたやうな事なんだが。すべてが一視同仁だ、差別無差別といふやうな事になるんだらうね、今度の『明暗』なんぞはさういふ態度で書いてゐるのだが」(漱石先生)

右は松岡氏の記憶によるものであるから、確と漱石の言と一致してゐるかどうかは、保證の限りでない。併しこの言を信用するならば、漱石の云ふ「則天去私」には宗教的色彩が案外、稀薄な様であり、むしろそれは分析的「悟り」の態度に近い物の如き感を與へる。

「あるものをあるがまゝに見る」とは、いらざる批評や無用の願望を加へぬ所の、科學的態度であつて、そこに退行的分子の含まれざる限り、之は誠に立派な人生観と云はねばならない。もし漱石の「則天去私」が、右の態度に全く合致すると考へるならば、吾々は漱石に對し、何等の言を加へる必要がない。齢五十にして、遂にこの境地に達した彼、漱石に大なる敬意と慶賀の意を表するばかりである。

しかし此處に怪むべきは、右の言に於て漱石が「則天」といひ「去私」といひ、また「大我」「小我」等の宗教的言語を用ひてゐる點である。

眞に分析的、或ひは科學的「悟り」の境地に於ては、(吾々は宗教臭の濃い「悟り」といふ語すらを避けたいのであるが)吾人は「大我」とか「小我」とか云ふ物を認める必要がない。況んや「天」なる物に則つたり、むやみに「私」を去つたりする必要は更にない。もし眞に則るべき物あり――とするならば、それは吾々の眼前に存在する所の現實以外に、あり得よう筈はない。

もし、「天」とは全ての現實をも、また全ての人間精神をも共に含む所の、曰く言ひ難き物である――といふ如き説明を、敢てするならば、之は明瞭に宗教的誇大妄想に屬すべき物となる。「現實」と「人間の心理」とは、決して左様に密接な關係にある物ではない。

而して人は、この現實生活に障害を及ぼさゞる限り、自己の私をも常に捨てねばならぬ理由は、斷じてない。人はその心的精力配置を大破せざる範圍に於て、驚くべき時に驚き、悲むべき時に悲んで一向に差支ない。然るに漱石は現實に菲ずして天に則り、之が爲には全ての私を放棄せよ、と命ずる。之が果して科學的「悟り」に該當するであらうか！ まして漱石が、あの、一方に於ては憤慨に燃え、他方に於ては人の愛をのみ求めた漱石が、眞の意味に於る「あるものを、あるがまゝに見る」

態度に忽焉として轉向し得たとは吾等の殆ど考へ得ざる所である。

「道義に重きを置かざる萬人は、道義を犧牲にして、あらゆる喜劇を演じて得意である。巫戯ける。騷ぐ、欺く、嘲弄する、馬鹿にする、踏む、蹴る（中略）喜劇の進歩は底止する所を知らずして、道義の觀念は日を追ふて下る」（虞美人草）

「清濁併吞ムト云フ事ハ、（一）清濁の區別ノ出來ヌ人、（二）感覺の鈍イ人、（三）是非ニ關セズアル事を成就セントスル人（中略）右ニヨツテ見レバ、人ヲ容レルト云フ人ヨリモ人ヲ容レヌ人ノ方ガ健全デアル。高尚デアル純潔デアル」（三十九年斷片）

「世の中の事が自分の思ふ樣にばかりならない以上、そこに自分以外の意志が働いてゐるといふ事實を認めなくてはなるまい」「認めてゐる」「さうして其意志は君のよりも遙かに偉大ぢやないか」「偉大かも知れない、僕が負けるんだから。けれども大概は僕よりも不善で不美で不眞だ。僕は彼等に負かされる譯がないのに負かされる、だから腹が立つのだ」（行人、Hさんと一郎の對話）

「吾は日本人なり、天下の民なり。日本を擧げて吾を容れずんば天下に行かん。天下を擧げて吾を容れずんば天下を去らん。天下を去るは己を屈して天下に容れらるゝの耻に優る。一人の朋友なきを憂へず、只卑しきを耻づ。妻子なきを憂へず、只陋なるを耻づ。父母兄弟なきを憂へず、只出れるを耻づ」（三十八九年斷片）

と全く神經症的に現實を憎惡し輕蔑し無視し、唯無意識的願望に擡ぎ上げられた理想我（彼の所謂、道義）にのみ忠實であつた彼が、そして又、

「義務さへ素直には盡して吳れぬ世の中に、斯んな贅澤を竝べるのは過分である。さうとは知りながら余は、好意の干乾びた社會に存在する自分を、切にぎごちなく感じた」（思出す事ども）

と世の好意のみを求めた彼が、何うして右の如き豹變を爲し得る物であらうか？

神經症研究の實際よりしても、吾々は斯樣な轉向はあり得べからざる事を主張する。そして人一倍の幼兒的憤慨屋であつた漱石が、今度は極端なる「冷靜」を唱へ出した態度に、憐憫の混合せられた滑稽をさへ感ずる。

二、「自　然」と「天」

さて「則天去私」は正しく「科學的悟り」とは遙かに相異るものであつた。彼が則つた所の現實に非る「天」が——現實以外には個人心理が存するのみであるが故に

彼自身の內部に存したであらう事は、自明の理である。

吾々は一歩を進めて、この「天」に則した境地がそも〳〵如何なる物であつたか、を追究しよう。遺憾にも、漱石は之に對して殆ど何等說く所がない。しかし吾々は、之に最も近似するが如き態度を『行人』の一郎の言に於て發見する事が出來る。一郎は友人Hさんに向つて次の如く云ふ。

「君でも一日のうちに、損も得も要らない。善も惡も考へない。たゞ天然の儘の心を天然の儘、顏に出してゐる事が一度や二度はあるだらう。僕の尊いといふのは、其時の君の事を云ふんだ」

更にHさんは一郎（兄さん）を評して云ふ。

「兄さんは神でも佛でも何でも、自然以外に權威あるものを建立するのが嫌ひなんです。それではニイチェのやうな自我を主張するのかといふと、左右でもないのです。『神は自己だ』と兄さんが云ひます、「僕は絕對だ」と云ひます。（中略）兄さんの絕對といふのは、哲學者の頭から割出された空しい紙の上の數字ではなかつたのです。一度此境界に入れば天地も萬有も凡ての對象といふものが悉くなくなつて、唯自分丈が存在するのだと云ひます。さうして其時の自分は有るとも無いとも片の附かないものだと云ひます。偉大なやうな、又微細なやうなものだと云ひます」

神經症に飜弄せられた一郎は、最後の手段として右の如き境地、卽ち天然自然に還つて「自我卽世界」の絕對境を獲得せんと欲したのである。

之は明かに「則天去私」に相近き物である。但し「則天去私」の哲學に於ては、單なる「自然」よりは更に道德的色彩の濃い所の「天」を押立て、一郎の肯ぜざる所の「自我(私)を去る」といふ消極的態度を奉じてゐる。併し乍ら、いづれにせよ之等は共に、現實に失敗し、神經症に困憊したる者が外界への興味、(卽ち、對象リビドー）を引揚げ、現實を無視して專ら自己本位的感情の高揚に努める態度である。而して引揚られたる心的精力（リビドー）が內部に氾濫して、こゝに自我の偉大を基とする誇大妄想を形成した事は疑ない。この場合、峻嚴なる理想我（良心）は幼兒的な無意識（エス）と和解して、「自然」といひ「天」といふ形によつて結合せられ、現實に對する種々の願望（私）を排擊せんと試みる。

右の如く、內部に於る心的精力（リビドー）の氾濫が誇大妄想を將來する事實は、知力喪失症（パラフレニー）（早發性痴呆症（デメンティア・プレアコックス）、及び妄想症（パラノイア）を含む）獨特の機制であつて、漱石に於ては旣に明治三十年代から、その傾向が見られる。

「裏の木にカツレツ來りて鳴く事頻なり。源三位賴政

に命じて射て落す。既に食饌に上す。傍に韓退之あり。一片を頒たん事を願ふて曰く『閣下一朝の饗を廢するに及ばずして……』言下に痛棒を與ふる事三十」(三十七八年斷片)

「門前の溝を渫つて金とんを得る事一升二合、食ふ事三日三夜にして曰く、金とんでもあるめへと、決然釣竿を肩にして百本杭に至る……天才余の如きは綸を垂るゝ事瞬時、忽ちフライ二尾蒲鉾二棹を得て歸る。既に雞の尻よりオムレツを出す方法を考ふ。遂に成らず」(同右)

「西郷の首を卸ろし、團子の串に日本一の美人の首をさして、東京市の紀念とす」(同右)

「凡ての男を呪ひ、凡ての女を呪ひ、凡ての草凡ての木を呪ふ。凡ての生けるものを呪ふ。三世を坑中に封じ、六千世界を微塵に摧き去る地球破滅の最終日、我胸中にあり」(同右)

これらの一部は『吾輩は猫である』の中に、狂人「天道公平」の言として書かれてゐるが、右は決して單なる滑稽ではない。之は外界との戰に苦しむ者が、不本意ながら内部に退却し、そこに於て故意に心的精力(リビドー)を氾濫せしめ、悲惱なる誇大妄想によつて、自我の偉大を死守せんとする憐むべき態度である。

註。特に右の如き「世界滅亡の空想」は知力喪失症(パラフレニイ)の最も顯著なる症候である。

勿論この場合は、その退却が一時的であり、また意識的に滑稽化せられてゐる。即ち未だ外界に對し、長期抵抗を試みる氣力のあつた漱石は、倘ほ外界への興味(對象リビドー)を全く引揚げるに至つてはゐない。

然るに、彼が「天」に仕へる事を考へる様になつてからは、この傾向即ち、外界を無視して之に何等の反應を示さゞる所の知力喪失症(パラフレニー)的傾向が彼の全てを支配する事となつたのである。

吾々は既に、漱石の云ふ「天」が、彼の誇大妄想の所産に外ならぬ事を述べた。然らば此の大膽なる斷定は、何によつて下し得るのであらうか? その根據を些か說明せねばならない。

先づ吾々は「天」の前身なる「自然」彼の最も愛した所の「自然」の意味を尋ねよう。

彼が幼時から甚しく自然を愛した事は既に度々述べた。この愛はやがて『草枕』となり、俳句となり、南畫となつたが、之が最も明瞭に示現せられて居るのは、彼が晩年に多く作つた所の漢詩であらう。

「栽松人不到」「幽居人不到」「不愛帝城車馬喧」「故山歸臥掩柴門」「曾見人間今見天、醍醐上

味色空邊」「孤臥獨行無友朋、又看雲樹影層々、白浮薄暮三叉水、靑破重陰一點燈、入定誰聽風外磬、作詩時訪月前僧、閑居近時多幽志、禮佛只言最上乘」

　これらは漢詩の一部又は全部であつて、右の如き自然が彼の最も好む所であつた。それには次の如き特徴がある。卽ち「靜寂」「無爲無人」「密迫（取圍まれてゐる事）」であつて、之は雷や地震や暴風雨を吾々に與へる所の自然とは、全く意味を異にしてゐるのである。

　然らば、彼の所謂「自然」が、何の故にかゝる非現實的な意味の內に、限定せられてゐるのであらうか？　筆者は江戶ッ子の彼が、眞の恐るべき自然を知らなかつた爲であらう――とさへ考へたが、實は彼の「自然」が元來、自然その物に非ずして、何物かの代償であり、象徵であつたからに外ならないのである。

『行人』の一郞は之を裏書きするが如き言を發してゐる。

「己は昔から自然が好きだが、詰り人間と合はないので、己むを得ず自然の方に心を移す譯になるんだらうかな」

　つまり自然は人間の代償である、といふ事になる。之を漱石自身に訊けば、

「僕も國があつて山があつて、河があつて家があつて、最後に金があつたら嘸よからう。然らずんば胃病で近々往生可仕候、頓首」（三十七年書簡）

と、自然は故鄕を意味する事を語る。併し、彼に於る「自然」を最も明瞭に物語る物として吾々は更に明治三十六年の彼の英詩 "Silence" を引出さう。

"I hail from the Kingdom of Silence, Where I knew
no sun, no moon, No man, no woman, no God even,
I lived in Silence and Silence reigned all.
What a difference to me now! Oh! my life!

Once I had a mother, A fond and tender mother
had I,
who gave me joy and hope and everything bright,
But she is gone now! Oh! my life!

Once I was young: I saw a stream of gold,
All was mellow, warm and beautifull,I seek
within and there are voices, I seek without and there
are rushes, In vain I seek within and without;
Silence is not there!

Silence! Ask me why he is so dear?

Because Silence is bliss. Ask me why Silence is bliss?
Because he is perfect. Oh my life!
Better than the best things we posseses, sweeter
than love we call divine, Dearer than Fame,
Power and Riches, I weep for him
that is no more. Oh my life!』

彼の渇仰して止まぬ「静寂(サイレンス)」と「無爲無人」の最も幸福なる境地は、そも／＼何物であつたか？ 右の英詩は何と雄辯に之を解釋する事か！も早や贅言を要しない。それは、かの安易極まりなき、自己感情の最も完全に保有せられたる「嬰兒」の生活であり、之を可能ならしめた所の母の姿であり、そして最後には、更に一期を溯る所の、最も密迫せられたる環境であつたのである。

文化を嫌惡し、奔走を怖れた彼が、何の故に「自然」を口にして退き走つたか？ その理由を吾々は、今や此處に於て明確に見る事が出來る。彼の云ふ「自然」とは、現實に存する自然に非ずして、彼の内にある所の、誇大化せられたる「幼兒の幸福」を象徴的に表現した物であつたのである。

さて此の「自然」なる物は、其後に於て「天」の語を以て置換へられるに至つた。勿論、兩者の間に大なる相違はなく、「自然」は「天」の中に包含せられる物であつたらしい。併しそこには、確にある差違が存する。こゝに吾々は「天」の特性を追究せねばならない。

漱石は「則天去私」を唱へる數年前から、「天意」「天の法則」といふ言葉を用ひてゐた。『それから』に

「彼（代助）は三千代と自分との關係を、天意によつて――彼はそれを天意としか考へ得られなかつた――醱酵させる事の社會的危險を承知してゐた」

「平岡に都合が惡からうと、父の氣に入らなからうと、賽(さい)を投げる以上は、天の法則通りになるより外に仕方がなかつた」

「今日始めて自然の昔に歸るんだ、と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃にない安慰を總身に覺えた。何故もつと早く歸る事が出來なかつたのかと思つた。始めから何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔の中に、純一無雜に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた。利害はなかつた。自己を壓迫する道德はなかつた。雲の樣な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸(ブリス)であつた。だから凡てが美しかつた」

そして代助は三千代に次の如く云ふ、

「然し僕は、さう生れて來た人間なのだから、罪を犯

す方が僕には自然なのです」（以上圏點北山附之）と、懲罰を安んじて甘受するのである。卽ち親友平岡の妻を遮二無二うばひ取らんとする、吾々より見れば、明白なエディポス的願望の遂行が——そして之に伴ふ懲罰が——彼にとつては「美」であり、「安慰」であり、また「天」の道であるのだ。

無意識よりの願望と、理想我（良心）よりする所の懲罰との間に於る、一種の「和解」「結托」こそは漱石の「天」であり、漱石に最上の幸福を與へる物であつた。彼の「自然」が最幼兒期（又はそれ以前）への退行を目的とするに反し、彼の「天」はエディポス期への退行により、母を奪はむ願望と懲罰との雙方を共に滿足せしめんとする物であつた。そこには一種の道德的色彩が加つてゐるが、「自然」も「天も」共に無意識と理想我との和解によつて得られる所の自己感情の高揚、卽ち悲愴にして且、憐むべき誇大妄想に屬する點に於て、何等の差違はない。

註　「天」といひ「自然」といふ、二つながら現實に存せざる所の物——漱石が萬全の美と力を求めんとする物——を、吾々は誇大妄想と認める。それは現實にあらざる所の、誇大化せられたる個人の觀念であるが故に。尙ほ之の時期に於る漱石を、以前の鬪爭的な漱石に比して、

一種の勝利者であり偉大なる人格であつた——と語る人が世にはある。併し、かゝる種類の、現實に背を向けたる勝利者は、多く瘋狂院に存在するものである。

併し乍ら、右の如き誇大妄想は、そこに外界との交渉が存する限り甚だ保ち難い。外界の現實は、漱石の願望遂行に對し、常に强力なる障害と假借なき非難と、怖るべき懲罰とを以て應へるからである。

こゝに於て漱石は、「自然」に卽し「天」に仕へんが爲に——彼の幸福と理想我への忠實の爲に——彼を現實に於て圍繞する所の嚴然たる外界をすら、無視し、否定し、全ての外界への興味（卽ち對象リビドー、よしその對象が空想的であつたにせよ）を、自我に向つて引揚げんと試みたのである。

現實との戰ひに敗れた漱石は、外界に對する煩はしさを避けんが爲に「片目になつた娘」に對しても何等の反應を差向けざらむ爲に、現實への知力を悉く遮斷せんと試みたのである。

「人と自然との對立を止揚した」のではなくて現實の人を排斥し、內部の近親的愛情と理想我とにすがりついたのである。卽ち神經症（不安ヒステリー）より精神症（知力喪失症）へと陷込まんとしたのである。

かくして吾々は、漱石の「則天去私」が知力喪失症的

傾向の所産である事を斷ぜざるを得ない。

註　轉嫁神經症とナルチス的なる精神症との差違について、念の爲に理論的説明を加へるならば、前者に於ては「自我が現實に適應せん爲に無意識の一部を抑壓する」に反し、後者に於ては「自我が現實のある部分を離れて無意識の内に沒入する」ものである。（フロイドに依る。）

以上によつて、筆者の云はんとする所は一先づ盡したつもりであるが、更に右の如き漱石の傾向が、その文學に於て、又その日常生活に於て、實際上、如何に示現せられたかを觀察する事も、また必要であらう。

三、『明暗』藝者、禪僧

先づ則天去私文學『明暗』に於て、彼は何を「天」とし、何を「私」として批判するのであつたらうか？

一體『明暗』の事件は主人公津田が京都の父から毎月の仕送りをして貰ふ事から始まつてゐる。

「今月は何時もの通り送金が出來ないから、其方で何うか都合して置けといふんだ。年寄は是だから困るね。そんなら左うともつと早く云つて呉れゝば可いのに」

しかも津田は父に返すべき金を、一向に返濟しない所から、次の如き事態を招來する。

「父の怒りは彼の豫期以上に激しいものであつた。月末の不足を自分で才覺するなら格別、もしそれさへ出來ないといふなら、是から先の送金も、見せしめのため、當分見合せるかも知れない、といふのが父の實際の考へらしかつた」

しかし漱石は、この經濟的不始末などを以て津田を責めようとはしてゐない。むしろ津田が其の爲に右顧左眄し小細工を弄して自己の社會的面目の維持に汲々たる態度を續ける事に、鐵槌を下してゐる。

「他に對して面目を失ふ事、萬一そんな不始末をしでかしたら大變だ。これが彼の倫理觀の根柢に横はつてゐる丈であつた。それを切り詰めると遂に、外聞が惡いといふ意味に歸着するより外に仕方がなかつた。」

つまり漱石は、下らぬ社會的名譽や外聞の爲の道德を「私」として排斥するのである。

而して又、一方に於ては津田がお信といふ妻君を愛して（少くとも表面的に）親や妹を無視し乍ら、しかも曾て愛した清子なる女への未練をも斷ち切れず、甚だ煮え切らない態度を持する事に對しても、漱石は非難の矛を差向ける。津田の妹お秀は兄を評して、

「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂さんは又、兄さんに可愛がられる丈なんです。あなたの眼には外

に何もないんです」と云ふ。即ち漱石は、近親者を離れ、近親愛を無視する者を甚だ憎むのである。

要するに『明暗』に於て漱石が非難する「私」とは、現實への忠實（それは惡い意味に於てのみ表示せられてゐるが）の事であり、「天」とは幼兒的理想我と近親愛（即ち幼兒的感傷的愛情）への忠實を意味するのであつた。——

次に漱石の晩年に於る生活が如何様であつたかを考察しよう。大正四年頃からの彼の生活は、確に明治年代のそれと大なる相違を示してゐる。第一に彼は多病であつた。從つて文筆を執る期間も少くなり、讀書も減少して學者としての彼の影は、甚だ稀薄になつてゐた。彼の日課としては、事務的に小説を書く事、漢詩を作る事、俳畫南畫及び「書」をものする事、謠の稽古などがあつた。

しかし乍ら、彼の晩年に於て吾々の最も注目すべき物は寧ろこの他にある。藝者及び禪僧に對する異常なる興味が之である。「藝者と禪僧」とは甚だ珍妙な取合せで、丸で判じ物の様であるが、賢明なる讀者諸氏は直ちに、それらの間に一種の繋がりの存することを洞觀せられるであらう。

先づ藝者であるが、元來が漱石は若い時から藝者に對して無關心ではなかつた。彼の從兄の所で（從兄の家の隣が藝者屋であつた爲に）よく藝者と遊んだらしい。『硝子戸の中』に、

「私は其頃まだ十七八だつたらう、其上大變な羞恥屋（はにかみや）で通つてゐたので、そんな所に居合しても、何も云はずに默つて隅の方に引込んでばかりゐた。それでも私は何かの拍子で、此等の人々と一所に、其藝者屋へ遊びに行つて、トランプをした事がある。負けたものは何か奢らなければならないので、私は人の買つた壽司や菓子を大分食つた」

とある。『吾輩は猫である』にも藝者への興味が散見せられる。

「寶丹の角を曲ると一人藝者が來た。是は脊のすらりとした撫肩の恰好よく出來上つた女で、着て居る薄紫（うすむらさき）の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。」（主人の日記）

「酒許りぢやない。交際をして、道樂をして、旅行をしろといつた……道樂もいゝさ。桂月が勸めなくつても金さへあればやるかも知れない……さうかしらん。夫（それ）ぢや道樂は追つて金が這入り次第やる事にして、今夜は是でやめやう」（妻君との對話）

等とある。之を小説に於る滑稽の爲の滑稽と見る人も

あらうが、四十二年七月五日の日記に

「又青樓に上りたる夢を見る」

とあるのを考へると、さう簡單には行かない。

さて、この漱石が大正四年三月十九日、京都桃山に居を構へた津田青楓氏を訪ねて京都へ行き、「大嘉」といふ宿に泊つた。（下以『漱石の思出』に於る夏目夫人の談を混合して説明する）

所が東京を發つ時、祇園にお多佳さんといふ有名な文學藝者がゐる。今では大友といふ御茶屋の女將だが、この女に是非あつて御覽なさいとすゝめられてゐたので、その女に逢つて見ると、話が如何にも面白く、一中節が得意で大變漱石の氣に入つた。それから暇な時にはよく遊びに來て、話を聞いたり一中節をきかせて貰つたりした。いゝ遊び相手だつたのでせう、そこへ「お君さん」「金之助」さんといふ二人の藝者が、是非あひたいと云つてやつて來る。金之助さんはきさくな滑稽屋で、自慢の御座持藝者といつた女でした。さうして一週間ばかり遊んでゐます中に、腹を惡くして臥せてしまひ、その間に畫帖や短冊を書き散らし、お多佳さんと駄洒落のかけ合ひをやつてゐました――と。

漱石が歸京したのは四月十七日であるから、途中で病臥はしたものゝ、約一箇月の間、藝者を相手に弄れたり、下らない書畫を書いたりして暮したのである。甚だ退行的な傾向と云ふべきであらう。

そして其後も、何通かの綿々たる手紙を彼女達に送つてゐるのである。

「お前は僕を北野の天神樣へ連れて行くと云つて、其日斷りなしに宇治へ遊びに行つてしまつたぢやないか（中略）君の字は讀みにくゝて困る。それに候文でいやに堅苦しくて變てこだ、御君さんや金ちやんのは言文一致だから大變心持よくよめます。御多佳さんも是からサウドスエで手紙を御書きなさい」（四年五月）

「あなたは親切な人でした。夫から話をして大變面白い人でした（中略）しかしあの事以來、私はあなたもやつぱり黑人だといふ感じが胸のうちに出て來ました。美しい好い所を持つてゐるあなたに對して、冷淡になりたくないからこんな事をいつ迄も云ふのです……私はあなたと一ケ月の交際中に、あなたの面白い所親切な所を澤山見ました……是は黑人たる大友の女將の御多佳さんに云ふのではありません、普通の素人としての御多佳さんに、素人の友人なる私が云ふ事です（中略）私はあなたの先生でもなし、教育者でもないから、冷淡にいゝ加減な挨拶をしてゐれば、手數が省ける丈で自分の方は樂なのですが、私はなぜだか、あ

なたにさうしたくないのです。私にはあなたの性質の底の方に、善良な好いものが潜んでゐるとしか考へられないのです」（同、多佳女へ）

「晝はさうは行きません、大變時間がかゝりました。出來榮丈では勞力の程度は分りません。いくらまづくても、非常に手數のかゝつたものと思つて下さい。私はひとが千圓やるからと云つても、こんな面倒な事はやりやしません。全く約束の爲の好意だと思つて下さい。夫から此次京都へ行つても、もう何も書きませんよ、さよなら。

五月十日　　　夏目金之助

御君さん、金ちやん」（四年五月書簡、圏點北山附之）

いづれも誠に念の入つた書簡であるが、右に對する論義は後廻はしにして、次なる「禪僧への興味」に移らう。

禪僧と云つても、大悟徹底した老僧の類ひではない。修業中の未だ二十歳になつたかならないかの、そして漱石と同じく胃病に苦しんでゐる所の、若い二人の僧である。彼等は神戸に居て、一度も顏を合せた事のない漱石と文通を始めたのである。彼等が漱石に何んな事を書いたかは不明であるが、漱石は彼等を熱愛して、文通以外にも著書等を贈つてゐる（漱石もまた彼等から物を貰つてゐる。）漱石の死ぬ一箇月前に彼等が上京した時、數日の間、彼等を自宅に泊めて東京見物をさせ、帝劇や歌舞伎座へも案内するといふ歡待ぶりであつた。夫人の言によると（漱石の思出）

「二人ともいゝ人達で少しも氣がおけず、それにいつも書齋へ出入される小說家志願の若い方などゝ違つてといふより、寧ろまるで反對の無神經で、ぼおつとしてゐるといふのか、ぬうつとしてゐるといふのか、とにかく一向氣づまりな、いら／＼したところがございません。それが大變夏目の氣に入つた樣子で」とあつたと云ふ。

彼等は大正三年四月から五年十一月に至るまでの間に、實に二十通といふ書簡を漱石から貰つてゐる。それらは全て非常な熱意と、愛情（同性愛的感情、子に對する感情）のこもつた長い物である。

「あなたが立派な師家になられた時、あなたの提唱を聽く迄生きてゐたいと願つてゐます。其時もし死んでゐたら、どうぞ私の墓の前で御經でも上げて下さい。又間に合つたら葬式の時來て、引導を渡して下さい。私に宗旨はありませんが、私に好意をもつてくれる偉い坊さんの讀經が一番ありがたいと考へます」（四年四月）

「それ程胃がわるいのですか、困りますね……若しあなた方が東京へ來たら私の宅へとめて上げませう、きたない宅ですけれども、あなた方の食べたいものを御馳走して上げます」(四年七月)

「あなた方は禪の專門家ですが、矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから、五十迄愚圖々々してゐた私より、どんなに幸福か知れません。又何んなに殊勝な心掛か分りません。私は貴方方の奇特な心を深く禮拜してゐます。あなた方は私の宅へ來る若い連中より も遙かに尊とい人達です」(五年十一月)

「私は神戸の祥福寺の若い禪坊さん二人と文書の往復をしてゐます。二人とも心持の好い人です。親切でさうして俗人のやうにいやな臭味がありません。其うちの一人が、今に名僧になつて私の前で碧巖の提唱をすると云つて來ました」(四年四月、津田青楓氏へ)

晩年に於る、漱石より、かほどに熱意ある書簡をかくも多數に得た者は、彼等二人の禪僧以外には何人もなかつた。もし數に於て彼等を凌ぐ者があつても、それは多く事務的な書簡であつて、その熱情に於ては比ぶべきものが無いのであつた。唯わづかに之に匹敵するものは、前記の藝者に與へた數通の書簡である。卽ち晩年の漱石は、學者、學生、藝術家等よりも、藝者と禪僧に對して遙かに多量の心的精力を注いでゐたのである。

漱石の書簡集を通讀せられた讀者は、この傾向をまざ〳〵と感ぜられたであらう。從來あれ程に學を愛し、藝術を求めて、多くの學者學生と活潑な議論の交換を行つてゐた漱石が、晩年に至つて甚く退行的となり、熱意ある書簡は殆どたゞ、藝者と禪僧とに對する物のみに限られ、他は多く事務的な書簡に過ぎなくなつてゐるのである。

この事實を見る時、學者として又は藝術家としての漱石を尊敬する者は、何人も實に云ひ知れぬ不快と不滿と危懼の念に驅られるであらう。初期に於る、不撓にして高邁なる理想はその姿を沒し、代つて

「風流の友に逢ひたし、人生だの藝術だの何だのかというものに逢ひたくなし。今の余は人の聲よりも禽の聲を好む。女の顏よりも空の色を好む。客よりも花を好む。談笑よりも默想を好む。遊戯よりも讀書を好む。願ふ所は閑散にあり、厭ふものは塵事なり」(四十三年十月三十一日、日記)

といふ大患直後の言葉が、今や如實に彼の全面を支配するに至つたのである。

藝者はエディポス感情を通して見た母の一面を、代表する物であるとか、漱石が藝者に女としての自己を發見

し、之に興味を持つたのであらうとか（金之助といふ藝者の名に注意せられよ）或ひは、禪僧が母を奪はむ（エディポス）感情に聯關せる、懲罰としての去勢に關係があり、漱石の彼等に對する同性愛は、彼等が「青年時代より悟（イゴー）つてゐた所の漱石が、もし存在したらといふ漱石自身の影に該當するからである——とかいふ議論は之を後日に措いても、京都藝者が如何に漱石に對して「懷しさ」を與へまたその近親愛的感情を刺戟したかを、充分に注意せねばならない。

　吾々は之を容易に證明する事が出來る。例へば『彼岸過迄』の須永は、京都女の言葉に對して斯う云つてゐる。

「僕は此邊（京都）の人の言葉を聞くと、微かな醉ひに身を任せた樣な氣分になります。ある人はべたついて厭だと云ひますが、僕は丸で反對です。厭なのは東京の言葉です。無暗に角度の多い、金米糖のやうな調子を得意になつて出します」

また他方に於て吾々は、現實に背を向けるといふ一點以外に何等の特徴なき禪僧に對し、漱石が何故あれ程の興味を寄せたかについて、尖銳なる觀察を加へねばならない。

　そして吾々は、漱石のかうした態度が知力喪失症（パラフレニイ）の傾向に極めて相近い物である事を、分析學徒として認めざるを得ない。誠に遺憾な事實である。

　吾人は漱石が知力喪失症者であつた——との斷定を敢てする者ではない。併し乍ら、彼がそれへの著しい傾向と、將來の危險とを多分に有した者である事を考へるのである。

註。尙、漠然と乍ら、吾々の立場を支持する物として、西谷碧落居氏の言がある。氏は俳句のみの研究によつて、漱石を次の如く評される。「漱石は大患を得て兎も角悟入したのであるが、病去つて舊態に歸つたものである。即ち修善寺時代における漱石は何と云つても、偉大な俳跡を示現したけれども、それ以後それ以前は俳趣味を好尙したところの彼であり、墮ちては俳ぶる閑人漱石であつたと、目しても强ち過言ではあるまい」（俳人漱石論）と。西谷氏と吾々との見解は他の多くの點に於て相違するが、氏が大患以後の漱石を「俳ぶる閑人漱石」と評され、則天去私による漱石の態度を高からずと見なされた點に於ては、確に吾々と相通ずる所がある。一言を挾んで同氏に敬意を表する。

四、結　論

最後に吾々は、漱石の右の如き「知力喪失症への傾向」

が何故、修善寺の大患によつて動機づけられたのであるか？　といふ問題を取上よう。

それは第一に當時の彼が、外界との戰ひ（卽ち神經症）の爲に疲れ果て，旣にして自己感情の缺乏を來(きた)した爲であつたらう。左の書簡を見られたい。

「私は馬鹿に生れたせゐか、世の人間がみんないやに見えます。夫から下らない不愉快な事があると、夫が五日も六日も不愉快で押して行きます。丸で梅雨の天氣が晴れないのと同じ事です。自分でも厭な性分だと思ひます（中略）世の中にすきな人が段々なくなります。さうして天と地と草と木が美しく見えてきます。ことに此頃の春の光は甚だ好いのです。私は夫をたよりに生きてゐます」（三年三月）

「私もあなたと同じ性格があるので、こんな事によく氣を惱ませたり、氣を腐らせたりしました。然しこんな事はいつ迄經つても續々出來て來て際限がないので、近頃は出來る丈これらを超越する工夫をしてゐます。私は隨分人から惡口や誹謗を受けました。（中略）氣に入らない事、癪にさわる事、憤慨すべき事は塵芥の如く澤山あります。それを淸める事は人間の力では出來ません。それと戰ふよりも、それをゆるす事が人間として立派なものならば、出來る丈そちらの方の修養を、お互にしたいと思ひますが、どうでせう。私は年に合せて氣の若い方ですが、近來漸くそつちの方角に足を向け出しました」（四年六月、武者小路實篤氏へ、圈點北山附之）

そしてまた『硝子戶の中』には次の言がある。

「私の僻(ひが)みは別にして、私の過去に於て多くの人から馬鹿にされたといふ苦い記憶を有つてゐる。（中略）今の私は馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出來ないか、此兩方だけしかない樣な氣がする。不安で不透明で不愉快に充ちてゐる。もしそれが生涯つゞくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだらう」

彼は漸くにして現實の力を悟り、自己の挑戰的態度の無力にして且、不快なるを知つた。併し戰ひ疲れた彼は、之によつて前方への新しき一歩を踏み出すよりは、退いて「天」に逃れる方法を採つたのである。

第二には大患以後、彼の肉體はいよ／＼衰弱し、餘命の長からざる事を自ら悟つた爲であらう。彼は肉體的にも時間的にも、世と戰ふの拙なるに考へ及んだからであらう。

第三には大患によつて彼が長い間、嬰兒同樣の生活を送り、その退行的氣分が如何に安易なる物であるかに、

味をしめた（悪い言葉であるが）からであらう。

「安心安神、靜意靜情、この忙しき世にかゝる境地に住し得るものは至福也、病の賜物也」（四十三年九月十七日、日記）

「嚢のうち恍惚として神遠き思ひあり、生れてより斯の如き遐懐を恣にせる事なし」（同、十九日）

「病氣の時には自分が一歩現實の世を離れた氣になる。他も自分を一歩社會から遠ざかつた樣に、大目に見て呉れる。此方には一人前働かなくても濟むといふ安心が出來、（中略）さうして健康の時にはとても望めない、長閑かな春が其間から湧いて出る」（思出す事など）

「たゞ仰向に寢てゐた……青い空が見えた……余は默つて此空を見詰めるのを日課の樣にした。さうして余の心にも何事もなかつた。又何物もなかつた。透明な二つのものが、ぴたりと合つた。合つて自分に殘るのは、漂緲とでも形容して可い氣分であつた」（同右）

所謂「病氣の利得」は此處に盡されてゐる。

第四には、そして恐らく最も無意識的にして、また最も重要なるべき契機は次の如きであらう。卽ち、大患の際、周圍の全ては彼に悉くのリビドーを集中し、彼一人の故にのみ奔走するのを見、彼は始めて他人の有難さと、世の暖さをしみ〴〵感じた事——が之である。

彼は、この有難い他人に向つて憎惡と敵意を向けてゐた自己を恥ぢ、爾後の彼はかゝる行爲を自ら禁制する事となつたのであらう。彼は此の心理を説明して次の如く云つてゐる。

「仰向に寢た余は、天井を見詰ながら世の人は皆自分より親切なものだと思つた。住み惡いとのみ觀じた世界に、忽ち暖かな風が吹いた。（中略）忙しい世が是程の手間と時間と親切を掛けてくれようとは、夢にも待設けなかつた余は、病に生き還ると共に、心に生き還つた。余は病に感謝した。（中略）さうして願はくは善良な人間になりたいと考へた。さうして此幸福な考へをわれに打壞す者を、永遠の敵とすべく心に誓つた」（同右、圏點北山附之）

彼の所謂「生き還つた心」が卽ち「天」である事、而して「此幸福な考へをわれに打壞す者」が卽ち「私」——彼の現實に對する願望や闘爭（及び之等を引起す所の外界の狀態）——である事は、以上の所論を通じて、讀者諸賢のよく了解せられた所であらう。

かく外界への進出を自ら禁止した彼の對象リビドーは、今や「天」に向つて引上げられる結果となつたのである。

彼の神經症が大患を機として精神症へ傾いた理由は、以上の如くであつた。勿論これらの殆ど全てが、無意識中に存したであらう事は云ふまでもない。

かくの如く、年と共に精神症へ近寄りつゝあつた漱石の晩年は、甚だ憂慮すべき狀態にあつた。それかあらぬか、大患後の漱石はその容貌までに變化を示したのであつた。松岡氏の記せられた、森田草平氏の言によれば、

「先生だつて、『猫』の頃の先生は神經が顏の全面に行き渡つて居て、いかにもえらさうで、一癖ありげだつたが、あの修善寺の大患がなほつてからといふもの、どつか會社の重役みたいに、いやにでぶ／＼に無神經に太くなつてしまつて、髭なんかも短く刈り込んで、どこにも夏目漱石らしいところがない。いやに充ち足りたといつた平凡人に墮してしまつて云々」（『漱石先生』）

といふ風であつた。

もし漱石が更に何年かを、その壽命の上に加へ得たと假定しても、吾々は非常なる寒心を以て、其後の生活を想像せざるを得ない。そして彼が嘗て『文學評論』に於て、かの『ガリヴァ旅行記』の著者、スヰフトを論じ、

「スヰフトには病氣があつた。當人自身では胃病だと云つて居たが、兎に角其病氣のために生涯苦しめられた。今の人の考へでは、胃病ではない、腦の近傍を冒す一種の病氣だといふ事になつてゐる（中略）苦痛のない時は、まるで白痴の如き狀態に陷つたのみか、時々癲癇の樣な發作が來て、終に命を終ふるに至つたのである。或人は彼の知性は晩年まで慥かであつたと云ひ、或人は狂人であつたと云ふ」

と云つた言葉そのまゝが、或ひは萬一、漱石自身の事になりはしなかつたか？ といふ危懼にさへ襲はれる。

擱筆するに當り、吾々は前章以來の冒頭に掲げた所の重大なる疑問――果して漱石は狂人なりしや？――を取上げよう。

讀者はこの解決を、筆者に向つて求められるかも知れない。併し筆者は却つて之を、讀者諸氏の賢明なる判斷に俟たんとするものである。何故なら、「狂人」といふ常識的な名稱が、本來如何なる限定を持つか？ その邊が甚だ曖昧である。而してもし、「現實生活に適應すると、せざる」を以て其の境界と認めるならば、漱石は或る場合には適應せず、ある場合には適應したのである。

筆者自身に於ては、たゞ奇を衒ひ、他の耳目を牽かんが爲にのみ、聲を大にして「漱石は狂人なり！」と呼號するが如き態度は之を好まない。筆者は分析學の力によつて、漱石の神經症者なるを斷じ、且つ知力喪失症への

著しい傾向を有した事を指摘したのである。

併し讀者にしてもし、「漱石は狂人なり」と呼ぶ事を妥當とせられるならば、筆者は之に何等の異議を唱へるものではない。しかも尚、

「漱石ほどに偉大なる藝術家が狂人とは何事ぞ!」

と吾々に對する人々が存するならば、吾々はこれらの人々に次の言葉を與へるであらう。

――ヴァン・ゴォクは發狂し、モーパッサンは同じ狀態の下に自殺し、スメタナ及びシューマンは瘋狂院に死したる事實が存するとも、よし又ベートーヴェンに奇人の名を冠らすに於ても、吾々は彼等の偉大さに對し、又彼等の高き藝術に對し、嘗て一指だに加へ得たであらうか!――と。(完)

後記――一寸御斷りする。筆者は本論に於て、漱石の日記及斷片の如き手記と、彼の小說中の言葉とを、資料的價値に於て殆ど差異なき物の如く取扱つてゐる。勿論その價値が常に前者に重かるべき事は、理論的に當然である。併し筆者は、漱石が自ら眞に考へた事、少くともその一面に於て自ら感じた事でない以上、決して之を小說に取入れる事を肯じなかつた事を確信してゐる。筆者が漱石の手記と小說との間に、他の作家に於けるほど資料的價値の大なる差違を認めないのも、この故である。

本誌前々號正誤表

頁	行	誤	正
六	六	實に	實は
七	一九	られない、	られない。
九	一三	疑は	疑ひ
二一	六	確實的	確定的
二六下	一六	轍載	轉載
二八下	五	廣儀	廣義
三二下	二	Psychoanalytie	Psychoanalytic
七六上	六	たこゝに	もこゝに
七九下	一一	金屬性	金屬製
八四上	九	來るのは	てゐるのは
八五上	二二	雜誌	雜記
八七下	三	せられるが	せられるのが
九三上	四	生理	生理說

教育者の爲の精神分析概論 （アナ・フロイド）

宮田齊譯

なほ皆様方は結局幼兒期に於ける教育の可能性と潜在期に於ける教育の可能性との相互の關係を御承知になりたいことゝ思ひますが、一體幼兒が兩親に對して抱く觀念と、大きくなつた子供が學校の先生方や其他の教育者に對してもつ觀念との間には何等かの相異があるものでせうか。それとも教育者といふものは、單に兩親の役割をそのまゝ引繼いで、父親なり母親なりの代理をつとめ、去勢脅迫、愛情喪失の不安、良い行儀作法の躾け等の、昔變らぬ方法を用ゐて兒童に働き掛けねばならないものなのでせうか。兒童がエディポス・コムプレクスの高潮期に經驗して來た種々の難關を想ひ起すとき、私共は、學童のクラスと交渉する教師も、此等の困難と似た、而も一層複雜化された葛藤の巻き添へをくはなければならないのかと思ふと、當然少からず恐れをなすわけですが、若しこの通りのことが起るとすれば、多人數の兒童を相手にするホルトの女先生が手際よく母親の役を演じ、どの子供に對しても決して激しい嫉妬の對象となるやうなことをせず、一人一人に滿遍なく氣に入るやうに立ち廻はれるとは思ひません。

また、男の教師にしても、こんな多勢の兒童の父として絶へず不安の對象となり、また反抗的傾向の目標となりながら、一人一人の個人的な友人になつてやるなどといふことが如何に困難であるかは申す迄もありません。

が、私共は、此の時期迄には兒童の感情狀態そのものも變つて來てゐるのだといふことを忘れてはなりますまい。彼等と兩親との間柄も最早昔ながらの形で殘つてゐるわけではありません。此の年頃に幼兒的本能衝動の力が漸く衰へはじめ、それに應じて兒童と兩親との關係を支配して居つた激情も緩和されて參ります。但し、此の場合にも、此の所謂新たな變化なるものが、此の時期の

兒童の新らしい發育の段階を示すものであるか、それともまた、兩親の側から不可避的に加へられる幻滅やら禁制やらのために兒童の激しい愛欲の要求が徐々に屈服させられた結果であるのか確言するわけには參りませんが、何れにせよ兒童と兩親との交渉は沈靜に歸し、以前程激しいものではなくなり、また以前のやうな獨占性を失つて來るのであります。兒童は漸く兩親を理性的な眼で見はじめ、今迄は全能者の如く之を見做してゐた父親の過重評價をやめて、彼を現實の關聯に於て改めて見なほしはじめます。また幼兒期の高潮期に於ては殆んど成熟した大人の飽くことを知らぬ激しい愛情にも等しかつた母親への愛も、此の頃になれば、さほど求めるところのない、且以前のやうに無批判的ではなくなつた和やかな情愛に變つて參ります。これと同時に兒童は、追々兩親から解放され、彼等の外に自己の愛情の對象となるものを求め出します。つまり一種の分離過程に入るわけで、此の現象は潜在期の全體を通じて繼續されるのであります。斯樣に青春期の經過に伴ひ幼兒期の愛情の對象となつた人々への兒童の依存性が終焉を告げるならば、それは正に滿足な發育が遂げられた徴候であると申さなければなりません。あらゆる中間的段階を辿りきつた後、此の時期になつて漸く成熟した性器形成に到達した性本能は最早自己の家庭に所屬する對象にではなく、當然外部の對象に結びつく筈になつてゐるわけなのであります。

併し乍ら、斯樣に兒童が彼の幼兒期の最も大切な愛の對象であつたものから分離するといふ現象は、一つの嚴重な條件の下に於てのみ起り得るのであります。これは、例へば、兩親が子供に向つて「お前は出て行つてもよろしい、が、但し我々も一緒に連れて行くんだよ」と言つて聞かせるやうなもので、兩親の教育的働き掛けは兒童が彼等から離れて行くことによつて終るわけではなく、まして、兩親に對する感情の冷却によつて終りを告げるものでは絶對にありません。唯、謂ふ所の働き掛けが直接的なものから間接的なものに移行するだけであります。私共は、幼兒が父親や母親の命令に服從するのは、彼が兩親の側近に居つて彼等から直接に加へられる叱責なり個人的干渉なりを恐れなければならない場合みに限るといふことを知つて居ります。

獨りでほつておけば子供はやはり自分の思ひ通りに行動します。所が、生後二・三年を經過すると、此の態度が改まつて來て、子供は、自分を育てる人が部屋から出て行つて了つた後も、許可されることゝ禁止されることゝの區別を辨へ、この分別によつて自分の行動を決する

ことが出來るやうになるのであります。此の變化を見て我々は、兒童が、外部から働きかけるいろ〳〵の力の外に、更に內部的な一つの力を、卽ち內なる聲（命令）を發展させ、それに基いて態度を決定するやうになつたのだ、と申しますが、此の內からの聲、つまり一般に良心と呼ばれるものの起源は蓋し明瞭でありまして、要するにこれは兩親の聲の續篇であり、唯從來のやうな外部から働き掛ける代りに、內側から働くやうになつたゞけのことであります。兒童は父親なり母親なりの一部を、と言ふよりは寧ろ、兩親から繰り返し〳〵受取つた命令やら禁止やらを、言はゞ吸收して了ひ、それを自己の一部に仕立てゝ了つたのであります。斯樣に內面化された兩親の一部は、發育の過程に於て段々と外界に於ける兩親そのものの命令的・禁止的役割を引繼いで參り、現實の兩親から獨立して兒童の教育を內部的に繼續して行きます。兒童も、此の、本來は外部から這入り込んで來た彼の存在の一部分を、自らの自我のうちに於て特に優れた地位に就け、遂には一種の理想のやうに見做し、悅んでこれに服從致します。時には、幼い頃實際の兩親に服從したときよりも一層奴隸的に服從することすらあるのであります。

斯うして兒童の哀れな自我は、終生、此の理想、卽ち精神分析の所謂超自我（Über-Ich）の要求を滿足させることに努力しなければならなくなつたのでありまして、此の超自我の命令に服從しない場合に感ずる不滿は「內部的不滿」と感ぜられ、また、反對にその意志通りに行動し得るときの自己賞讃は「內部的滿足」として感ぜられるやうになり、從つて兒童と兩親との昔ながらの交涉は、兒童自身のうちでなほも繼續され、兩親が子供達に對して嚴格な取扱ひをして來たか、或は寬大な態度をとつて來たかといふやうなこと迄超自我が自我に對して採る態度に反映されるのであります。

茲に於て私共は、幼兒期の事情を考へ合せて見て、兩親から分離するために兒童が支拂はなければならない代價は、彼等兩親を採り込んで自己の一部分とすることだと言ふことが出來ます。そして、此の同化の成否如何が同時に教育の恒久的效果の標準になるのであります。

斯うなつてくると私共が最初に提出した問題、卽ち幼兒期の教育の可能性と潛在期の教育の可能性との差異は如何なるものであるかといふ問題の解決は最早困難ではなくなつて參ります。一體幼兒と彼の最初の教育者とは言はゞ相對峙する二つの黨派のやうに對立するものであつて、兩親は子供の欲しないことを要求し、子供の方ではまた兩親の氣に入らないやうなことを求め、子供が全

情熱をあげて已の目標に向つて突進すれば、これに對して兩親の方では脅迫とか或は暴力の行使とかいふ武器をもつて對抗する外はないといつたやうな間柄にあります。兩者の目的は正に反對して居つて、兩親の方が得て此の抗爭の勝利者となるのは、畢竟體力の點で兒童に優つてゐるから過ぎないのであります。

處が、潛在期になると情勢はこれとは全然變つて參ります。此の時期を分擔するの前に現はれる兒童は最早昔日の純一な存在ではなくて、前に申した通り、內部的に分裂してゐるのであります。そこで、たとひ彼の自我が未だに幼兒時代の目的に向つて進まうと努力しても、兩親の繼續である彼の超自我は教育の味方であります。それ故、教育の可能性が大いになるか否には、成人の聰明さ如何に係つて參ります。例へば、潛在期の兒童を自分の仇敵であるかのやうに取扱ふ教育者は甚だ誤つてゐるわけで、斯樣な態度をとる者は大きな利益を抛棄することになるのであります。これに反して、教育者が兒童の內部に起つた分裂を正しく認識し、之に順應して行つて、やがて兒童の超自我を味方に引き入れてこれと同盟を結ぶことが出來さへすれば、こゝに二對一の關係が出來あがり、如何樣にでも思ひ通りに兒童に働き掛けることが出來るやうになるのであります。

また、教師と學級或は學童のグループとの關係は如何なるものであるかといふ我々の第二の問題も容易に解決することが出來ます。前にも申したやうに、教師は單に兒童のエディポス關係を繼承するばかりでなく、一グループの指導に當る際には、そのグループに所屬する兒童の各々の超自我の役割迄も引受け、從つて彼等の服從を要求する權利を獲得するわけでありますから、若しも教師が單に各々の子供の父親代りになるだけのことに過ぎないとすれば、却つて兒童が未解決のまゝ幼兒期から持ち越して來た種々の葛藤の對象と化し、その結果彼の指導下にあるグループは兒童のお互同志の嫉妬のために分裂して了ふでありませうし、また逆に教師が全部の者の共有の超自我、卽ち皆の理想そのものに成りおほせることが出來れば、强制的服從はやがて自發的服從に代り、グループの兒童は彼の下に於て一致團結するに至るでありませう。(第三講終り)(未完)

歴史と精神分析

「ナポレオンの精神分析」補説

延島英一

一

長らく本誌に連載された「ナポレオンの精神分析」（原題「ナポレオン一世の生涯に於ける轉回點」）は、大槻憲二氏の斡旋と岡倉祐之氏の好意により、今度單行本として上梓された。譯者として至上の面目である。それについて長らく愛讀と激勵を賜はつた先輩及同學諸氏にお詑せねばならぬことは、本誌に連載された舊譯には不備の部分が少からずあつたことである。その誤譯は、もちろん第一に私の語學の知識の不足に歸さるべきものであるが、ほかに精神分析に關する淺學が原因となつたものが少くなく、譯者としてまことに慚愧に堪へない。

單行本とするに當つて、私は舊譯を全く拋棄して、全部新に改譯した。舊譯に於て抄譯した部分を完譯したばかりか、完譯の部分といへども舊譯のまゝ手をつけなかつた部分は一行もない。この努力によつて、新譯は舊譯とは面目を一新し、遙かに正確に、また少からず讀み易くなつたと考へてゐる。また原著は、章も節もない書き流しの典型的な學術論文であるが、私はその全體を

第一章　歴史的方法の缺陷
第二章　母親の象徵
第三章　父親の影像
第四章　無際限の闘爭

の四章に分つた上、更に各章を節に細分し、それに適當な小ミダシを附した。その結果、文章全體に何んら變更を加へずして大いに通俗味を増したことは、出版後閲讀の勞をとられた人々の口を揃へていはるゝところである。たゞ遺憾に感ずるのは、出版の都合上校正に急を要

し、魯魚の誤りを一掃できなかつたことである。

新譯には、むろん未だ無數の缺點があらう。しかし私はとにかく淺學と菲才の身の及ぶ限りをつくして、先輩及同學諸氏の眷顧に應じ、原著者イェーケルスの業蹟を辱かしめぬことを期したのであつた。私はこの努力が、幾分なりともわが國に於ける精神分析の知識の普及と發達に寄與し得ることを望んで止まぬ次第である。

二

イェーケルスの著作が、精神分析の專門的立場から極めて高い價値を有してゐることは、大槻憲二氏が拙著に寄せられた序文の言葉で明かである。大槻氏の教示によつて同書を知り、その飜譯に着手した私としては、同氏の言に加ふべき蛇足を持たない。

イェーケルスの分析眼は極めて優れてゐる。だが私は、彼の史眼はその分析眼に比しては劣つてゐるといふ感じを持つてゐる。從つて私はイェーケルスの研究の史學的價値については、イェーケルスその人の見るところとは異る意味で重大性を持つと考へるのである。

イェーケルスは先づ「ナポレオン一世については、既に無數の研究が發表されてゐる」が、その「多數の研究を以つてしても、未だ埋められぬ空隙がそこには澤山殘つてゐる」ことを指摘し、それを次のごとく説明してゐる。

人類の歷史で、ナポレオン時代ほど研究された時代はほかにはない。それは結局そこに不測の奧底にかくされてゐる問題や動機があるからにほかならぬ。そしてその問題や動機は、いかに愼重を期しても、普通の歷史的研究の方法では、全くか、あるひは極く不完全にしか明かにし得ぬ性質のものである。從つて歷史的研究は、精神分析的方法を併用するか、またはそれに席を讓るかしなければ、解決をもとめ得ぬ限界に必ず當面するわけである。

從來の史學が、心理學的方法を等閑に附したゝめに、幾多の困難に遭遇してゐることは、確かにイェーケルスの言の通りである。しかしながらナポレオン及ナポレオン時代の研究が、時を經るごとに益々盛んになる根據は、イェーケルスがいふやうに、たゞ精神分析的方法によらねば明かにされぬ一面が殘つてゐるからだけではない。ナポレオンの活躍した時代、すなはちフランス大革命は、人類の歷史を現代と現代以前とに分つ境である。人類はフランス大革命を期として、それまでとは全く性質を異にする歷史の段階に足を踏み入れた。我々が今日その下で生活してゐる資本主義社會は、フランス大革命を

契機として飛躍の一歩を印し、發展の端緒を與へられたのであつた。

ナポレオンは、この人類史の未曾有の跳躍期に活動した人物、その歴史的運動に重大な役割を演じた英雄である。武將としてのナポレオンは、決して一般に想像されてゐるやうな優秀な將軍ではなかつた。彼は海戰に於てはネルソンに敗北し、陸戰に於てはウェリントンに擊破された。彼はエジプト遠征に失敗し、ロシア遠征に蹉跌し、スペインでは進退谷る窮境に陷つた。政治家としてのナポレオンに至つては、その無能であつたことは史家の間に定評がある。彼は外交はタレーランに、內政はフーシェに一任したが、外交上では事每にピットとその後繼者にしてやられ、わづかに强大な軍備の力でフランスの位置を保つに過ぎなかつた。內政ではフーシェの苛棘極る警察政治によつて、國民の精神的發展を非常な障碍に當面させたのであつた。歴史の研究者は、ナポレオン治下のフランスの文化が、前代の遺產の繼承を一歩を出なかつたことに常に驚嘆の念をいだく。その點でナポレオン治下のフランスは、スターリン治下の現在のロシアと極めて酷似してゐる。人格（道德的意味の人格ではない）の點でも、ナポレオンは平凡な人間であつた。大革命の英雄に比べれば、彼はいかなる意味に於いても彼等を凌駕できなかつた。その點でもまたナポレオンは、スターリンと類似性を有してゐる。

だが歴史的意義の上からいへば、ナポレオンほど大きな、高い位置を人類史で占めてゐる人物は、今日までのところほかにはない。その點ではピットも、ネルソンも、ウェリントンも、クツゾフも、マラーも、ロベスピエールも、要するに彼と時代と同じくした英雄は、結局ナポレオンの補役に過ぎない。ナポレオンは現代の出產に主役を演じたと見られてゐるからである。

イェーケルスの研究は、この史眼を缺いてゐるといはねばならぬ。だがそれは要するに缺點に過ぎない。正當な史眼でイェーケルスの精神分析的研究を見る時、それはイェーケルスその人が自分で考へた以上の寄與を歴史の理解に供してゐるのである。

ナポレオンは、個人的にいへば決して史上最大の人物ではなかつた。だが彼の果した役割は、史上未曾有の重大なものであつた。どうして最大でない人物が最大の役割を果すに至つたか？ どうして他の英雄でなく、ナポレオンが歴史的運動の先頭に立つ運命を荷つたか？

イェーケルスの精神分析的研究は、彼の史眼の不完全にかゝはらず、その點を理解する上に比類のない貴重な側光を投ずるものと私は考へる。

三

英雄とは何んであるか？

古代人はそれを天命を受けた者、神意を體した人々と考へた。近世に至つては、それは先天的乃至後天的な非凡な能力によつて、多かれ少かれ人類の運命を支配し得る人物と考へられた。更に最近に至つては、それは歴史の方向を理解し、その動きを促進する者の意味に解されてゐる。

歴史家といふ歴史家は、皆悉くこの三つの觀點でナポレオンを理解しやうと努めた。人智の進歩、新しい歴史觀の發達にかゝはらず、人類は本能感情的滿足をそれが與ふるが故に、中々古代風の宗教的歴史觀と絶縁しない。そして古代人の天命及神意は、それを大衆の中に深く根ざしてゐる無意識の要請の意味に解するならば、精神分析的にいつて一概に無稽とはいへないのである。イェーケルスが、書中に於て宗教的感情の豊かな文學者ヴィクトル・ユーゴーのナポレオン觀に再三言及し、それが意外に正鵠を得てゐるのに驚異の念をもらしてゐる所以はまたそこにある。

だがナポレオンをして英雄とならしめた契機は、神秘的な天命や神意といふことで説明できないことは明かだ。従つて歴史家は、ナポレオンに比類のない非凡な能力があつて、それが彼を英雄の地位に上らしめたと解釋したがる。ところがナポレオンは非凡は確かに非凡であつたが、彼程度の非凡人は何時の時代、いかなる社會にもザラにあるものであつて、それだけでは彼の時代的意義は明かにならぬことがすぐ分る。そこで今度は、ナポレオンは歴史の方向を知つてゐた。少くとも感じてゐた。あるひは最小限度に於て歴史の要求に逆らはなかつた。それが彼を時代の英雄としたといふこの頃流行の解釋が生ずる。

しかしながらナポレオンほどの才能の所有者で、歴史の進行、要求に逆らはなかつた人間は、當時フランスにはザラにあつたのである。それにナポレオンは、決して歴史の要求に逆らはなかつたのではなかつた。彼はイェーケルスがいつてゐるやうに復古癖が旺盛で、シャルルマーニュ時代をすべてにわたつて模倣し、革命の破壊した舊制度をできる限り復活するに努めたのであつた。新しい生活關係、資本主義經濟機構は、ナポレオンの重壓の下に少からず發達を阻碍されたのであつた。従つてナポレオンは、大革命後の新時代の英雄ではあつたが、新時代の意義については、大革命の他の英雄たちに比して遙かに盲目であつたといふのが本當である。

人間の意識は、その時の經濟關係によつて規定されるといふのは、マルクス主義的歷史觀の公式である。從つてこの歷史觀によれば、ナポレオンはその時代の經濟關係の規定する意識の體現者であつたが故に、時代の英雄となる地位を占めたといはねばならぬであらう。ところが事實はこの公式とは反對であつて、ナポレオンは新しい時代の約束である資本主義には正面から反對した。マルクス派史家の中には、ナポレオンの資本主義反對は英國の商工業的優越に對する對抗的意味を持つものであつて、それによつてフランスの資本主義的發達を促進したことに其役割があつたといふ者がある。かゝるコジツケ理窟の生ずるのは、歷史に於ける無意識要素の重大な役割を無視し、人間の意識が簡單に經濟關係だけで決定されるといふ錯覺が原因となつてゐるのである。

四

ナポレオンをしてナポレオンたらしめたもの、すなはち彼をして新時代の英雄たらしめた動因としては、大革命が大きな作用を果したことはいふまでもない。大革命の擾亂は、舊來の政治制度、社會組織、經濟關係を根底から覆滅したが、その覆滅によつてそれらの環境と人間の無意識願望との妥協面であるイデオロギー體系もまた根本から破壞される運命に接したのである。

この覆滅を經た社會が、その後いかなる進路をとり、いかなる方面に發展するかは、當時誰一人朧氣にも豫見したものはなかつた。否、豫見だけは誰でもしたが、その豫見には本能感情的潤色が濃厚で、社會の現實に進行する道とは無關係であつた。新しく提出された革命イデオロギーは、本質に於て本能感情的な願望から生じたものである點に於て、悉く皆今日の社會主義學說に似たものであつた。かゝるイデオロギーが、新しい現實に直面するごとに、次から次からへ破產の運命を免れなかつたことは毫も不思議でない。かくて大衆の精神内に於ては、イデオロギー的なものはすべて力を失ひ、たゞ强烈な本能感情のみが殘され、力を振つてゐる狀態が出現した。ナポレオンが國民的英雄として登場したのは、民心が正にこの狀態にあつた時であることを忘れてはならない。

ナポレオンの心的傾向は、イェーケルスが詳細にその發展を辿つて明かにしてゐるやうに、人並外れて强烈なエディポス・コムプレクスの支配の下にあつた。父親に對する烈しいアムビヴァレンツ、母親に對する無限の愛着——ナポレオンがあるイデオロギーをとつたり、捨てたりしたのは、皆それがこのコムプレクスに合するか否

かによつて決定されたのであつた。彼はリビドーの力が强烈で、生來的にイデオロギーに動かされることの少い人間であつた。彼がイデオロギーに從つて行動してゐるやうに見へた時でも、それはそのイデオロギーが彼のコムプレクスの當座の要求に都合がよいからに過ぎなかつたのである。ナポレオンが後になつてイデオロギーを蔑視し、イデオローグといふ言葉を嘲弄の意味に用ひたのは決して偶然ではない。彼は決してイデオローグとなり得る素質の人でなかつた。

五

大革命後のフランスの社會生活は、フロイドが「集團心理と自我の分析」(邦譯全集第三巻所收)の中で精細に描いてゐる原始性への退行を顯著に表現した。一切のイデオロギーの無力化による意識的個性の衰退、外敵の脅威による思想感情の共通的方向への集中、理性よりも感情、意識よりも無意識の優勢、意圖が發生すると抑制のなくなることなど、國民の心的活動は原始狀態へ退行したのである。その結果は各個人の心內に於ける理想我の喪失となり、この喪失は國民相互の同一化を容易ならしめ、喪つた理想我の代償としてリビドーを纒綿する對象――原始父に對する要求を生まずにはゐなかつた。フロイドは、かゝる狀態に陷つた集團心理の特徵をかう描いてゐる。

　集團構成の不可思議な、强迫的特質は、その暗示現象に於いて現はれるが、この特質の起源は原始團體に存するといふ事實に遡つて尋ねるのが正當であらう。集團の指導者は未だに恐ろしい原始父である。集團は未だに制限されない力に依つて支配されることを望んでゐる。集團はまた權力に對して極度の熱情を有してゐる。集團は服從を熱望してゐるのだ。原始父は集團理想である。何故かといふに、原始父は理想我に代つて自我を支配するからだ。

更にこの各個人の理想我に代る原始父の特質については、フロイドはかう述べてゐる。

　多數の個人にあつては、自我と理想我との分離は大して甚しくない。この兩者はまた直ぐ符合する。自我は屢々初期のナルチスス的自足態度を保有してゐる。指導者の選擇は、この情勢によつて非常に容易にされる。指導者はたゞかういふ個人の典型的性質を特に純粹な形で所有してゐさへすればよい。また指導者は、屢々普通の個人などよりも偉大な權力とリビドーの自由とを保有してゐるといふ印象を與へさへすればよい。で、さういふ場合には、權勢ある首領としての需

要はしばく彼の方に向けられ、彼がもしさういふ人間でなかつたら持つてゐさうには思はれぬ卓越力を有してゐるといふことになるであらう。もしそのことがなかつたならば、集團の他の成員たちの理想我は、何んらかの訂正なしには指導者の人格に體現されないのだが、それがあるので彼等は「暗示」によつて、すなはち同一化によつて、自餘の者と共に引づられて行くのである。

このフロイドの言葉は、「英雄」ナポレオンの歷史的地位と意義を最も明白に說明してゐるといはねばならぬ。ナポレオン治下のフランスに於て、今日のスターリンのロシアと同じく、文化的に獨創的なものが一つも生れず、すべてがたゞ前代の遺産の繼承と模倣に終つた所以も明かとなる。獨創は集團に對する叛逆である。集團心理の支配するところ、獨創は生れる餘地がないのだ。

イェーケルスの優れた精神分析的業蹟は、彼に分析眼に匹敵する史眼が缺けてゐるために、當然歷史の理解に供すべき寄與を自ら少からず損じてゐるといはねばならぬ。私がこゝに彼に缺けてゐる史眼を補足した所以は、彼の研究に、その當然有すべき劃時代的な意義と價値を添へるためである。(昭和十三年七月三十一日)

心理研究ノート

長谷川誠也

(三十三) 謠曲の「山姥」

「山姥」は佛教思想を織込んだもので、意義深遠の重いものだと言はれてゐる。いかにもさうであらう。大内靑巒の『謠曲禪話』中には、この意義が詳細に説明してある。それを讀んで見ると、なるほどむづかしいものだと思ふ。ところで、佛教的解釋を顧みず、心理學だけに立つて見ても、これは大切な研究問題となる。なぜなれば、山姥といふ形象は、われ〳〵の心理に伏在する原始的形象巨母の一つの姿であるからだ。

「山姥」は曲舞を基としたもので、曲舞の典故としては、特に取立てゝ擧ぐべきほどのものはない、と言ふのが謠曲研究家の説である。廣く文獻をあさるならば、あるひはこの形象の素と思はれるものに出會ふこともあらうが、それを取上げて直ちにこの本源が明白になつたと斷言するならば、考古學的または心理學的考察が缺けてゐるといふ非難を免れ難いことにならう。

「そも〳〵山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて、いたらぬ山の奥もなし。」

といふ謠曲の文章が、この形象の起原の不明なことを告げてゐる。佛教家から見れば、この文章は無始無終の輪廻を言ひ表はしてゐると考へられやうが、心理學的に見れば、心理に存在してゐる原始的形象を語つてゐると考へられる。もと〳〵かやうな形象であるから、生所も不明、また歸着する所もないのだ。若し強いてその發生と歸休とを知らうとするならば、各自の心理を分析して考察するより外に途はなからう。

巨母の一面は夜叉であり、他面は慈母である。諸傳説に出て來る山姥も、鬼女であることもあり、あるひは諸人を愛撫する仙女であることもある。さうして謠曲の山

姥には、この兩面が備はつてゐる。

「一念化生の鬼女となつて目前に來れども……ある時は山賊の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を貸し、月もろともに山を出で、里まで送るをりもあり、又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。」

この文章は明らかに愛撫庇護の性質を言ひ表はしてゐる。この曲は、意識的に佛教思想を具體化したものであるが、その間に、根元的な巨母のおもかげが自然にしみだしてゐる。實にこの曲は、無意識の働きが文藝と深い關係あることを證明する例として頗る適切なものゝ一つであらう。

手近な例では、山姥と金太郎とが不可分の關係にある形象がある。また鬼子母神が出產、育兒の神として崇拜されてゐるところから考へれば、謠曲の山姥に愛護の性質の現れてゐるのは不思議でもなんでもない、あたりまへのことだ。なほ支那にある西王母といふ形象もこの例であり、「八犬傳」の伏姫も巨母の一種である。とにかく世界到るところに、この原始的形象が種々の姿となつて現れてゐるに相違なく、同時に諸民族の歷史中に、實在した女性で巨母化されたものも相當に多からうと想ふ。

（三十四）乳房の威力

インドの傳說に次ぎのやうなおもしろいものがある。

およそ生物の出生には卵生、胎生、濕生、化生の四種がある。そこで、人間は胎生であるけれども、卵生の例もある。それについてはかういふ話がある。（「倶舍論頌疏」第五卷に據る）

般遮羅王の妃が五百の卵を產んだ。妃はこれを恥ぢ、かつなにか災變が起こりはしないかと恐れて、これらの卵を小函に納め、殑伽といふ河に流した。函は隣國の領土に流れ行き、その國王の眼に觸れた。王はこれを拾ひ取り、開いて見たところ、卵があつたので、城內に持ち歸つた。ところが數日を經て、各々卵のから一人の男兒が生まれ、いづれも成長すると、武勇絕倫、敢て敵する者がないほどであつた。

この王と般遮羅王とは年來の怨讎であつたので、この王は勇士を得た機會に般遮羅王を攻擊しようと謀り、五百の勇士に兵を率ゐさせて、敵の城を圍ませた。般遮羅王は大いに怖れて縮んでしまつた。これを知つた妃は王を慰めて語つた。敵軍を怖れるには及ばない、あの五百の勇士は、實は自分の子供であると、こゝで往年の事情

を語り、かつ語をついで言つた、子供が母親を見ると、惡心は無くなつてしまふものだと。
妃は城に登り、五百の勇士に向つて、上記の因緣を說き、若し疑ふならば口を開けよと言ひ、乳房を出して撫でたところ、乳が五百筋となつて流れ出し、おのづから各勇士の口に入つた。これで勇士も信伏して和議が成立し、その後、兩國は干戈を交ゆることがなくなつたと。
この話は、年代をどの邊に置いてゐるのか、また、般遮羅國といふのは、どの地方にあつたのか、私は檢べて見たこともないが、もと／＼寓意談であるから、そんな事柄を調査する必要もなからう。
これを讀んで憶ひ出す實話がある。日本海に面した或地方のことだ。三人兄弟の青年があり、或日、おやぢに向つて我儘な談判を始めた。三人ともなか／＼强硬な態度で、おやぢさんも持てあました。これを知つた母親は、つか／＼と出て來て子供等の前にぴたりとすわり、乳房を出して、「この乳をのんで大きくなりやがつた野郎共はどいつだ」と呶鳴つたところ、三人とも一言もなく小さくなつて逃げ出したと。この母親の乳房は、般遮羅國王妃のそれと同じく異常な威力を發揮したのである。
實際、乳房には、これを見る者の心理を退行させる不思議な力がこもつてゐる。退行は種々の過程となる。あるひは幼兒心への徑路をたどり、あるひは性慾の方角へ向ふこともあらう。とにかく、これによつて意識の統制が攪亂される例は非常に多いのである。西洋の作法に、これを露出することを禁じてあるのは無理もないことであり、また、文藝上の作品に、これが重要な材料として取入れられてゐるのも當然のことだと思ふ。

（三十五）今日イエスがゐるならば

イギリスの新進生物學者ハルデインの論文集に「若し今日イエスが生存するならば」と題する短い隨筆がある。その要旨は次ぎのやうである。
われ／＼の見てゐるイエスは、彼の弟子等の解釋した人物である。イエスは弟子等よりも遙かに優れた智力の人であつたが、弟子等は彼を誤解した。
彼が今日、資本主義のヨーロッパか、あるひは北アメリカの哀れなユダヤ女を母として生まれたとすれば、どんな人物となるだらう。昔のイエスは學藝の發達してゐなかつた時代に生まれたから、やむを得ず、日常生活から譬喩を作り、あるひは宗教上の術語を用ゐて說教したのだ。現代のイエスは現代の學藝を學ぶから、科學や、心理學や、經濟學の

術語を用ゐて所見を發表するだらう。昔のイエスは宗教を簡單化しようと試みたゝめに神の冒瀆者と非難された。今日のイエスは、宗教的の人々から、不信の徒と見なされるだらう。

彼が無免許で、心理上の治療をやるといふので世間の評判が立ち、さらに新聞記者が彼との會見記を掲げたので、この人物は、一そう社會の注視する所となつた。

傳へられる所によると、彼はビール黨であり、宗教問題には口を出さず、おれは平和の敵であり、攪亂を企てに來たのだ、革命を起こしに來たのだ、革命は心理に生起しなければならぬ、と言ふやうな事を述べる。殊に富貴を放棄すべしと喝破する。それは富豪が惡逆であるからでなく、むしろ不幸であるからだ、と言ふのである。「富める者が生を樂しむよりも、貨物自動車が鍵穴を抜ける方がたやすい」と。警察署は彼を注意人物とし、宗教家は憎み、共産黨は殊に甚しく嫌忌するのだ。また、醫師は嫉妬から彼を非難する

彼の評判はます〳〵高くなり、追隨者も多くなり、しかも追隨者等が、教會その他の公の場所において問題を起こし、それがいよ〳〵激しくなつて來たので、遂に官憲も默してゐることができずに、彼を捕へた。それは彼の名聲が高くなつてから二三年後のことだ。さて、現代においては磔刑を執行することもできず、また裁判を公開すれば、騷動が勃發しさうな形勢であるから、官憲はたゞなんと言ふこともなしに彼を刑務所に送りこんだ。

新聞紙は、彼は精神病者であると傳へた。また幾許もなく、彼は精神病院において死亡したと傳へられた。これでこの人物の評判は終つたかと言ふに、さうでない。彼はなほ生きてゐると傳へられ、その弟子等は彼の教理を宣傳しはじめた。彼等の言ふ所によると、彼は心理學に革命を起こした人で、この學を化學のやうな實際的學術となすと共に、幸福への新らしい道を教へたと。彼等の或者は、全く新らしい人格として活動し、そのために獄舍に繫がれた者さへある。なほ、弟子中の一部は、師説の神祕的方面に力點を置き、かつ治療の方面において顯著な成績を擧げた。官憲は、この方面に對しては壓迫を加へず、むしろこれを奬勵するくらゐである。これが恐らく新宗教として認められるのだらう。また官憲も宗教を嫌はないのである。將來は分からない。あの人物は眞に革命を起こしたのか、それともたゞ他の一宗教を唱へたゞけであるのか。世界の將來は、この疑問に對する解答如何に由るのである。

以上がハルデインの想像である。現代におけるイエスは、心理學研究に革命を起こすだらうと見てゐるところ

に興味がある。論者は論集中の他の部において、次ぎのやうな見解を述べてゐる。今日までに科學は宗教の前線、卽ち世界創造說を打破つた。そこで現時においては、心理學者がその第二線、卽ち宗教的心理學を擊破するためめの砲陣構成に努力してゐると。論者は、この觀察を基として、現代にイエスが生まるれば心理學の革命者となるだらうと想像したのであらう。また、同福音書のイエスは、たしかに立派な心理學者であるのだ。

時評

學生狩りの問題

大槻憲一

近來は學生論なるものが一つの流行の如き觀をさへ呈してゐる。それほど學生生活なるものが社會問題化してゐることを意味する。學生問題を種々な見地から論ずることは出來るであらうが、心理學的見地から試みられたものは多くなかつたやうに思ふ。

現代の學生はどちらかと云ふと憂鬱であると云はれてゐる。それは卒業後の就職難や生活難が目前に脅威してゐるからだと云ふ唯物的見地からの解釋が大多數を占めて來たやうであつた。私はそれを否定しようとするものではないが、たとへ卒業後の生活が光明を約束せられたものであつたとしても、學生々活は憂鬱であるべき理由が多く存するのである。それは學生々活が人間生活のその期間の過ごし方として不自然な點が多くあるからであると我々は觀る。いはゞ文明の壓迫を被る點がこの時期に於いて最も甚だしいからである。

生物學的に大觀して見ると、多くの動物はその定命の約二十分の一の年齢(又は月齢)に達すると、既にあらゆる意味で(殊に性的の意味で)成熟し、一人(?)前の生活を營むことが出來るやうになつてゐる。もし人間(も亦一種の物動には相違ないから)の場合にこの一般的命題を適用して考へて見

アブフウブ ABHUB

他の學問がアブフウブ(屑)として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黄金を探し出す。

鏡と自己崇拜

不老泉院主

二・二六事件當時『兵に告ぐ』の名文を以て、一世を唸らせた大久保弘一少佐が、昭和十一年十月十五日朝日新聞に『鏡』と題する隨筆を寄せてゐた。ナルチスムス研究には好個の材料であるから、こゝに紹介しつゝ少し分析的考察を加へて見よう。

×

僕はいつも鼈甲製の丸い懷中鏡を携帶してゐる。なんでも明治以前の昔から傳

るならば、人間は（平均壽命を八十歳としても）四歳になれば既に一人前の性生活を行ふやうになつてゐなければならないのだ。實際、生殖腺の異常な子供にあつてはその年齢で生殖器系統に一人前の發達を示してゐるものがあるのだから、この生物學的考へ方は滿更出鱈目とは云へないのである。

然るに人間の心理を精神分析學的に研究して見ると、愈よ以てこの考への一般的妥當性が容認せられることになるのである。卽ち、人間はみな一まづ四、五歳の頃に第一期の性的開花を閲し、それは極めて幼兒的な意味での性的開花であつて、成人の場合に於けるやうな精液の射出能力などがあるわけでは決してないのであるが、たゞ身體の各部の性帯域に感覺的な亢奮力があつたりすると云ふに止まるものではあるが、とにかく後年に於いて生殖系統の成熟した場合には補助的亢奮機能を果すべき個所の發達は却つて成人に於けるよりも發達してゐる位である。例へば、後年に於いて接吻に依つて性的亢奮の座となるべく約束せられてゐる口唇粘膜に於ける感覺亢奮の能力は、赤子に於いては成人の既に忘れてゐるものがなほ多く強く働いてゐる。

このやうに四、五歳の頃に一まづ第一期の性能開花はあるのであるが、それは丁度小春日和の暖かさに慌てゝ萌えはじめた蕾がその後の霜の冷氣におびえて固く蕾の蔓を閉ぢるやうなもので、その後思春期に至るまでは性的潜在期（ラーテンツペリオーデ）と名付け、その間にやがて性的第二開花期たる思春期の至るのを待つて絢爛の花を咲き出でしめる準備をしてゐるのである。その美しい花は性の開花であつて同時に精神能力の開花でもあらねばならないので、所謂潜在期は人間にとつては甚だ多忙な期間である。實は、目的觀的（テレオロギッシュ）に考へることが許されるならば、精神的に一人前になる準備に必要な期間だけ、性の開花を暫ら

はつてゐるらしい菊の彫模様のある古風なもので、或るハイカラな老人から貰ひ受けたものだが、一見相當の珍品に見える。人前でこれを出すわけではないが、時々人からこれを見付けられて「君はえらいシャレたものを有つてゐるなあ」とひやかされることがある。

士官學校にゐた頃、机を並べてゐた某といふ生徒は、東北出身のかなり蠻カラの方であつたが、それがまた不思議に大きな懷中鏡を有つてゐて、而もそれをいつも公々然と人前で出しては顔を眺めてゐた。但し、その鏡の裏面には『以て衣冠を正しくすべし』と大きく墨で書いてあつたので、誰も文句をいふものはなかつた。

僕は鏡に就いては、一種特別の考へを有つてゐる。鏡は僕にとつては、單に精神修養の一道具ぐらゐではなく、僕自身の靈代として信仰の對象ですらある。鏡は實に僕の客體なのだ。場合によつては僕そのものなのだ。

僕の尊敬するある將軍は、敬神家であるが、その人は大尉の頃から神棚に自分

く抑制しておくのが潜在期の自然的意圖であると思ふ風にも解釋され得べき可能性があるやうに思はれる。

併し性の方はさう〳〵いつまでも待つてゐてはくれない。十一、二歳の頃にもなれば、既に思春前期に入るので、そろ〳〵性の開花の徴は見えて來る。十七、八にもなれば、性の方は殆ど完全に發達してしまふ。野蠻人や未開人はこゝらで結婚してしまふので、その身心生活に比較的無理が少いが、文明人は潜在期の數年間だけで、將來の活動に資すべき準備（教育）を終了すると云ふことは、絶對に不可能である。そこで、文明人になるほど性的開花さへも漸次に遲れて來るやうな傾きがある。それは自然であるかどうか知らないが、必要であるのだ。あまり早く色氣づかれては勉强の方がをろそかになると云ふので、學生の性的興味は嚴重に、屢々寧ろ憎惡を以て、抑壓禁制せられる。

併し學生だとてすき好んで色氣づいてゐるわけではない。自然にさう云ふ欲求が發露して來るのだから、蕾が開き始めたら、開かせておくより外はない。外氣がまだ寒冷だと思ふならば、溫室にでも入れるより外はない。溫室の設備がないならば已むを得ない、寒い外氣の中でも、開かせておくより外に道はないのだ。無理に抑へておくことの弊害よりは、まだましかも知れない。

このやうに人間は二十歳前後にもなれば性的には成熟してゐるのだ。昔は『年は二八（卽ち十六歳）か』などゝ云つて十六歳になれば成熟したものと認められたが、現代では十六歳はまだ子供で、肩揚げは無論とれず、やつと女學校の三年生位で眞つ黑になつて駈廻つてゐると云ふ有樣、以て如何に文

の魂を祀つた靈舍を備へて、爾來每日これに禮拜してゐるとのことである。それはまたどうしたわけかと聞いてみると、

『自分の心を磨き上げるのに、單に反省した位では思ふ樣にならん、もつともつとこれを徹底的に見究めて、これを淨化鍛練するためには、自分といふものを全然肉體から切り離して外に置いて見たらと思つて、かうやつて祭り上げてゐるのだ』

との答へであつた。

一寸變つたやり方ではあるが、その眞劍さには敬意を表せざるを得なかつた。

鏡はそこへ行くと、もつと輕便に自分を客觀視さしてくれる。人は通常これを單に身形を整へたり、化粧のためにしか用ひてゐないやうであるが、鏡にはもつと〳〵重大な使命がある。鏡の本質は、人生に於て最も嚴肅にして且つ高遠なる意義を有つてるるのである。

×

これで見ると、大久保少佐も相當のナルチストであることが分る。人前で堂々と鏡を出せないのは、自分のナルチスム

明の進歩が人間の生活の發達に制限を加へるものであるかゞ分る。男でも徳川家康の如きは十五歳位で岡崎城主になり結婚も多分その前後であつたから、その時代には十五歳で一人前になれたのが、只今では中學生の腕白盛りである。その代りに徳川家康時代には神經衰弱や神經症は殆どなかつたやうである。少くとも現代の神經病的學生の群の間に見られるやうな病的傾向は、當時の青年否、大人の間には見られなかつたに相違ない。

その代り昔は四十か五十になればもう老人扱ひにされたが、現代では、四十八歳で總理大臣になつても青年宰相と呼ばれ得るやうに、年齢の規準が全然違つて來てゐる。といふと大變よさゝうだが、三十になつてもまだ一人前に通用しないのが現代だと言はれても、仕方がないのである。そこで「人生は四十から」と云ふ標語が尤もらしく（併し相當の根據を以つて）唱へられる。

このやうに、昔の人間は性的成熟期と、人格成熟期と、經濟能力完成期とが一度に、而も早く十五歳頃（元服期）に一致して來たのであるが、現代人はそれ等三つが各々多少づゝ遲れ、而もバラ／＼に來るのでそこで學生一般の神經症となり、その神經症から何とかして遁れたいとの慘憺たる努力が不良學生狩と云ふ不面目な社會現象となつて現れるやうな結果にもなつて來るのである。勿論、學生狩が特に現在に於いて目立つて行はれるやうになつたに就いては、非常に多くの同年輩の兵士が全支各方面に困苦を忍んで勇戰してゐることに對比して考へられるからであるのは云ふまでもないが、併し性的苦悶の處理に努力してゐる學生と雖もこれを戰場に立たせて見たら却つて勇敢な働きをするかも知れないと云ふ可能性は決して打消すわけには行かない

スに對する超自我の批難があるからであらう。併し少佐はやはり堂々と出したい心は山々であるらしい。そこで士官學校時代の友人のやり方がこゝで想起せられた。その東北出の蠻カラ（であると云ふことが抑々この場合抑壓のために逆の形で出てゐるナルチスムスであらうが）男が大きな鏡の裏に「以て衣冠を正すべし」と書いたのは、外界に他人として投出せられてゐる超自我の批難へのエス（ナルチスムス）の防禦であることは申すまでもない。大久保少佐の超自我は内にあるから防禦の仕様がないが、蠻カラ男の超自我は外界に投出せられてあるので、これを防ぐに容易である。それだけこの男は幼兒的なのであらう。大久保少佐はこの男の幼兒性をやゝ羨んでゐる。

鏡は少佐にとつては「靈代」であると云ふ。鏡そのものが靈代であるのではなく、嚴密に心理學的に云へば、鏡の中に映ずる自分の影が靈代であることは申すまでもないが、無論象徴的には鏡そのものがそれであるのだ。つまり、ナルチススが水鏡に映じた影を自分の別我（ドッ

と私は信じてゐる。

それに、青年にとつては父親と云ふものは最大の味方であつてまた最大の敵である。丁度、親友が最大の味方であつて同時に最大の競爭者であるのと同じだ。父親を克服すると云ふことは、あらゆる青年の罪惡であると共に道德である。父親を克服して父親以上の人物になることこそは、總ての男兒にとつて人生の目的であるとさへ云へる。故に、最大の親不孝は最大の親孝行と合致する。『孝行のしたい時には親はなし』とは『今こそ親爺出て來い、負けはしないぞ』と云ふ勝利者の嘆きを裏に含んである。それほど最大の敵たる親の脛噛りを三十歳近くまで——昔なら遠くに親爺を乗り超えて一人前になつてゐる年頃まで——してゐるべく餘儀なくされてゐる現代學生たるものゝ衷心の苦悶は、到底、只今の社會的指導者の位置にある人々、（父親級の人々）の想像も及ばないことであらう。

就職難、生活難の惱みも實は根底に於てかう云ふ道德的な精神的な苦悶に裏付けられてゐるのだ。何となれば卒業後に就職や生活の惱みを惱まねばならないと云ふことは、「孝行のしたい時には親はなし」などゝ呑氣な、贅澤な嘆聲を發し得べき喜びの機會の永久に來さうもないことを意味するからである。さうしてかう云ふ嘆きは、文明の進歩と共に加速度に學生たちの頭上にかぶさつて行くことであらう。（北海道帝大新聞七月二十六日號より轉載）

清野博士の窃盜心理

學動一世に高き京大教授清野謙次博士が研究のため（?）の蒐集癖から遂に法に觸れるに至つたことは、最近の學界及び世間一般の耳目を聳動せしめ

ペルゲンゲル）と見なしたのと同じ極めて原始的な心理機制の殘存してゐることを意味してゐる。何れにせよ、鏡中の影は、少佐の「客體であり、場合によつては僕そのものなのだ。」これは誠に仰言る通りである。

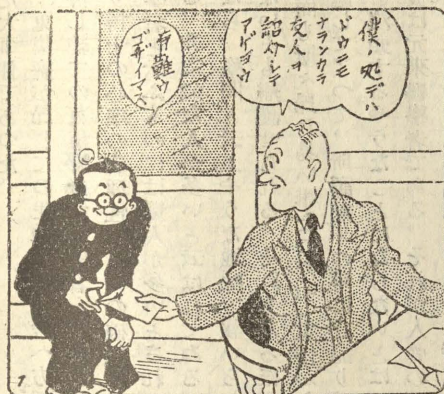
その少佐が「尊敬するある將軍」は自分の靈を舍殿に祀り込んでそれを崇拜してゐると云ふのだから、これはまた東北出の蠻カラ男以上に單純幼兒的な御仁である。と云つたところで私はこの將軍を別に批難してゐるわけではないのだ。神社の本體なるものは、客觀的(歷史的)にはいろ〳〵の所以因果があつて、さうしてそれは意識的にはそれ〴〵重要な意義があるにはあるのだが、無意識心理的には崇拜者自身の魂(分析學的には超自我)の別我として投出せられたものに外ならぬからである。だから社殿の前には常に神鏡が揭げられ、その鏡面は來拜者の方に向つてゐる。來拜者はその中に自分の顏を見て、(たとへ見えなくても) あゝあそこに神樣が居らつしやると思つてゐるのである。敬神は敬我である。

た大事件であつた。
蒐集癖が昂じての犯罪と云ふ考へ方で常識は滿足してゐるのであらうが、併し總ての蒐集癖者が犯罪者となるとは限らないのであるから、問題はやはり博士の心理の病理性（人格の破綻又は分裂）に歸せざるを得ない。一體に學者と云ふものには變人が多いとされてゐる。變人でないまでも一癖のある、非常識な人が多いと云はれてゐる。實際、あまり世俗的興味が多過ぎたなら、學問と云ふやうな地味で報いられるところ少い仕事に携つてはゐられないとも辯護せられる。それもなるほど一理はあるが、併しそれが昂じると（而も屢々昂じ易い事なのだが）世俗から超越する代りに人生そのものから超越して了つて、所謂象牙の塔に立籠り、何ら實際的意義のないことに全生涯を沒頭するやうなことにならないとは云へない。清野博士の場合の如きも、彼は元來醫學者である、それが人骨の研究から人類學的興味にまで進展して行つたことは理解出來るし同情も持てるが、古文書や佛典のやうなものを蒐集（窃盗）して何になるのか。もうこの邊から彼の精神が健全性を失つてゐることを察するに足ると思ふ。世間ではたゞ「研究のための蒐集癖」と同情的に見ようとしてゐるけれども、既に研究を遊離した蒐集のための蒐集、單なる好事、病的ディレッタンティズムに墮してゐると推定することが出來るであらう。
抑々蒐集癖なるものは如何なる心理的原因から生ずるのであらうか。蒐集癖の精神分析的考察を精しく始めたならば際限はないし、嘗てまた私はそれを多少試みたこともある（『千軒盗み分析考』）が、何か過去に於ける心理的定着から生ずるものだと云ふことは明かであらう。その心理的定着と云ふの

敬神と敬我

敬神は敬我であるとの全項末の結論がいさゝか尙早であると思はれた方もあらう。で、私はこゝにこの結論を助勢すべき一つの事實を報告するであらう。
歌舞伎俳優として團十郎の遺鉢を傳へたと云はれる市川中車が亡くなつたのは昭和十一年七月十二日の事であつたが、彼が生前坐右に置いて摸拜やまなかつた菅公の木像と云ふのがあつた。この木像は彼の死後早稻田大學演劇博物館に寄贈せられたが、その木像の由來については次のやうな話がある。
明治三十年十一月歌舞伎座に『時平公七笑』が上演せられた時、同優は九代目團十郎の時平に對してそれに劣らぬ程の大役たる菅原道眞に扮した。それまでにも出世藝はあつたが、特に此の役は大當りで以來書き出し所の地位が確立したと云はれてゐる。その紀念に此の役を中車丈の似顏で先代安本龜八が木像に作つた。同優はこの像を自分の藝道の守り本尊と考へてゐた。即ち外見は道實、中味

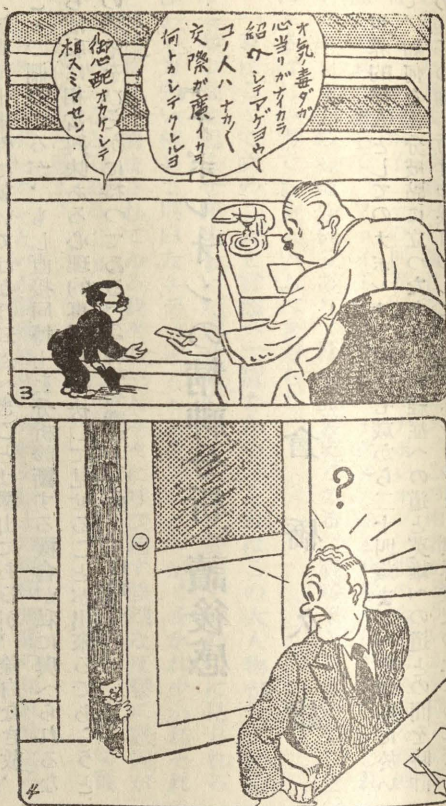
は、幼兒期空想に於いて絶大な價値ありとせられたものを得べくして得損つたその代償として非常に高價なものを多數に集めようとするのである。その「絶大な價値あるもの」とは幼兒期に空想した母親の觀念と密接な關係がある。故に蒐集癖者はこれを精神分析して見ると、常に必ず母親への幼兒期定着の熾烈な人であることが分る。また蒐集せられるものは幼兒期（心理的古代）に失はれたもの丶代償であるから、殆ど常に古代的なものに限られてゐる。淸野博士も、その母親との關係を調べて見たならば、何か面白い事實が發見せられるに相違ないと思ふ。

我子を失つて悲嘆してゐる人が百萬人から一錢づ丶喜捨を受けて、その錢

は自分、それが神様の本質であるらしい。外見まで自分自身では流石に氣がさすから、外見だけは他の尤らしいものを假りて來ることは、丁度「以て衣冠を正すべし」と云ふ文句が防禦となつたのと同じ心理機制であらう。

松山鏡

大槻稿『ナルチスムスの本質』の中でナルチスス神話傳説の一つの變つた、古代的形式が紹介せられてある中に、死んだ自分の愛人に會ふために自分の顏をナルチススが水鏡に寫して見たと云ふ條があるが、これはわが國の傳説として名高い『松山鏡』を聯想させるではないか。この傳説に就いては詳しいことは實は私もよく知らないが、何でも、或る男がその母親を失ひ、それに會ひたいために鏡面を覗いて自分の顏に生寫しの母の顏をそ丶にあるものとして對談するのを樂みにしてゐたと云ふ話だ。

またこの松山鏡傳説の一變形として、或る女が亡くなつた母を慕ふのあまり深夜藏の長持のところに行き鏡をとり出し

で地藏像を建立したと云ふ類の話を我々はよく耳にするが、この心理は一面に於いて蒐集癖心理と相通じてゐる。百萬人（卽ち極めて多數）から少しづゝ集めて、失はれたるもの（地藏はこの場合子供の代償である）を再建する、但しその場合、その集められたものは金で買つたものであつてはならないのだ。「喜捨」したものでなければならないのだ。然るに一錢なら誰でも喜捨してくれるが、二百萬圓もの高價なものを「喜捨」してくれる人はないから、そこで「竊盜」しなければならなくなる。が、本人の無意識論理としては「竊盜」と「喜捨」とは同じだと考へられてゐるのである。何となれば、金出して買つたものなら恩や好意を感じることは出來ないが、喜捨して貰つ

て自分の顔を見ては母に會ふ思ひを滿たし、涙を流して搔き口說くのを見て、夫は怪み、或夜自分でその鏡を覗いて見たら凛々しい男の顏が寫つたのでさては姦夫であらうと憤つたと云ふ話。そこには別我の心理とナルチスムスの心理とが織込まれてあつてなか〳〵含蓄深い傳說である。

自惚喜劇三題

いつの世にも花街の稽古所には女師匠や藝者を張りに來る世に云ふ經師屋の種は絕えぬと云ふが、こゝに或る自信家、稽古所で知り合つた藝者の家へ圖々しく遊びに行く。これはまアようこそと、坐らせてくれたのが長火鉢の前、途端に待ち設けてゐたやうに灘の生一本が出る。お料理が出る。下にもおかぬもてなしやうに男はもう天にも昇つた心持。とめられるまゝに夜半の三時頃まで遊び過ごす。

すつかりいゝ心持になつた其の男、それから二日ばかりしてまたもその藝妓屋を訪れゝば、玄關に應接に出た婆アや

たものなら恩や好意を感ずることが出來る。ところで、是非とも恩や好意を感じたい心理的必要（無意識願望）があつて、而もそれを果す途が現實的に一つも開かれてゐない場合には、竊盜を働くより外に術はないのだ。竊盜を働けば、相手の自發的の恩ではないまでも、此方から他發的恩を着ることが出來る。これ等二者は無意識的には同じ意味を持つてゐる。現にドイツ語で Schuld と云ふ語は「罪」と云ふ意と「恩」と云ふ意と兩義を持ち、漢語の謝の字にも「感謝」と「謝罪」との兩義がある。如何にこれ等兩義が根柢（無意識心理）に於いて同じもの（コムプレクスされてゐるもの）であるかゞ分るのである。言葉には無意識心理の伴らざる表現がある。

清野博士事件に就いてはなほ云ふべきことは澤山にあるが、餘白なき故、こゝで擱筆するが、もし直接同博士を分析診斷する機會が私に與へられるならば私は相當興味ある心理的事實を剔抉して見せることが出來るであらうとの希望をひそかに持つてゐる。（『科學知識』九月號より轉載。）

『ナポレオンの精神分析』讀後感

倉橋久雄

世界的偉人としてのナポレオンが十七歳から二十四歳までの青年期に於いて、如何なる分岐點に立つたか？　神經症への道と英雄への道との間を時計の振子の如く行きつ戻りつしてゐたナポレオンと、世界歷史の上にあれだけ

が、けふはお姐さん、お目にかゝつてゐられないさうですから……と木で鼻をくゝつたやうな挨拶。此間とは打つて變つた此の挨拶に、けふは姐さん、餘ッ程機嫌でも惡るいのかい？　と云へば婆や、實は此間の晩は、ちつとばかり悶着があつに別れた先の旦那が、難癖をつけて暴れに來るかも知れないといふ知らせをしてくれた人がありましたので、そこへ丁度あなたが來合せて下さいましたので、もしも刄物三昧にでもなつた時、たとへどんなでも男手があれば心丈夫と、あのやうに夜更までお引止めしましたが、只今ではどうやらその心配もなくなりましたので……

右は須田榮氏の書かれた話の紹介であるが、如何にも花柳界にはありさうなナルチスト失敗譚。併し彼は一回目だけでやめてゐたら寧ろ幸福な成功者であつたらうに、そこまで見通しきかぬのが人間の淺間しさだ。

×

通勤電車の中で毎朝會ふ娘――何處かの會社のタイピストか女事務員か――い

の重大な意義と役割とを演じたナポレオン。この兩者がどういふ契機で結び付いて行つたか？ その回答がこゝに『ナポレオン一世の生涯に於ける轉回點』と云ふ書名で、フロイドの高弟イェーケルスによりもたらされた。これはナポレオンの心理分析であり、精神發展史である。戰時下の日本にまことにふさはしい書であるといふべきだらう。

「私はこゝで次のことを言添へて置きたい。それはこの大人物が我々に常に崇拜の意を起させ興味をいだかせるのは、結局に於いて彼の中に見られると同じ葛藤に惱まされてゐる我々の一人々々に呼び起す强烈な反響に原因があるといふことである。」と。原著者は云つてゐるが、これはまことに切實な言葉であると思ふ。

ともあれナポレオンといふ世界無双の材料を俎上に縦横無盡の切れ味をみせてゐるイェーケルス博士もさぞかし愉快な事であらうが、讀む方としてもこれだけこまかに、多彩に、執拗に分析されると自身が分析醫にでもなつたつもりで一氣に讀了して終ふ。譯者延島氏も定めてそこに惚れ込んでこの名著を我々に紹介されたのだらうと思ふが、これだけイェーケルス博士の云ふ所が同感出來るといふのもひとつに日本文のよくこなれた所によるお陰であらうと思ふので譯者の御努力に感謝したいと思ふ。

さて、この本の何處が一番興味があつたか？ と云ふと、それは何處といつて總べてだが、特に自分本位におさらひをさせて貰ふと、次の諸點であると思ふ。

「精神的常態者が神經症患者と異る所以は常態者は無意識の傾向に出口を

つも自分の掛けてゐる前へ來て立つてゐる。それが文字通り十年一日の如く續いたので、件のサラリーマン氏も流石に氣がもめて來て、遂に或る時彼女に意中を打明けたところ、いや貴方がお降りになりますと、あとの座席が頂けますので、との挨拶に引込みがつかなくなつたと云ふ話。

×

西洋の或る雜誌に出てゐた漫畫だが、公園のベンチに掛けてゐる少女をカメラに收めようとしてゐる某畫入雜誌社の寫眞班員があつた。少女は慌てゝコムパクトを出して鼻頭を叩いたり、衣紋をつくろつたりしてすましてカメラに收まつたが、さて雜誌の表紙に出てゐた寫寫を見たら、そこには自分の隣席に新聞を見てゐた老婆の何氣ない像が出てゐたと云ふ話。

いやな奴だと

「いやな奴だと横目で睨みや、向ふぢや色目と悟りやがる」と云ふ俗謠が大正初期に流行したことは讀者諸氏の御存知の

與へる時には、その傾向を支持し、それと關聯するものを集團生活と現實の中に必らず求めずにはゐられない點である。この自己の精神的內容と一致する現實が存在せぬ時は、常態者に於ては無意識の傾向が抑壓されるのである。」

では、ナポレオンはどうであつたかと云ふと、當時フランス革命のたゞ中で、父親に對する一般的憎惡が極度にまで高まつてゐた時なので、「ナポレオンの父親コムプレクスもまた生氣を帶び、强烈な振動を感じ出した。」そこで「ナポレオンに於て非生産的で破壞的な神經症の開花するのを阻止し、防壓したのは、彼のその時の現實の條件であつたと信ずるものである。そしてこの現實の條件は、この同じ精神的材料から歷史上のいかなる前例よりも雄大な、多彩な、生産的な、一つの運命――どんな想像力も夢想だにしなかつた一つの運命を生んだのである。」そこにナポレオンの新らたなる出發があるのだが、そこへ出る道程として「父親といふものは、どんなよい父親、どんな理想的な父親でも、自分が父親であるといふことのために、いつかは必ず顚覆されねばならぬ」といふ條件がもう一つ登場して來る。

「精神分析の研究は、我々の精神裝置は動的原則に從つて動くことを明かにした。この動的原則により、アムビバレンツ的感情に於て、對立する愛と憎の二傾向の感情が同一の愛情對象(例へば父親)に集中してゐるのは、否定的な感情がまだ肯定的な愛情によつて中和され得る間だけといふことが我々には分つてゐる。この中和が不可能な段階に達すると、愛と憎とが同一の對象に集中されてゐることが出來なくなる結果、對象は一つでなくなり、幾つにも增加せざるを得なくなる。そしてまた對象が幾つにも增加

ところであらう。この歌意は甚だ皮肉であると思ふが、併しこの皮肉をも一層深く皮肉に考へるならば、「どうして先方が色目と悟つたと云ふことが君に分るか」と云ふ質問となるわけである。人間は自分の好意が先方から報いられないと、愛を憎にかへておかねばリビドー・バランスがとれなくなることは極めて普通のことであるから、この歌の場合も、愛を憎に塗りかへることに依つて自分の失戀の苦痛を處置しようとする人間の無意識心理的努力を表はしてゐるだとも解釋出來るのである。即ち換言すれば、普通に(意識的に)この歌は人間のナルチスムスへの嘲笑を意味すると解せられてゐるが、無意識的には振られ男の負け惜みの歌とも解せられ得べき面を具へてゐる。

ナルチスティッシュな人は、こちらから「いやな奴だと」思つて見ても先方では惚れられたと思ふであらう如く、劣等感の強い人はこちらから好いたらしいと思つて見ても先方では輕蔑の眼差で見返したと思ふかも知れないと云ふことも一應考へておかねばならない問題である。と

すると、二つのリビドーの流れによつて、愛と憎とが不平等な割合で混じた或ひは肯定的色彩の強い、或ひは否定的色彩の強い幾つもの感情に形ち作られる。「ナポレオンに於ては、リビドーの力が非常に強いから、この對立する二つの流れを同一對象に集中することは恐らく極めて困難であつたに違ひない。從つて彼に於ては、上に述べた對象增加の過程が明白に見られるのである。我々は彼のこの精神狀態を基礎として、次に當面の問題の理解に進みたいと思ふ。」

大體に於いてかうした動的見地からの考察と、もう一つは抽象の原型を探るその探求への道程の面白さに興味を惹かれる。ナポレオンの言葉の中で祖國と外國人とは何を意味するか？　「祖國の民衆は鎖で縛られてゐる。そして慄えながら自分を壓制してゐる者の手に接吻してゐる」さうした言葉が、たゞそれだけのものでなく、意外なほど根深い意味を潜めてゐるのに一驚せざるを得ない。

大槻先生も序文に云つてをられる如く「彼の意志や情熱や成功や失敗が何れも彼の意識から發せられず寧ろ殆んど無意識面から發してゐることを發見して驚くと共に悚然とさへさせられる」のである。

我々は無意識といふ氣紛れな横着者が、ナポレオンといふ稀代の英雄の生涯に巣喰つて、如何なる跳梁をあえてしたか？　その影響のほどをはつきりとみきはめてをくことが、同じくそれに飜弄されることの多い我々のためにも絶對に必要であると思はざるを得ないものである。

なほ雜誌に發表されたのは抄譯であつたがこゝにその責任ある完譯を再讀して印象の甚だまとまつたことを喜ぶ次第である。――（終）――

にかく他人と云ふものはなか／＼此方の暗示通りに素直に動いてはくれないものだ。何となれば、先方には先方の色眼鏡（コムプレクス）があつて、その色眼鏡の如何によつて「色目」とも思ふかも知れないし「輕蔑」と思ふかも知れないし、いろ／＼だが、第一此方自身が色眼鏡をかけて他人の色眼鏡の色合を何とか變へようと云ふのだから、土臺無茶な話ではある。さうしてそれが、舊來の教育である。とにかく自分の色眼鏡から外してかゝらう、さうして能ふべくんば相手の色眼鏡も外してやりたい、と云ふのが分析法だ。

凡治君の劣等感

八二、三頁に轉載した漫畫は昭和八年頃に東京朝日に連載せられた、麻生豊畫『人生勉强』の一節（五月五日分）である。主人公只野凡治君の就職運動振りである。彼はあちこち會社の重役に紹介狀を持つて廻るが、何處でも採用してくれない。さうしてたゞ申譯的に次から次へと無效な紹介を與へられるが、その度に

彼のナルチスムスは砂時計の上半球の砂のやうに縮りまつて劣等感が反比例に増大して行く。その心理的變化の過程を端的に圖示したのがこの漫畫の面白味である。ナルチスムスが縮こまつたつて身體まで縮こまると云ふことは實際にはあり得ないが、自分の身體についての觀念量はたしかに縮少するのだ。少くとも言葉にはそれが端的に表現せられて、から云ふ場合には人間は「小さくなつて」或は「消えも入らんばかりに」重役の前に進退する。ナルチスムスの脹れ上つてゐる時には、その反對に、「大きな面」をして、ふんぞり返る。

自分の姿を鏡面や寫眞で見て意外に堂々としてゐるのに、或は特異性を具へてゐるのに、驚くと云ふ人がある。實際には相當肥つてゐるのに、痩せて貧弱な男だと思つてゐる人がある。さう云ふ人はまづ自分には劣等感が相當に強いのだと悟るがよいのである。自己觀念の支出量が少な過ぎるのである。

これも自己分析の一つの技法となるであらう。

われに二心

大槻岐美

まだ私が娘時代にこの話を聞いた。山陰の或る地方の女學校の生徒が、教室で先生に讀本の音讀をさせられた時、聲高々と「山はさけ海はあせなむ世なりともわれにふたごころ君あらめやも」と讀み上げて、そこにゐた全生徒の失笑を買つたと云ふ話である。これは申すまでもなく源實朝の有名な和歌「山はさけ、海はあせなむ世なりとも君にふたごころわがあらめやも」の讀み違ひである。先生が笑ひ、級友が笑ひ崩れるのにその當人はそれが何を意味するのか解らずにキョトンとしてゐたが、側の人に指摘されてはじめて分りまつかになつて顏を伏せ、泣き出して了つたと云ふことであつた。

これは確かに願望充足的に觀念が先走りした讀み違ひである。ナルチスティッシュな女の戀愛態度の無意識を讀み違ひに托して表現したものであらうと思はれる。この話をして吳れた人はつけ加へて「己惚れの強いのも程がある」と云つた。それは男の人であつた。私もさうだと思つたが、又一方にはさうした讀違へた歌に同感出來ないこともないやうな氣がした。われにふたごゝろ――と心の中で口ずさむ度に一種形容し難い微笑が唇に上るのを感じた。今にして思へば、女の戀愛態度の根柢を貫く願望であることを直感したからであらうと思はれる。

われにふたごゝろ――この願望、盲信、夢あればこそ、女は自分が愛すると信じてゐる男の爲めに子を産み、育て、家を守り、母を兼ねて娘の如く生活を任せ、男次第の暮しにとにもかくにも座つてゐることが出來るのだ。これも己惚れの效用の一つであらう。（本號九一頁參照）

精神分析學入門講話（五）

シグムント・フロイド（K・O・生譯）

葉を迂路を辿つて思ひ出さうと試みる。すると本當の名前を搜すに手掛りとなるべき第二の名前の方を忘れてしまふ。今度はこの第二の名前を追蒐け廻してゐると、第二の名前を忘れてしまふと云ふ風である。同じことはまた植字の場合にも見られるが、それは普通に植字工の間違ひと云ふことになつてゐる。そのやうな頑固執拗な誤植が嘗て社會民主黨の機關紙上に見られたことがあつた。或る祭典の記事がかう書いてあつた——當日は畏くも Kornprinzen（穀物王子 Kronprinzen 王儲の誤植）も臨席せられた、と。その翌日の紙上には直ちに正誤が出てゐた。機關紙は陳謝してそれは勿論 Knorprinzen（瘤王子）とすべきであつたと書いてゐた。さう云ふ場合にとかく人々は誤植の惡魔だとか植字箱の怪異とか云ふ風に呼ぶものであるが、かう云ふ表現は如何なる場合にも誤植の心理生理說では片付かないのである。

行り損ひにはまた澤山の小さい副的現象が伴ふものであるが、それを人々は理解してをらず、また從來の說明では一向はつきりしないものである。例へば、人々は誰かの名前を度忘れしたりすると、それについていら〳〵し、何とか思ひ出さうとしてその事に運りに拘泥してゐる。いら〳〵してゐるに拘らず、どうして彼の注意力が思ふやうにその語に集中されないのであらうか。それは彼自身の云ふやうに「口先まで出かゝつてゐる」に拘らず、さうして誰かゞかうだらうと云つてくれゝば直ぐにそれだと認識出來るのに、どうしてそれが想起出來ないのであらうか。また行り損ひが複雜になり、互に絡み合ひ、互に入れ代り合つてゐるやうな場合もある。最初の時に或る人は媾曳を忘れる。第二回目には今度こそは忘れないやうにしようと決心してゐたに拘らず、今度は所定の時間を間違へると云ふやうなことがある。忘れた言

云はゞ暗示をかけることに依つて云ひ損ひを云はせることが出來るのを諸君は御存知かどうか、私にも分らないが、かう云ふ珍談がある。嘗て或る新米役者が『オルレアンの少女』の舞臺で、「コンネタブル（Conétable 警吏の妻）が刀を返しました」と王様に注進する重要な役割を振當てられたことがあつたが、試演中に主役がこのおど〳〵してゐる新參者に向つてこの臺詞の代りに「コムフォタベル（Komfortabel, 一頭立馬車）が馬を返しました」と幾度も繰返し云つたところ、果して彼の計畫通りになつてしまつた。開演中にこの氣の毒な男は十分に氣をつけてゐたに拘らず、否、あまりに注意し過ぎたゝめに、この間違つた注進で初舞臺をやつてのけた。

行り損ひの總てこれ等の細々した特徵は注意逸脫說では說明しきれない。併しその故にとてこの說を全然間違つてゐるとするには及ばない。そこには何か缺けたものがある。その缺けたものを補へば完全になるであらう。併しながらまた行り損ひの多くのものは或る別方面から觀察することが出來るのである。

行り損ひの內でも我々の意圖に最も適したものとして云ひ損ひを選んで見よう。書き損ひだつて同樣、我々の意圖に適當してゐないことはない。そこで一度斷つておかなければならないことは、我々がこれまでたゞ、如何なる場合、如何なる條件の下に於いて云ひ損ひをするかと云ふことを問題にし、またそれに就いて解答を與へたのみであつたと云ふことである。併し我々はまた我々の興味を別方面に向け、何故に正にこのやうな遣り方で云ひ損ひをし、他の遣り方で云ひ損ひをしないのであらうかを知りたいと思つてもよいわけである。何が云ひ損ひをさせるかを考へることも出來るわけである。この問題への解答が得られ、云ひ損ひの效果が明かにならない限り、この現象は心理學的方面からは偶然的現象であると云ふことになる（よしんばそこに生理學的說明がついたにしても）、その事は諸君にも明かであらう。私が或る云ひ損ひを演じたとすると、私はそれを無數の方法でやり得るわけである。一つの正しい語に對して凡百の間違ひの中の一つを云ひ損ひ得ることは明かである。一つの正しい語に對して、無數に澤山の歪みが生じ得るのである。私が或る特定の場合にあらゆる可能なる云ひ損ひの中から特に或る方法を選んで云ひ損ひをしたとすれば、そこに何かの原因が存在してゐるのでなからうか。それともそれは偶然か、氣まぐれか、抑々そこに理性的解決を下し得べき餘地のない問題であらうか。

メリンガー及びマイヤーの二家（一人は言語學者、一人は精神病學者）に、一八九五年にこの方面から云ひ損

ひの問題を闡明しようと試みた。彼等は實例を蒐集してまづ純粋な記述的な點から記述した。それだけでは勿論何ら説明はつかないが、併し説明への途は開けるわけである。彼等は、云ひ損ひに依つて話の目的が外れてしまつた歪みを分類して、轉置、前置、後置、混置(汚染)、代置(代償)などゝした。私は諸君にこれ等二家の與へた實例の範疇を示すであらう。轉置(Vertau chungen)と云ふのは、例へば或る人が「ミロのヴヰヌス」と云ふべきところを「ヴェヌスのミロ」と云ふ如きで、これは語の順序の轉置である。* 前置(Vorklang)と云ふのは、Es war mir so schwer auf der Brust(わがむねはおもし)と云ふべきところを、Es war mir auf der Schwest(わがむもし)と云ふが如きである。後置(Nachklang)の例は、あの周知の祝杯珍話、Ich fordere Sie auf, auf das Wohl unseres Chefs aufzustossen(さア我等の上官の幸福のためにむかつき〔杯をつき合はせ ansto'sen の間違ひ〕ませう)』の如きである。

註。本誌本號八八頁に大槻岐美氏の紹介してゐる讀み損ひの實例は轉置の範疇に屬するものであらう。(譯者)

これ等三種の云ひ損ひはあまり屢々起るものではない。遙かに多數に觀察せられるのは、收縮又は混置(Vermengung)に依るものであらう。例へば或る紳士が淑女に向つて街上でから話しかけた。Wenn Sie gestatten, mein Fräulein, möchte ich Sie gerne begleit-digen.(「およろしければ、お嬢さん、お伴しませうか」と云ふべきところを(辱めませうか」)と云つた。序ながら、この青年紳士はその令嬢から嫌はれてしまつた。代置(Ersetzung)の實例として兩家は、或る人が「標本を孵卵器に入れる」(I ch gebe die Präparate in den Brükasten)と云ふべきところを「書信函」(Br'efkasten)と云ひ損つたのなどを擧げてゐる。

兩家がその蒐集したところに基いて試みた説明は到底不完全である。彼等の意見では、一語の音と綴とは種々な價値性を持つてゐて、高度の價値性的要素の神經支配だ低度の價値性要素を障害してそこに影響を及ぼすのだと云ふのである。彼等は大して瀕繁に起らない前置、後置の例に基いて説を立てたのであるが、他種の云ひ損ひに對してはこの語音偏重(勿論その事實は存在するにはするが)は問題になる餘地がないのである。最も屢々起る云ひ損ひは、人々が或る語の代りに別の、それに甚だ似た語を云ふ場合であつて、この似てゐると云ふことが多くの場合云ひ損ひの説明を供するに足るのである。例へば、或る教授は、その就任演説で「私は私の甚だ尊敬すべき先任者の功績を嗣ぐに適し(geeignet ゲアイゲネット)ません」

と云ふべきところを「好み（geneigt）ません」また或る別の教授は「女子の性器に關しては多數の誘惑（Versuchungen）」と云ひかけて「いや失禮……多數の研究（Versuche）があるに拘らず……」と云ひ直した。

併し云ひ損ひの最も普通にしてまた最も驚くべき種類は人々がその云はむと意圖したところと全然正反對のことを云ふことである。その場合には語音偏重や相似效果は問題にならない。その代りとして依憑しなければならない考へ方は、相反なるものが相互に却つて強い概念上の近似性を持ち、心理的聯想上特に近接した關係にあると云ふことである。この種の云ひ損ひには歴史上の實例がある。――我國の衆議院の或る議長がその開院式を宣するに當り次のやうに云つた。「諸君、私は出席議員の數を檢べまして、それにて閉會を宣します。」と。

相反關係と同樣にとかく間違ひを起させ易いのは、何らかの全然別途に向つてゐる聯想――全然不適當な事情の下に起り來る聯想――である。例へば、かう云ふ話がある、ヘルムホルツの子供と有名な發見者にして大工場主たるシイメンスの子供との結婚披露の宴で、名聲高き生理學者デュボア・レイモントが祝辭を述べなければならなかつた。その時彼はその確に華々しかつた演説を結ぶに次の語を以てした。「こゝに新會社シイメンス……ハルスケの成功を祈る」と。ハルスケとは勿論、古い會社の名前であつて、二つの名前を並べることはベルリン人にとつては、ヴイン人にとつてリイデルとボイテルとを並置することほどに當然なことであつたに相違ない。*

註。わが三井、三菱の如きものであらうか。（譯者）

そこで我々は語音關係と類語關係との外に、言語聯想の影響を考慮に入れなければならないことになつた。或る一聯の云ひ損ひの場合に於いては、それが語られる前にどんな事が語られてあつたか、またどんな事が考へられてゐたか、と云ふ事をまづ問題にしてかゝらなければ、その云ひ損ひの觀察や說明は、到底出來ないことがある。かう云ふ次第で、メリンガーが強調した後置の場合は、これまた一層遙かなところに淵源してゐるのである。――私は告白しなくてはならない、我々は今や云ひ損ひと云ふ行爲を理解するに今までよりは一層押進めて來たやうな感じが大體に於いてするのである。

けれども、我々は上述の考究の間に研究し甲斐のある云ひ損ひの實例に就いて一つの新しい印象を得たと公言しても敢て過言でないことを私は望む。我々は抑々如何なる條件の下に於いて一體に云ひ損ひが起るかと云ふことをまづ研究し、次に云ひ損ひに依る歪みの種類は如何なる力に依つて決定せられるかと云ふことを研究した

が併しながら云ひ損ひの效果それ自身だけ――その起源への顧慮は別問題として――に就いては、一向これを眼中において來なかつた。で、もしそれをやらうと云ふ決心をするならば、結局或る少數の例では、云ひ損ひとなつて出て來た實例にも一つの意味があると云ふだけの勇氣を持合せねばならない。そこに一つの意味があるとは、どう云ふ事か？　さう云ふ云ひ損ひはやはりそれ自身の目的を果さうとする、一つの完全な心理的行爲として、意義及び內容を有する一つの表現として認めらるべき權利を有すると、その效果から見て云つてよいであらう。我々はこれまで常に行り損ひに就いて語つて來たが、併し今や行り損ひは屢々全然正當の行爲――たゞ他の、期待せられ、又は意圖せられた行爲の代りに出て來た行爲――であるかのやうに思はれて來た。

行り損ひのこの固有の意義は實は個々の場合に於いて判然と摑むことが出來、見落し難いものであるやうに思はれる。衆議院の議長がその開會を最初の一語で閉會にしてしまつた時には、その云ひ損ひが起つた事情をよく調べて見ると、そこに意味を發見する方に我々は傾いて行く。彼は開會してもどうせ碌なことはなからうから開會早々閉會にして了へたらいゝと思つてゐたのでもあらう。このやうに意味を指摘すること、即ちこの云ひ損ひを解釋することは、我々にはさして困難ではない。また或る婦人が一見いかにも愛想よく「この素晴らしい帽子を貴女は御自分でお見立て(aufgeputzt)なすつたのでせうと」云ふべきところを「素人細工(aufgepatzt)なすつたのでせう」と云つたとすれば、世界の如何なる科學もこの云ひ損ひが「この帽子は素人細工だ」との意味の表現であることを嗅ぎ出すに妨げをすることは出來ない。また或る嬶天下の夫人が「良人はお醫者さんにどんな食養生をすればよいかとお尋ねしましたが、お醫者さんは別に食養生などしなくてもよい、何でも私の好きなものを飲み食ひすればよいと云はれました」と述べたことがあるが、この云ひ損ひは夫人のこれからの計畫を歴然と表現してゐるのである。(未完)

精神分析學語彙（三四）

一、偶然的 (akzidentell) ――外部から來たつてそれが本人の素因の或る方面に關係のあつたために效果を及ぼし、それが本人の病氣原因となつたと云ふ如き體驗を偶然的と呼ぶのである。既に素質的な傾向があり、而もそれが以前の偶然的な契機に依つて强化せられてあつて、なほその上に右に述べたやうな偶然的な契機が加はるのでなければ神經症は現はれて來ないのである。神經症發生の偶然的契機は二種に分類するこ

とが出來る。一は生得の天性的傾向に深く影響を及ぼしてゐる早期幼兒的のもので、吾人はこれを素因的偶然的契機と名付け、例へば幼兒期に成人が誘惑的又は性感情誘發的なことを行つたり、或は成人の或る行爲を見たり聞いたりする如きである。さう云ふ經驗は彼等の心理に變化を及ぼし、大抵の場合、神經症的素因を强めるやうになる。後年になつての、殊に思思期後の體驗にして、それが遂に神經症を勃發せしめるに至つた場合、吾人はそれを決定的偶然的契機と名付ける。例へば、失戀、ナルチスムスの毀損、戀愛對象の喪失、その他である。精神分析的療法に依つて偶然的契機の效果を取除くこと、又は弱めることが出來る。

一、酒精嗜慾癖（Alkoholismus）——一般的にはアルコーリスムスとは酒精物への惡癖的嗜慾を云ふ。吾人は假りに「酒精嗜慾癖」なる譯名を與へて見た。併しこの概念の内にはアルコール中毒症狀をも包含せしめるのである。アルコーリスムスには急性のものと慢性のものとがある。心理學的には急性的形式（アルコールに依る酩酊）は、抑壓が解除せられ昇華が退行的になつてゐると云ふのがその特徴である。急性的酩酊の怡樂的氣分をフロイドは躁狂狀態に比較し、中毒的に抑壓を解除（超自我を引下し）するのがその目的であると説明した超自我引下し的影響は急性的形式の酩酊のみならず慢性的のものも同樣の作用を及ぼす。慢性的飲酒者がとかく粗野な行動や、露出的態度や、近親姦的不德行爲や、强烈な同性愛的傾向などを示すのは、それに依つてその説明がつく。殊に同性愛は、酒癖者に於いて容易に觀察し得る。それは一部分には酩酊に依つて性能力の減退してゐるためであり、また一部分には酒呑み仲間は多く男同志であるからである。飲酒家の嫉妬癖は同性愛的誘惑への防禦であり彼等のその妻への疑ひは自分が無意識的に愛してゐる男への感情の投出である。飲酒癖の特殊な病源的契機は特に强烈な口唇性感であるやうに思はれる。

一、酒亂（Alkoholdelirium）また Delirium tremens とも名付く。幾年もに亙るアルコールの濫用によりて起る。視覺及び觸覺に錯覺の生ずるのがその特徴であるが、その錯覺は大抵物が澤山に感ぜられる。例へば、鼠か蟲が澤山に匍匐ひ廻つてゐるとか、無數の糸、噴水が見えて患者を惱ますとか云ふ如きである。患者は的が外れてゐて現在の立場を誤認したり、寢床にゐるのに職場に居ると思つたりする如きである。フロイドの意見では、酒亂は急性錯亂（マメンチヤ）と病源構成に類似性を示してゐる。

一、念慮の全能（Allmacht der Gedanken）——自分自身の念慮（思想）の世界に對する或る一定の心理的態度を呼ぶ名稱である。かゝる心理的態度は原始人及び幼兒（殊に極幼兒）並びに神經症者（特に强迫神經症者）に於いて見られる。念慮すればそれだけで或る出來事が生じ、觀念すればそれだけで或る事實が現れ、願望すればそれだけで或る行爲がなされると云ふのが、右の如き心理的態度の特徴である。現實よりも心理的態度をこのやうに買被ることの原因は、幼兒及び原始

人が自分自身に對する心理的態度に存し、その態度を神經症者も亦部分的に保有してゐるのである。幼兒はその發達の或る段階に至るまで自分自身をあらゆる出來事の中心であると考へてゐるが、それは彼の身邊にあつて彼を世話する者等が響きの聲に應ずる如く彼の要求に應へてやるので（さうしてそれは幼兒の世話をする者の態度としては不可避であるが）、自然彼等はその信念を強めるやうになるのである。云はゞ彼等は公然、誇大妄想の中に生きてゐるのであつて、それがまた彼等の自己愛の表現であるのだ。原始人に於いてはこの心理的態度は廣く行亙つてゐるが、神經症者に於いては部分的に保存せられてゐる。自分自身への强烈なリビドー纏綿（それをナルチスムスと名付けるのであるが）は、自然己れの心理的亢奮に高度の價値をおくやうになり、從つてそれは全能であると考へられるやうになるのである。かゝる念慮全能感の表現せられたものが魔法であつて、それは或る事を觀念し又は念慮すればそれだけでその事が事實化すると考へてゐるもので、この觀念的、空想的方法に依つて外界を動かさうとする術である。併し念慮全能感の結果としては、現實的に行はざるに良心の苛責を自我に及ぼすことがある。何となれば、惡い念慮、惡い願望は既に行爲としての無意識的價値を有つてゐるからである。

一、外界變形的（Alloplastisch）——外界から來る不快の影響を外界の變更に依つて回避せんと欲する如き反應を、フェレンチーはかく名付けた。これに反し、自己を變更することによつてこれを回避せんとする如き反應を自己變形的と名付ける。外界變形的反應は發達の後年に至つて自己變形的反應として現れる。

一、夢魔（Alptraum）——夢魔は殊に烈しい不安の夢であつて、その特徴は胸を押しつけられ、締めつけられるやうな感じがし、そのために、四肢の自由が利かなくなつたやうな狀態に陷るものを云ふ。その原因は不安の夢と同じであつて、その根柢には、アーネスト・ジョーンズに依れば、激しい精神的葛藤が横たはつてゐる。さうしてその根柢の中心は性本能感の抑壓せられたる要素である。夢魔の潜在的内容は正常なる性交の表現である。尤もそれは婦人的立場として正常なのであるが……。胸を押しつけられること、自己を完全に奉げること、四肢の自由の利かないこと、更に性器に分泌のあることなどがそれを證明してゐる。（E・ジョーンズ「夢魔」論參照。）

——未完——

内外彙報

ルー・アンドレアス・サロメの死

今日この事を報道するのはいさゝか遲すぎて滑稽だが、やはり思ひ直して報告しておく。この名前は讀者諸氏には親しみのない名であるが、哲人ニイチェや詩人マリア・リルケの愛人であつた人だと云へば、人々は急に興味を持ち始められるであらうと思ふ。彼女は昨年二月五日に七十六歳の高齢を以て亡くなつたが、生前フロイドに師事して熱心に精神分析學を研究し、アナ・フロイド嬢と親交あつて、自ら親しく分析治療の實際にも當つたことがある。餘程頭の鋭かつた婦人と見え、ニイチエの思想に深い理解を示したので、哲人の思慕は彼女に寄せられ、結婚の申込みとなつたが、如何なる理由のためか拒否せられたので二人の親交もそのまゝ絶えざるを得なくなつた。後、窮迫の詩人マリア・リルケを助けてそれに母親的愛情を注いだと云ふから餘程男性コムプレクス的、ペニスナイド的、鬼子母型の婦人であつたと思はれる。年少にして精神分析學を知り得なかつたのが返す〴〵と殘念であつたと晩年に述懷してゐたさうだが、「彼女の若かつた當時は勿論まだ斯學は存在してゐなかつた」とフロイドは『國際精神分析學雜誌』昨年度第一冊の卷頭に於ける弔辭の中で述べてゐる。何しろフロイドとは五歳くらゐしか年齢は隔つてはゐず、フロイド四十四歳の頃に精神分析學は發祥したのであつたのだから……。

『精神分析季刊誌』本年度第二冊

一、「永生不死の感に就いて」グレゴリー・ジルボルグ（ニウヨオク）――フロイドの「死と戰爭」論を參考しつゝ、死、再生、自殺、情死などの諸問題を論究す。

一、「早期幼兒期に於ける現實への適應」テレーゼ・ベネデク（シカゴ）――本誌第五卷第六號幼兒心理號卷頭に紹介したフェレンチーの有名な論文を更に敷衍せしめんとした論文。

一、「慢性的皮膚病の精神分析的研究」レオ・パルテマイヤー（デトロイト）――

一、「不安に對する防禦としての詩歌創作」ハリ・レヴィ（シカゴ）――

一、「靑年期の型」ジイグフリイド・ベルンフェルド（サンフランシスコ）――

一、「防禦としての敵意の效用」ルイス・ヒル（ボールチモア）

一、新刊紹介

最近國內關係時事

▲『診療と經驗』十三年五月特輯號『治療の實際』には、「陰萎症の療法」（丸井清泰）「夜尿症の療法」（同氏）「月經痛の療法」（巴陵宣祐）等の寄稿あり。

▲『怪奇・瀧夜叉憑靈』高橋鐵作――『新靑年』特別增刊。

▲『氷人創生記』高橋鐵作――『オール讀物』九月特大號。

▲『母性日本』（霜田靜志氏編輯）の座談會（六月十七日）に尾高豐作、高田義一郎、平井恒、伊福部敬子、大槻岐美子の諸氏等出席。記事は同誌七月號に掲載。

▲宮田戊子、大槻憲二共著『一茶の精神分析』は五月二十日、岡倉書房より發行。

▲『ナポレオンの精神分析』延島英一譯は七月十九日、岡倉書房より發行。

▲『不良少年の無意識心理』大槻稿――『科學ペン』七月號。

▲『トルストイ作クロイツェル・ソナタの分析評』大槻稿――『人生創造』七月號。

▲『學生及學生論の精神分析的見解』大槻稿――北海道帝大新聞七月二十六日號。

▲『男女關係と生死本能』大槻稿――『人生創造』八月號。

▲『夏の景物・扇の精神分析』大槻稿――『眞理』八月號。

▲本誌前號（冊子）及び前々號（正誌）の内容についてはそれぐ＼の廣告面を參照ありたし。

本研究所研究會例會

七月例會は十八日夜、アメリカン・ベーカリにて催された。食前司會者から本誌前々號所載「語彙」に就いて解說あり、續いて食事に入り、食後、新來會者中島菊治氏（立川小學校訓導）の紹介があつた。

過般公務を帶びて朝鮮滿洲方面を視察して來られた大久保眞太郎氏に、まづ旅行談を乞うた。圖們江邊の日ソ對峙の樣子をまづ手にとるやうに描寫せられ、續いて半島人の分析觀察を試みられた。まづ目につく事は、彼等に色彩のないこと（その白衣に代表せられてゐる如く）、從つて花を愛せず、花瓶の製作がない。花壇もなし。祭禮の時には彩衣を纏うが、平常は頑固に白衣主義を奉じてゐる。子供等にも玩具がない。況んや着彩の玩具は絕對になし。何故にこのやうに生活の歡びに對して拒否的なのであらうか。

次に大槻氏「經濟心理」に就いて所感を述べられた。價値觀念とリビドー量との關係についてである。黑澤氏はまた民族的劣等感や種々の戀愛心理に就いて觀察談を述べられ、中島菊治氏は小學兒童の繪畫創作心理に就いて種々の問題を提示して解釋を求められた。

出席者は右言及數氏の他に、高橋鐵、倉橋久雄、田中虎男、大槻岐美、北山隆、北垣照雄の諸氏であつた。なほ、富田義介、岩倉具榮、塚崎茂明、藤田由美の諸氏からは丁寧な缺席挨拶があつた。

研究所だより

八月は例年の如く、研究、講習兩會とも休みにしました。

▼大槻憲二氏は八月六日次男威二君（府立第十一中學生）を伴うて、東京灣汽船菊丸にて房州館山に赴かれ、數日にて歸京せられた。その間、近くの有名な船形觀音に參拜せられ、如何にも判然たる母胎空想の體現なるに微笑せられたる由。

▼土屋喜一氏は久しく病氣のため入院中のところ幸にして全

快、豫後保養のため郷里宇都宮市に歸られ、當分滯在せられます。

▼駒澤大學教授富田義介氏は『構文を明かにせる英文解釋法』(一圓六十錢)なる新著を培風館から上梓せしめられました。

▼延島英一氏は『中央公論』八月號に『ゲ・ペ・ウ脱出者の手記』を掲げて甚だ好評を博し、紹介者大槻氏も大いに面目を施してゐられます。分析的小說家としての高橋鐵氏の位置も確立して來たやうですし、會員諸氏が追々各方面に進出せられることをお慶び申上げます。

▼別頁發表の文献維持委員募集につき、各位の御支持を切に願上げます。

▼八月十二日、ベルグラー氏から大槻氏宛便りあり、處女性心理號(同氏文所載)受取の禮を述べ、八月にはパリにて精神分析學總會があり、その席上赤面癖について新見解を發表するとの抱負を述べ、大槻氏にも出席せられゝば幸甚だがなど、元氣にあふれてゐる文面であつた。

通信

▲小生長年强迫神經症に惱まされ精神分析により幾分づゝではありますがよくなりつゝあるとみられる現狀ですが、もう一つ根本的に工合好くならないので弱つてをる次第です。然し精神分析には深く傾倒してゐる譯でして、若し出來れば精神分析を根底として社會批評社會の眞の進步を期待し運動したいと、まあ自分勝手な熱をいだいて居る次第なのですが、遺憾乍ら神經症的障害の爲め思ふにまかせず、勉强も捗らないのですが、然し今後斯學の硏究を積んでゆきたいと思ひますので、今後誌友に加へて戴きました。分析療法に於いて一つの矛盾を克復してゆかなければならない樣ですから小生などの場合仲々實績を上げにくいと思つてをります。小生の症狀はエディポス・コムプレクス、去勢恐怖に因するものらしく、例へばゴルフをなす場合ボールをたゝいて穴の中へボールが入つてゆく迄を映畫に於ける如く、その一什始終を頭の中で描いてみてもその通りゆかず、左側から左手の如き何か得態の知れぬものが飛び出しボールを遮るのです。又ボールが眞直ぐゆかず勝手に變な方へそれて廻り廻つて穴の中へ入つたと思ふと、穴の中へ入つてゐる所を想像してゐるのに、ぢつとしてゐず飛び出して來ると云ふ次第で、或る一つの思考なり行動なりに對し必らず遮るものが現はれ、觀念や情緒、運動系の中斷(完全なる中斷でなく、實際上は不完全乍らも遂行し得る方が多い樣に思ふが、目的獲得は難い)が現はれるのです。

追跡妄想症的のものもありますし、攻擊慾が殆んど內攻してゐるのです。病苦を語る事が幾分でも慰めになり一つの刷ケロとなるので場所ではありませんが冗々と述べました。とに角自己の好きな仕事に初めから携つてをれば未だしも輕く濟まし得たかも知れませんし、且小生の神經症の直接的外國、契機にも出喰はさずに濟んだかも知れず、乃至症狀を重くしない立場に立てたかも知れないと殘念に思つてゐる次第です。

それにしても幼兒、子供の躾け、養育に於いて戒心すべき事多く、親の再教育（再教育しても駄目でせうが）の必要を感じます。問題の親は寧ろ問題でなく問題でない親が問題だとも考へてゐる次第です。（京都市、大木生）

▲事變勃發以來感慨深い一年が流れました。久し振りに大阪に入港致しました丁度昨年の今頃、當大阪に參りました節は港も市中も非常時風景に彩られ戰時氣分が横溢して町には獻金募集、千人針や歡呼の聲に送られる出征兵士で大混雜であつた事が思ひ出されます。寄ると觸ると話は何時も戰爭に關する話題のみと云ふ有樣でした。種々談話の中から分析的に見て興味のある話が一つ御座いました。八月上旬岡山縣玉港で初めて聞き又九月には函館に於ても其れと大同小異の話を聞きました。其の概略を申しますと、或る出征兵士が出發の日大勢の見送人が門口に詰め掛けたのに當の出征兵は戰地に行くのを嫌つて逃げて廻る。兄貴は思ひ餘つて出刄を振つてゞも應召させ樣とする。其處に憲兵が駈け付けてピストルで召集兵を射殺したと云ふ樣な話で、本人がどうして召集を嫌つたかの理由は、言ひ交した女があつたとか其の他は話を面白くするための尾鰭を附した程度の物で、押入れの中へ匿れたとか山腹に追ひ詰められて射殺されたとか、死骸は一週間放置されたとか、云ふ樣な物でした。で、此の談話が同僚數名の間に交はされ種々議論の最中私が是れは事實譚ではないと判然と云ひ切りました處が、其の内の一人が稍々肯定出來たらしく流言蜚語と類似して居ると語りました。分析を知らない人々には或は事實談にも聞へませうが、人間の深部心理を取扱ふ分析學からはすぐ氣付く事で、此の場合憲兵が超自我であり、現實原則に從はせ樣とする兄貴が自我であり、召集兵がエスに相當すると思はれます。只是れだけでは何にかな物足りない感じが致します。表現能力に乏しい小生を一つ分析して見て下さい。（神戶市、三留賴介）

▲貴所には精神分析學研究を普及のために日夜お忙しく御過しのこと邦家のために喜びに不堪候。小會こと二ヶ年餘り前より精神分析誌により之を育兒法指導の上に應用すべく研究をつゞけ居り候。貴誌七月號、斷種法論特に面白く關心を以つて回續仕り申候。六月號冊子の「斷種と優生號」是非拜讀致度存じ居り候。號を重ねる每に特殊な御研究、眞に尊いことゝ存じ候。御苦心の程も察せられ申候。今一度「性慾心理研究號」を御刊行あらんことを願ふものに御座候。今後よろしく御指導の程お願ひ申上候。（愛知縣、コドモ愛育會、榊原純治郞）

▲大槻氏著『分析家の手帖』は大變有益かつ興味深く讀了いたしました。私が初めて斯學の著書に接したのは、四年ばかり前の事で、ふとした動機で手に這入つた『精神分析』（世界大思想全集）であります。當時は亂讀の時代にて只だ一讀したと云ふにすぎませんでした。處が昨年、春陽堂刊行の『フロイド精神分析學全集』の三四を讀む機會を得て、其の驚異の科學なるに目を見張つた次第です。が、何分にも淺學のものとて、十分の勉强も出來かね、專ら諸先輩の御指導を仰ぎたく、今度特別誌友のお仲間入りを致しました。（山形縣、工藤久吉）

（附　　録）

Die Geschlechtskälte der Frau

Ihr Wesen und ihre Behandlung

von

Dr. Eduard Hitschmann und Dr. Edmund Bergler

冷感症とその治療

ヒッチマン博士・ベルグラー博士・共著

高水力太郎譯

（八）

―目次―

譯者曰――我等はヒッチマン及びベルグラー兩氏共著『冷感症』研究をこれまで本誌上に數回に亘り一節づゝ譯出して來たが(前頁參照)、今後はこの附錄に於いて連續的に譯載することにした。此の論文は非常に重要であり、興味もあり、且つ世人を益するところ極めて多きものではあるが、それだけに我等は或る種の冒險を敢てしなければならないものである。讀者、希くは、編輯部員の科學的誠意と犧牲的精神とを汲んで、十分の支持と愛讀とを賜らむことを……。

フロイド先生
額面用肖像頒布

昭和八年春にフロイド喜壽祝祭劇を當研究所が公演しました際に、フロイド博士から本研究所に寄贈せられました大肖像畫を縮寫して、讀者諸賢にお頒ちします。その鋭い眼光と、高邁な額と、力强い鼻梁とに於いて、よく碩學の性格とその學風とが象徵されてゐます。

品　種――寫眞(シュムツァー原作畫。立派なものであることを信じて下さい)

用　紙――上質寫眞用紙

大きさ――縱九寸五分、橫七寸五分

代　價――一圓五十錢(送料共)但し特別誌友には一割引いたします。

注　意――額に入れる際、裏面に新聞紙を挿入しますと印刷インキがしみて黃色くなります御注意下さい。

にとつて恐怖は危險への反應であるばかりでなく、「また多くの患者に於いてはそこに人爲的な、不自然な恐怖と呼ばれ得べきものがある。さうしてそれが色慾的滿足の目的に役立つのである。それのみならず、色慾化した恐怖と色慾化した罪障感との間には密接な關係が存する。このやうにして『良心の咎め』は王侯の如き氣前よさを以て被虐的快樂を供しつゝあるところの暴君である。」と。＊

註＊この一節はベルグラーの原著にはない部分であるが、P・L・ワイル氏の英譯書に附加してあつたので、なるほどあれば日本の讀者にとつても便利であると思ひ、こゝに附加しておいた次第である。（邦譯者）

仕事に對する深刻な心理的障碍を持つてゐる或る婦人患者が分析を受けに來た。實はその直前に彼女は久しく望んでゐた仕事にありつくことが出來たのだ。その仕事にさへありつくことが出來れば、金錢上で獨立することが出來、從つて加虐的な夫から離れることが出來るわけであつたのだ。この夫と云ふのは、世にも稀なる暴虐著であつた。彼女自身の論理的洞察と親戚の者等の切なる勸めに從つて、財政上で獨立することが出來さへするならば直ぐにも夫と別れるやうにするのだと誓つてゐた。ところが、その條件が協へられるや否や、彼女は深い沈鬱に陷り、仕事が出來なくなつてしまつた。ところがこれを分析して見ると、患者はその夫の暴虐を無意識的に是認し、被虐的に享受してゐたことが分つた。夫の暴虐の加へ方は道德的苛責の完全に微妙な體系を形成してゐたのだ。殊に意味深長なることは、患者がその夫に對しては全然冷感であり、彼女の滿足は不安の快感の享受にあつたが、その他にまた懲罰への強い要求があつた。患者がその症候の意味を理解した時、彼女は間もなくある口實を構へて分析處置を放棄した。この患者の場合は、終りの頃には變態的被虐性へと密接に近づいて行つた。本來彼女の道德的被虐性及び色慾的被虐性は全然無意識的であつた。

今一つ似た樣な患者を扱つたことがあつたが、その場合も同樣な結果に終つた。

これ等の種類の患者の分析診療の結果は疑はしい。

（ロ）被虐性的、正常女性的體驗からの逃避。

この型に關してヘレーネ・ドイチはその論文『女性的被虐性並びにその冷感症への關係』（『國際精神分析學雜誌』一九三〇年）の中で注意を促して曰く、母の性的體驗を特に被虐的に考へてゐる少女は、この母の體驗を拒否することも特に强烈であると。危險を齎す如き、被虐的な願望充足への不安からして性は拒否せられる。正常の場合には、男

根的傾向の能動的壓迫の代りに被虐的空想が這入り込んで來る。――「私は父さんに去勢――克服――せられたい。さうして××を持ちたい。」と。この去勢・克服・分娩の三位一體は明かに被虐的性格を帶びてゐる。被虐的傾向が抑壓せられる結果、病理的な場合には女性的自我への强烈なナルチスティッシュな纒綿が現れて來る。女性的自我はエスの被虐的傾向のために脅威を感じ、ナルチスティッシュな防禦的地位に已れをおくやうになる。――

破瓜及びその苦痛に對する被虐性的不安は屢々極端な割合に達する。それが被虐性的空想に依つて誇張せられるためである。出産もまた重大な損傷、破裂と云ふ風に考へられて、頑强に拒否せられる。性に關聯した一切の接觸を恐怖し、それを苦痛であると考へてゐる婦人がある。恐れてゐた子供が生れると益々夫への憎惡が增してくる。赤ん坊を世話したり哺乳したりせねばならぬことは、愈々自分の立場の惡いことの理由となる。「男が一瞬の快をとるために女は片輪になつたり破滅に陷つたるする結果となる」と云つたようなことを口にするが、そこに如何に混亂があるかは明かである。エスの方では苦痛、受難、攻擊などを願望してゐるが、自我の方ではそれを容認することが誇りを傷けられると云ふその困難が被虐性となつて現れてゐるのだ。時としては、この方面に向ふ早期の亢奮的空想が罪障感のために抑壓せられることがある。もしも被虐的衝動が第二次的で、早期の加虐的衝動のあとに附け加はつたものであるならば、罪障感は前者の方に一層緊密に結び付いてゐる。これ等の被虐的冷感症は、前に述べた願望型、復讐型の精力的な、名譽慾盛んな冷感症とはその本質に於いて異つてゐる。前者は受動的で忍耐的で、受難に喜びを感じないやうに見え、不安的にあまりに敏感で、接觸及び快感增加に對して含羞草(ミモザ)のやうに不安的である。彼女等の夢には屢々種々の失敗が現れる。

この種の患者の治療には非常な困難が橫はつてゐる。と云ふのは、彼女等の被虐性を意識化してやつても、それが相手の加虐に滿足を感じる能力が出て來るとは限らないからである。とは云ふものゝ、時々癒ることはあるのだ。併しながら、その父に依ての如くその夫に依つて打たれることの空想を持つてゐる冷感症の婦人は、その打たれることに依つて性的感應を得るのだときめてしまふわけには行かない。

診療の結果如何はその被虐性の程度如何に懸つてゐる。

第七、ナルチスムス的機制を伴へる冷感症。

根柢に於いて自分自身をのみ愛し、他を愛さうとは思はず、寧ろ自分自身の愛されることをのみ考へてゐる婦人が即ちこの型である。男から望まれるといふことは、この型の婦にとつては、彼女等自身の自惚の評量を意味するに過ぎないのである。

フロイドはその論文『ナルチスムス序說』(邦譯『分析戀愛論』の內)の中で、對象選擇には二種の別——依憑型と自己愛型——ある事を指摘してゐる。依憑型は母の面影に基いて選び、自己愛型は自分自身の面影に基いて選ぶ。人は本來二個の性的對象を持つてゐるのだ、即ち彼自身並びに彼を世話した女である。男と女とを比較して見ると、その對象選擇型の傾向に根本的な相違が(少くとも概觀的には)ある。男に於いては、依憑型に基いての對象への完全な執着が特質的である。そこには性對象の著しい買被りが示され、その買被りは幼兒に本來なるナルチスムスから發現し、それを對象に轉嫁したものに外ならない。この性的買被りからは獨特の、神經症的强迫に酷似した惚れ込み狀態を生ぜしめるに至る。が、女の場合はさうでない。女の場合には、思春期になると共に、本來的なナルチスムスが高まつて來る、これは性的買被りの當然齎す對象執着と相容れざるものである。殊に年と共に美しさがいや增して行くと自己滿足感が生じ、そのために女が對象を選擇することの自由が社會的に制限せられてあることの苦痛が大したことではなくなるのである。嚴密に云へば、そのやうな婦人は彼女等が男たちに依つて愛されるのと同じやうな激しさを以て自分自身を愛してゐるのだ。彼女等には愛する要求はなくて愛せられる要求があるのみである。で、この條件を滿たしてくれる男たちを好むのである。そのやうな婦人は或る男たちには絕大な魅力である。それ等の婦人が甚だ美人であるからと云ふ審美的理由のためのみならず、また彼女等のナルチスムスが、自分自身のナルチスムスの保全を失ひその缺を補ふために對象愛にあこがれてゐる人々にとつては最大の魅惑であるからでもある。

男に對して冷淡になつてゐるナルチスムス的な婦人等にとつても、對象愛へと導かれる一つの路が開かれてゐる。

それは自分の生んだ子供であつて、これは彼女自身の肉體の一部分であるから、これのみは彼女等が完全な對象執着をナルチスティッシュに供し得る特別の對象であるからである。それに加へて（フロイドの最近の補説的論述に依れば）彼女等も自ら母となることに依つて自分自身の母と同一化することが出來るやうになる。實はその母に對しては結婚の時まで反抗を續けて來たのであつたが……。ペニスが缺如してゐると云ふ理由は昔ながらに消失してはゐないと云ふことは、生れた子供が男兒か女兒かと云ふことへの母親の態度の相違に依つて判るのである。たゞ息子への性目的の禁制せられた愛のみが母親にとつては無制限の滿足を齎すものであるのだ。それは如何なる場合にも最も申分のないものであり、あらゆる人的關係の相反並存性を殆ど完全に脱却してゐるものである。母は自分自身の內に抑壓する外なかつた野心をその息子に轉嫁し交付することが出來る。母はその男性コムプレクスの一切の殘滓の滿足を期待することが出來る。フロイドの云ふところに依れば、結婚でさへも、妻はその夫を息子とし、彼に對して母親として振舞ふことに成功するまでは落着かないのである。分析に於いては、ナルチスス型の婦人は治療に對して最大の抵抗を示す。オルガスムスはなくともやはり愛せられてゐるのだと信じてゐることが屢々である。

これに對して分析治療の效果の擧がるのは、患者をしてそのナルチスムスの補償的性質を納得せしめ、その背後に匿れてゐる去勢コムプレクスを本能感情的に再體驗せしめ得る場合に於いてのみである。

第八、本能的性格（色情狂(ニムフオマニイ)的偏執）の冷感症。

今や我々がこゝに扱はうとしてゐるのは、殆ど不斷にコイトスへの願望を持ち、從つて相手關はず我が身を提供せんとする類の婦人である。コイトスの間には彼女等は甚だ亢奮するが、亢奮消長の弧線は常に上昇するがオルガスムスに達することはない。コイトスの後に、そこに何ら正常の弛緩がない。常に必ず「神經」的症候（頭痛不眠など）が現れる。

それが如何なる心理的起源に由るかは、複雜した問題である。オルガスムスに達することが出來ないと云ふことの中には患者たちの廻避してゐる被去勢願望や、父への性願望、母への死願望のための罪障感、夫（父）への復讐とをそ

れに伴つて起る娼婦空想などが混入してゐる。

ニムフォマニイ（色情狂的偏執）的特徴を有する或る婦人患者は彼女の始終變つてゐる愛人をコイトスに依つて懲罰してゐるのだとの奇妙な考へを抱いてゐた。その懲罰とは、今は亡き父に對する死後の復讐であることが分つた。如何にしてそれが復讐かと云ふに、「お父さんが私を愛してくれないなら私は娼婦になります。さうしてそれはお父さんの責任です」と云ふ風である。同時にまたこの懲罰の中に「抑壓せられたるもの丶復歸」が見られる。懲罰の迂路を通つて父との合一のなき幼兒的願望が現實せられる。併しながらコイトスはオルガスムスがなくては意味ないのであるから無意識的良心の苛責は緩和せられるのである。

また或る別の患者の場合に於いては、彼女はコイトスの後に男から金錢を要求した。純粹の戀愛から關係に這入つたと信じてゐる男を面喰はせ喫驚させることが何とも云へず樂しかつたのである。同時に無意識の去勢影像が金を要求すること丶結びついてゐた。この患者はまたその幼兒期の失望とは正反對のことを行動してゐたのだ。父は彼女に失望させたのであるから、父の影像たる男への興味を合せて、その失望の返報をしようと思つたのである。

男に對する飽くことなき要求を示すこと丶共に、今一つニムフォマニイの特徴をなすことは、クリトリス自慰の決して放棄せられない事實である。同じことは冷感症婦人の多くの型に就いて眞實であつて、彼女等は結婚その他に依つて正常の性生活を營んでゐるに拘らずその惡癖を放棄せず、而もそれに就いて時として壓倒的な罪障感を覺えてゐるのである。

長期の分析を試みるならば、その治療效果は悲觀的ではない。

第九、男根期以前に定着ある冷感症。

第二章の序に於いて論じておいた通り、性器的性慾が完成するまでにはその準備として、口唇期、肛門加虐期、尿道期、男根期の諸段階を通過しなければならないのである。これ等の各段階に於いて、定着（リビドーの固執）又は退行（既に放棄した位置にリビドーが返流すること）の現象が起る。コイトス又はオルガスムスの間に「困つた事になりさうだ」と云ふこれ等の婦人たちの屢々な恐怖の中にこの事實を認識することが出來る。困つた事とは何事かと云ふに、それは糞尿の排泄を意味するのである。今一つ外面に現れる特徴は、間違つた性的理論に固執してゐること

である。

現に或る婦人患者はその夫がペニスの小なるが故に滿足を與へ得ないのだと云ひ張つてゐる。××せるペニスはどれほど長くあれば滿足を得るのかとの質問に對して、患者はそれが「向ふ側」に當らねばならないと答へる。「向ふ側」と云ふのはワギナ內に凸出してゐる子宮口のことである。このやうにこの患者にとつてはコイトスとは男性ペニスと女性（にもワギナ內に生えてゐると想像せられたる）ペニスとの磨擦であると考へられてゐる。理窟の上ではさう云ふわけのものでないと云ふことがよく分つてゐるに拘らず、依然右の考へ方に固執してゐた。彼女の云ふところに依ると、幾人かの男に、何れも頑丈さうなのを選んで「當つて」見たが、いつも結局駄目であつたと。

性器前期的段階の個々の名殘は種々雜多な結合をしてゐるものである。

ワギナに於けるコイトスを忌避する或る婦人患者は吹のやうな態勢を好む。男は××し、女はその右×××いてフェラチオをなし、その間に××その全力を擧げて×××××××のである。

今一人の婦人患者は、クニリングスに依つてのみオルガスムに達することが出來た。彼女は甚だ被虐的であつて、男が亂暴に取扱ふまゝに委せてゐた。而も他方に於いて、甚だしいが加虐特徵が明かに認められた。最深層に於いては母子間の口唇的遊戲に類するものが存し、その遊戲に於いて男は授乳せられる幼兒の役割を演ずるのであつた。

冷感症が分析に依つて解消するところを見ると、性器前期的定着說の正しいことが切實に證明せられるのである。

現に、强烈な肛門定着を持つてゐる或る婦人患者は、相當分析の進んだ或る中間の段階に於いて、肛門とワギナとの間に强い亢奮を覺えた。その患者は以前には完全な冷感症者であつたが、時々はワギニスムスの徵候を示し、性慾から完全に退いてしまふことがあつた。

この群に所屬するものとしてはまた、以前に論及した强迫神經症者の性的障碍と云ふのがある。

分析診療の效果は區々で、定着の强度及び深度の如何に依る。

第十、 到錯（變態）の冷感症。

加虐行爲だの同性愛だのと云ふ變態行爲を實行してゐる婦人たちは、正常の對象との間に於いてワギナ的オルガスムスを持つてことは出來ない。吾人はこれ等の變態が何に起源するかを尋ねて行くべき場合で只今はないが、たゞ經

驗した事實を述べておくならば、變態の治療は神經症の治療よりも遙かに問題の餘地があるが、たゞ婦人患者たちが自分らの變態の故に内面的に葛藤を感じてゐる場合には、成功の見込みがある。

第十一、神經症の部分的現象としての冷感症。

冷感症を精神分析に依つて治療することが出來るなどゝ云ふことは、一般の人々は殆ど知らないところであるから、冷感症それ自身のために分析處置を受けに來ると云ふ患者は稀である。大抵は何らかの神經症的症候を有するが故に來るのであるが、やがて冷感症も存すると云ふことが分るのである。

或る婦人患者は動物恐怖症の故に處置を受けに來た。分析して見ると、彼女の性生活（彼女は冷感症であつた）は二つの層に於いて起ることが分つた。その夫に對しては冷淡で性拒絶的であつたが、その幻覺的な動物恐怖の中に於いて彼女はその無意識的な攻擊空想（その中心には父想があつた）を生かした。この場合、恐怖は一方に於いて無意識的願望に對する防禦であると共に、他方に於いて内的衝動からの威赫的危險に對する自我の警戒である。同時に彼女の病苦はそのエディポス的願望に對する懲罰の無意識的願望を滿足させるものであつた。意識的にはその患者ほ症候の故に頗る不幸で、且つ沈鬱であつた。

あらゆるヒステリー及び强迫神經症に於いて、吾人は同樣な狀態を觀察する。

多くの恐怖症並びに「運命神經症」に於いてオルガスムスは可能か不可能かの問題に關しては、分析の間でもその說が區々で、或る者はこの種の患者に於いてもオルガスムスは觀察せられると云ふに對し、他の者はその可能性を否定する。如何なる場合に於いても、オルガスムスの發見は寧ろ稀少のことであらう。

外出（臨場）恐怖症の或る患者の場合（ベルグラー稿『外出恐怖症の一患者の分析』精神療法中央雜誌所載）に於いて本人は正常のオルガスムスを持つてゐたが、その病氣の最高頂に於いては彼女はコイトスに興味を失つてゐた。前述の如く、問題は寧ろ稀少と云ふ點にある。一切の神經症にはオルガスムスの障害が伴ふとの命題（フェレンチー及びライヒの共著參照）は、多少の例外はあるにもせよ、なほ妥當するからである。

次に擧げる患者の場合に於いては、外出恐怖は分析中に完全に消失した。結婚のために多くの恐怖と驚きとを經驗したのだ。彼女は常に男兒たらむことを望み、好んでヅボンを穿き、その父の眞似をした。その男同胞はその反對に極めて女性的であつ

た。彼女は何の豫備知識もなくて結婚生活に入り、夫はその行爲に際して、たゞ妻の側に横臥してゐるだけのものだと信じてゐた。性は動物的なものだと考へてゐた。相手のペニスに就いては、ペニスが此方のクリトリスに全然觸れなかつた時に、自分か相手か何れかの出來具合が正常でないのだと信じた。ペニスに就いては、裸體の彫像などに見られるやうに、柔軟で小さいやうに見えるのだと思つてゐた。内部性器の存在は結婚して見て始めて氣がついた。そこでの感覺もそれからやうやく感じるやうになつた。屢々、殊に行爲の後に遺精があつたが、亢奮はあつても滿足はなかつた。患者がその行爲に於いて夫と同一化し、同時に治療の進展をも示してゐる二つの夢があるが、それをこゝに擧げて見る。――(一)彼女は段々狹くなつて行く階段を昇つて行かなければならない。頭がクラクラする。頂上に非常に狹い場所があつて、そこを通つて行かなければならない。子供が頭から落ちて行くのを着物を摑んで止めた。彼女はその子供を救つたのであつた。(二)或る古い家の中の階段を患者は子供を連れて敵から遁れてゐる。階段は高いが、明るく暖く、美しく裝飾せられ、お祭りのやうに華やかである。誰かに勵まされつゝ彼女は安全に頂上に達した。……家の中へ突入すると云ふこと、狹い階段に押込むと云ふことは、男性的の象徴である。男性的願望がコイトスの刺戟に依つて强化せられてゐる。さうしてコイトスの間に彼女は相手と共に男性的の運動と侵入とを經驗し、彼女自身の感覺を味ふことをしなかつたのだ。

或る婦人が何となく氣持が變で神經症になりさうな感がすると云ふので分析を受けに來た。男性的な精力を以てこの婦人は或る政治上の位置に就いた。彼女は常に野心的で、その父親に同一化してゐた。四歳位の時に女中に誘惑せられて性器に觸れることを覺えた。彼女の母は結婚に於いて從屬的位置にあつたので、彼女は「奴隷的結婚」に入ることを決して肯じなかつた。また色慾的に自分を提供することを欲しなかつた。つまり彼女は完全に冷感であつた。併しながら子供を欲しがることは强烈で、彼女の知人で生れの非常に純粹な男を選んでそれに身を任せ、姙娠するや否や、その男と別れてしまつた。性交の後に、彼女は氣持が惡いと云つて入浴した。夢に依つて見ると、無意識的な同性愛があつた。また彼女が十四歳當時に母親と一緒に寢てゐて、その××に觸れたいとの衝動を感じたことを想起すると云つてゐる。性格學的には甚だ敏感で、男と接觸することを好み、常に男を牛耳ることに無意識的に腐心してゐた。性的には全然冷感であるが、そのくせ自由戀愛の熱烈な擁護者であつた。

二十八歳になる婦人患者が、ヒステリー性の嘔吐、口唇的變態、並びに冷感症のために分析を受けに來た。彼女は結婚して二年になるが、既に十七歳の時に甫めて神經症狀を示した。新婦となつてまた何も喰べることが出來ず、新婚旅行の際に不安になりまた屢々嘔吐した。平凡な男とのこの平凡な結婚に於いて、全然冷感的であり、嫌惡してその××を拒み、やがて教養ある堂々たる男に戀愛し、その男には熱烈に接吻した。常に嘔吐の不安に惱み、朝食をとることが出來ず、社交から退いてしまつた。

患者の母親は患者が八歳の時から或る性的態度を持つやうになつた。それは變態的（フェラチオ）であると云ふことを彼女は知つてゐた。その時に患者はいやな氣持がした。彼女は常に接吻することを好んだ。四歳の時に母を熱烈に接吻するので、人々は彼女を引離さねばならなかつたほどである。彼女の夢で見ると、そのヒステリー性の嘔吐癖は、ヒステリーには典型的である如く、抑壓せられたるフェラチオ空想がその根柢に横たはつてゐた。例へば、彼女は夢の中で、「机の上に皮を剝がれた、長く延びた小鷄の頸の横たはつてゐるのを見た。その頸は生きてゐた。で、チョン切らねばならなかつた。いやな氣持になつて、彼女はナイフの柄でその頭を打たせた。」彼女は屢々ヒステリー球を喉頭に感じ、そこに結帶があるやうな氣がした。彼女は自分の父親を思はせるやうな或る男と戀愛に陷り、その男と夢中になつて接吻した。彼と會ふことを期待してゐる時に、彼女は急に胸が惡くなる。ワギナに於いて冷感であると共に、他方に於いてこのやうに口脣的色慾感が强烈であつた。ヒステリー性の嘔吐癖はフェラチオ空想に依存してゐるのである。兩親への定着が大きな役割を果してゐた。母親との同一化がフェラチオ空想並びに嘔吐癖の條件となつてゐた。

分析治療は（强迫神經症は例外として）見込みがある。

第十二、 無意識的同性愛への逃避反應の結果としての冷感症。

無意識的同性愛の廣汎な範圍から吾人は次の型を選ぶ。――エディポス・コムプレクスを解消する一つの可能の道は父から離れて自分を沒性慾的に高められた母親に第二次的に同一化することである。それにはエディポス的空想から生ずる無意識的罪障滅が參與する。そこでこれ等の婦人は「沒性慾的」となり、友情の形で昇華せられたる同性愛に傾くやうになる。

或る婦人患者が冷感症の故に分析を受けに來た。患者の夫はその妻を次のやうな不思議な條件を提出して何れとも妻の了見次第だと云つた。――彼は公然と或る情婦を持つてゐるが、妻が感じを持つやうになるまでは、その情婦との關係を續けてゐると云ふのである。夫は明かに妻の冷感がその惡意に出づることを察していゐるのである。ところで、その妻君たる患者の方は夫の情婦に對して同性愛的に愛着を覺えてゐるのであるから、このことを薄々感ずるやうになるや否や（勿論、分析中にそんなことを云ひはしなかつたのだが）數回の分析談合の後に處置を中止してしまつた。

他の患者の場合に於いては、このやうな無意識抵抗を打破して、診療を有效ならしめるに成功してゐるのである。

編輯後記

田中善英、狩野三郎、宮田戊子、木村廉吉、野村泰その他大勢の特別誌友、客員から暑中御見舞頂き、誠に有難う存じました。當方からも誌上略儀ながら同樣御見舞ひ申上げます。

×

自己愛の問題もなかなか廣汎複雑で、本號のみにてその全部を盡したとは決して申しませんが、編輯部としては出來るだけの誠意を盡したつもりであります。岩倉氏譯セガンチイニ論や、講座の語彙中にもナルチスムスへ暗示的な言及がありますから御見落しなく御精讀下さい。

長谷川氏の紹介してゐられる「今日イエスが居るならば」は面白い文です。筆者が今日のイエスとしてフロイド又はフロイド的な人物を考へてゐなかつたとは斷定出來ないと思ひます。

×

冊子精神分析を書店を通じて御註文下さる方が依然多いのは有難いが直接御註文下さるなら一層辱い。

書店を通じて御註文の際には冊子は冊子と明白に書添へておいて下さるやうに願ひます。またなるべく第何卷第何號として下さい。何月號として下さつてもいゝのですが、内にはたゞ數字だけ書いておいでになる方があつて、當方としては號數か月數か分らなくて閉口する事があります。

×

延島氏譯『ナポレオンの精神分析』は譯文流暢であり、内容も極めて面白いと云ふので諸方面で甚だ好評であります。精々御愛讀の程願上ます。

北山隆氏の『夏目漱石』もいち早く單行本となります。目下印刷を急いでゐますから、新秋の讀書界にデビユするのも遠いことではありますまい。この方は對象が日本の讀書界に親しまれてゐる小説家だけに本誌掲載中もなかなか反響がありました。

×

新特別誌友諸君を御紹介申上げます。

何と旺んなことではありませんか。なほ誌友各位にはこの上とも誌友増加に御盡力下さるやう願上げます。我等はこの學問の意義を認める我等相互の力だけで、この仕事を守立てゝ行きたいと思つてゐるのです。この困難を敢然克服してこの學問の偉力を天下に誇り得る可能性が見えないではありません。

▲埼玉縣……根岸東一郎氏
▲城東區……川手雄氏
▲京都市……西岸典雄氏
▲小石川區……五東高秀氏
▲熊本縣……稻富助男氏
▲横濱市……山崎治助氏
▲世田ヶ谷區……作山威正氏
▲府下立川町……中島菊治氏
▲新潟縣……淺妻直末氏
▲滿洲國……大場省三氏
▲京都市……中林章廣氏
▲杉並區……志達徹馬氏
▲尼崎市……三宅保氏
▲滿洲國……内田堯弘氏
▲福岡縣……庄野喜三夫氏
▲同縣……青木昭氏

▲岐阜縣……松原喬末氏
▲澁谷區……鍋山幸雄氏
▲滋賀縣……森　茂夫氏
▲愛媛縣……玉置邦道氏
▲長野縣……赤廣正男氏
▲福岡縣……杉原巨一氏
▲東京府……川野泰司氏
▲朝鮮……奧座勇之進氏
▲澁谷區……栗原信一氏
▲八幡市……則松哲夫氏
▲同市……渡邊佐太郎氏
▲福岡縣……奥迫初憲氏
▲同縣……岡崎輟信氏
▲同縣……岡崎敏雄氏
▲同縣……吉松　肇氏
▲島根縣……工　嘉彦氏
▲八幡市……平島宗保氏
▲同市……綾森太郎己氏
▲淀橋區……藤田光太郎氏
▲澁谷區……藤井佳明氏
▲小倉市……田中腦脊髓科病院
▲品川區……黎明會御中
▲澁谷區……萩原直七氏
▲神田區……土井英一氏
▲福岡縣……日高　進氏
▲八幡市……魚返順記氏

なほ右の内庄野喜三夫氏以下の二十九氏は全部福岡の野村泰氏の御紹介に係るものであります。野村氏の熱意に對して深謝いたします。

★

次號正誌特輯題目は『神經症研究』といたします。これは甚だ問題が大きすぎるやうでありますが、治療對象としても研究對象としても精神分析の最も適當した、得意とする對象はこれでありますので、一先づこれについて總括的な研究と考察とを加へておき、漸次に個々の症狀の研究に進んで行きたいと思ひます。勿論、今までとても個々の問題に個々の面から觸れて來ましたが、一層組織的に深刻に研究すべき段階に這入つて來たと思ひます。

内容の豫告はこゝでは、紙面の餘裕もなくなりましたから、控へておきます。

編輯部を信賴して愈々御支援の厚からむことを切に願上げます。

▼昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
▼昭和十三年八月廿五日印刷
▼昭和十三年九月一日發行

(月刊) 定價五十錢
(外地定價) 五十五錢

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
東京市小石川區戸崎町十三
印刷所　多木印刷所

定價一部　五十錢
半年分　一圓五十錢（送料共）
一年分　三圓（送料共）

御註文規定

・本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・郵券代用の場合は一割增に願ひます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所　東京堂・東海堂・大東館・北隆館・(大阪)福音社

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。

一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓五十錢）又は一年分（三圓）前納の義務を有す。

一、特別誌友は偶數月發行「冊子精神分析」の無代配布を受く。

一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て研究會、講習會に出席することを得。

一、希望者は購讀料金と共に、なるべく左記體裁の申込書を送られたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

（御迷惑の箇所には記入を要せず。）

特別誌友申込書

住所

姓名

年齡

職業

經歷

感想

合本 單册『精神分析』（特輯題目及び定價）一覽表

東京精神分析學研究所
本郷區動坂町三二七・振替東京七八八一七番

第一卷・上

創刊號（昭和八年五月）「エディポス研究號」＊
第二號（同　六月）「フロイド喜壽祝祭劇記念號」
第三號（同　七月）「教育研究號」＊
第四號（同　八月）「夢の研究號」（第一）＊
（合本としては品切）

第一卷・下

第五號（同　九月）「兒童心理研究號」（第一）＊
第六號（同　十月）「社會思想・犯罪心理研究號」
第七號（同　十一月）「戰爭心理研究號」
第八號（同　十二月）「夢の研究號」（第二）
（合本としては品切）

第二卷・上

第一號（同九年一月）「心理療法研究號」
第二號（同　二月）「女性心理研究號」＊
第三號（同　三月）「傳說研究號」
第四號（同　四月）「文學研究號」
（合本としては品切）

第二卷・下

第五號（同　五月）「ドストイフェスキー研究」
（六月休刊・以下隔月刊行）
第六號（同　七・八月）「戀愛心理研究號」
第七號（同　九・十月）「性慾心理研究號」＊
第八號（同　十一・十二月）「夫婦生活研究號」
（合本としては品切）

第三卷

第一號（同十年一・二月）「兒童心理研究號」（第二）
第二號（同　三・四月）「宗敎心理研究號」
第三號（同　五・六月）「自殺・情死心理研究號」
第四號（同　七・八月）「同性愛と異性愛」
第五號（同　九・十月）「家庭問題と親子關係」
第六號（同　十一・十二月）「常態及び變態の性心理」
金三圓（送料十五錢）

第四卷

第一號（同十一年一・二月）「性格改造研究號」
第二號（同　三・四月）「母性と妖婦研究號」
第三號（同　五・六月）「夢と幻覺研究號」
第四號（同　七・八月）「兒童分析と敎育研究號」
第五號（同　九・十月）「愛慾葛藤の諸問題」
第六號（同　十一・十二月）「道德の分析」
金三圓（送料十五錢）

第五卷

第一號（同十二年一・二月）「思春期の研究」
第二號（同　三・四月）「不良少年少女の心理」
第三號（同　五・六月）「生理と心理」
第四號（同　七・八月）「男性と女性」
第五號（同　九・十月）「男女性格分析」
第六號（同　十一・十二月）「幼兒心理研究」
金三圓（送料十五錢）

＊印は單册としては品切、その他は在庫す。單册代價送料共各五十錢

昭和十三年六月十日 第三種郵便物認可
毎月一回一日發行
精神分析 九月號
定價五十錢・外地五十五錢

VI. Jahrgang, Heft 7–8. Sept. — Nov., 1938. Erscheint zweimonatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Narzissmus)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 50 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag
327, Dozakacho, Hongoku Tokio Nippon

精神分析

第6巻第9號
昭和13年10月

目次

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十三年九月廿五日印刷納本・昭和十三年十月一日發行・毎月一回一日發行

精神分析邦文献に就いて

斯學邦文献に就いては、大槻氏著『精神分析概論』巻末に詳しく擧げてあるから、こゝに反復する必要はない。また本號巻末の廣告にも本研究所に直接關係のある、さうして目下入手可能の書名だけは擧げてもある。私は右の書巻末に洩れてゐることを參考のために讀者諸氏にお傳へしておきたいと思ふのだ。

わが國の斯學文献史は大正元年に始まるが、何としてもこの方面の史上に一大エポックを劃したものは、本誌の創刊（昭和八年五月）であらう。これは何人も我等の我田引水とは考へないであらう。尤も本誌創刊前年に東北帝大醫學部から「精神病學教室業報」別名「精神病學及び精神分析論叢」と稱するものが出版せられてゐるが、これは教室業報で一般の讀者を豫想するものではなく、且つ年一回位の發行のものであるから、その內容的意義は固より大きいが、一般的の文献史的意義には直接關係が薄いと云つても、別に失禮には當るまい。また斯學弘通のために別働隊的に大きな功績を果し、且つ現に果しつゝあるものは石丸梧平氏編輯『人生創造』である。同誌上に於けるこの數年來連載の講話は斯學の日常生活に於ける實用的意義を極めて廣汎な人々の間に弘通せしめた。とにかく、本誌創刊以前には隨分アチコチから斯學に對して（例へば東北帝大丸井博士に對する三高の佐藤幸治氏の如き）無理解な、嘲笑的な批評が無遠慮にのさばつてゐたが、本誌一度出現して、さう云ふ批評は面白いほど鳴りを鎭めてしまつた。本誌創刊當時の活潑な時評欄を披見せらるれば、その然るに至つた所以が自ら諒解せられるであらう。

本誌創刊の歴史的契機を一層意義あらしめたものは、それが『フロイド全集』（春陽堂版）第一期刊行分全十卷の完成と同時であつたと云ふことであつた。この『フロイド全集』は昭和四年以降五ケ年の時日を費して本研究所關係の人々の努力の結果完成したるものであつて、別にアルス版の精神分析學大系なるものが競爭的に出版せられつゝあつたゝめに『フロイド全集』の刊行は幾多の刺戟を得た。何れもその特徴となるところはあるであらうが、春陽堂版は譯者が肩書の虚假嚇しこそなけれ、少人數で且つ專門的熱意を有する人々のみが互に譯語などを相談して統一を計るに努力したことゝ、且つ完全に原著に就いて譯したことゝ、重版を見る度に內容に良心的な改訂を加へて行つたゝめに、今日本では何人も春陽堂版の信頼すべきことを認めてゐるが、併しフロイド全集の如き深刻難解なる大文字の完全なる飜譯は恐らく譯者としては一生の事業であつて、今後の重版に於いてなほ改訂すべき個所は少くないであらう。讀者幸に友情を以てお氣付きの個所を報告せられむことを希ふ。

フロイド全集第二期刊行は春陽堂に於いて公表して既に年餘を經過したが、さうしてその事業は着々進捗しつゝあるにはあるのだが、何分にも主要譯者たる大槻氏が本研究所事業の經營と、本誌の編輯事務とに忙殺せられて、譯筆のとかく遲れ勝ちであるのは讀者に對して誠に申譯ないことであるが、譯者は後人に示して恥かしからざるものを遺したいとの學的良心を以て勉勵せられつゝある故、なほ暫く御猶豫あらむことを希ふ。

本研究所の創立以來、斯學文献の豊富になつたことは驚くべきものがあるが、今後も愈々增加して行くことであらう。只今、近き將來に於いて出版の確定してゐるものには、目下本誌に載連中の高水氏譯『冷感症とその治療』、大槻氏著『續・戀愛性慾の心理とその分析處置法』、『東西傳說の精神分析的研究並びに鑑賞』、研究所編『精神分析的研究』、『シェイクスピアの精神分析的比較研究』、『シェイクスピアの精神分析術語解』、『芭蕉分析』などである。その他にもいろ〳〵計畫中のものもあるが、確定的でないものは濫りに豫言はしたくない。『冷感症とその治療』は御覽の通り、非常に有益な文献であるので、もう二三回連載の後に早く單行本化したいと考へてゐる。その他の諸書の出版はいつ頃になるか明白には申上げかねるが、やがて必ず出版せらるべきことは固くお約束することが出來るのである。その節は精々御愛讀御支持の程を切に希ふ。

以上は本研究所關係のものゝみであるが、別方面からの文献出現もやがて多數に見られるであらうし、また見られることを希望する次第である。（出版部主任）

アプフウプ

乳房と秩父

不老泉院主

本誌前號に長谷川誠也氏の『乳房の威力』と題する大變面白い文が出てゐたから、私も乳房について思ひつくまゝにいろいろの感想を述べて見たい。

私は近頃、秩父地方へ行つて見たい衝動を感じて少し物の本を調べて見たところ、秩父の語源は乳に關係があると云ふ説のあることを發見した。吉田東伍博士の『大日本地名辭典』に「……知知夫の名儀は先賢之を釋きて、乳に推しつけ、銀杏の木を乳の木とも云れば其の木の在りけるに因めるやに述ぶ。されど乳の木となさんより、石鍾乳に據ると云ふを直截とす。秩父山の鍾乳洞は古今その名高し」とある。尤も、他になほ二三異説があつて、「千茅生」から出てゐるとの説の如き、相當有力かと思はれる。「山ふかみ谷の戸しめて淺茅生のちちぶの奥はすみよかるらむ」と云ふ古歌の如き「千茅生」の説の一つの證據となつてゐるらしい。この歌は退行願望、胎内空想を端的に表現してゐてなか／＼面白い。名歌とは總てこのやうに萬人の熾烈な本能感情を端的に代辯してゐるものだ。

併し如何に異説があらうとも、精神分析學徒は夢の研究に依つて、無意識が重複的に決定せられてあることを知つてゐるのであるから、「千茅生説」結構、併し「石鍾乳説」も結構と、二つながら承認しておいても差支へないと思ふのである。何となれば「淺茅生」の「谷の戸しめて」もその奥にお乳がなければ「すみよかるらむ」とは考へられないからである。とにかく秩父地方が古來武藏野住民たちの退行願望の憧憬地であつたことは否定出來ない。何となれば、こゝは廣漠たる武藏平野の涯、鋭く起伏する山脈に狹められた地の端であるからである。

房はまた總に作る。即ち「組紐の端を束ねて其餘を散らし、花蘂の如くせしもの、飾とす」(言海)。總はまた「すべる」とも讀む。紐を束ねて「統る」からである。乳房を見て總を聯想した古代人は絲の如く注ぎ出される乳が幾百本となくその中に「統べ」られてゐると考へたからであらう。房はまた室の義である。その室の中に澤山のものが「ふさ／＼」と貯藏してある如き部屋である。そこには必ずしも絲狀のものでなくても差支へはない。球形のものでも方形のものでもよい。房の字を分解して見ると、「戸」を以て被ふた「方」形の場所と云ふ意であらうか。「方丈」と云ふのは一丈四方の眞四角な室及びその室内にゐる人(坊主)と云ふ意で、つまり「谷の戸をしめて」胎内に安居してゐる人と云ふ意であるらしい。この場合、(即ち無意識心理的には)、方と圓とは同じ意味であると思はれる。一口に「方圓」と熟語的に並立さしてあるによつても分るが、實は圓形の室にしたいところ、實際問題として圓形の室は作れつこはないから、圓はどこから計つても同じ寸法であるから、それなら四角い室なら大體に於いて何處から計つても同じ寸法だか

ら「代用品」にはなるだらうと云ふので、方を以て圓に代用せしめるに至つたのであらうと思ふ。ところで、圓は胎内の象徴であることは、凡そ胎内象徴であるところの多くのものに「丸」の字が名が附けられたり、圓や球の形をとらしめてあるに徴して分る。

恩と罪

長谷川氏の同じ文中に、父親に强談判してゐた三人兄弟の青年が母親の乳房を見せられて一言もなく小さくなつて逃げ出したと云ふ話が出てゐた。何故に彼等は乳房を見て小さくなつたのであらうか。それに養はれて恩を感じてゐるからである。恩を受けたら、どうして小さくならなくてはならないのであらうか。恩は罪と無意識的には同じであるからである。前號大槻稿『淸野博士の竊盜事件』中にも言及してあつたやうに、ドイツ語に於いて Schuld は罪と恩との兩義を有することがその一つの證左となるであらう。なほドイツ語の慣用句には "die Schuld der Natur bezahlen" と云ふのがあつて、これは直譯すれば「自然に借りを返す」であるが、それで「死する」と云ふ意味になるのだ。つまり生きてゐると云ふことは自然（母）に借りをしてゐると云ふことであり、死すると云ふことにその借りを返すことゝ無意識心理的には同じ意味を持つのだ。

日本語の慣用句としてこれに類似したものには「年貢の納め時」と云ふのがある。幾つかの罪を犯して見付からないで濟んで來た人間が愈々捕縛せられるやうになることを意味することになつてゐるが、その罪と罰との關係を年貢とその納付と云ふ關係で象徴的に表現してあるのが、また甚だ意味深長ではないか。これで見ると、中世の農民たちが、領主に年貢を收めてゐたのは、彼等のエディポス的罪障感解消の必要上、父親代償たる領主に恩返し（罪亡ぼし）をしてゐたのだと云ふことが判然と分る。そのやうにエディポス關係なるが故に、その相反並存性に依つて時に逆の憎惡面が爆發して屢々一揆の騷動となつたと云ふことは、これまた、極めて人々に理解され易いことである。このやうな方面の心理學的研究なしに農民文學や農民生活を研究しても何にならう。また近頃、或る人が『恩の形而上學』、『忠孝の哲學』などゝ云ふ本を書いてゐるのを見たが、このやうな問題を單なる冥想的、觀念的、形而上學的に研究して見ても何も分るものではない。分析から研究すれば、極めて簡單明瞭の事である。

スターとファン

『オーケストラの少女』で一躍世界的に有名になつたディアナ・ダービン孃を戀愛物語映畫の主人公にしないやうにして貰ひたいと云ふファンたちの熱烈な要求がハリウッドのユニバーサル製作所に舞込んだと云ふ話は甚だ我々には興味がある。彼女を永遠の處女にしておきたいファンたちの母コムプレクスの齎であることは明かだが、併しもしダービン孃がそのファンたちの何れかの一人に向つて誘惑的秋波を送つたとしても彼等がそれに反應し來るであらう時の熱烈さは、彼等が孃の戀愛物排

撃の熱烈さと正比例するであらうとの矛盾が我々にはあまりに見えすいてゐるからである。

近頃、わが國でも入江たか子の寫眞を胸に抱いて爆死した荒鷲があつた。彼は入江たか子に手紙を寄せ「お姉さん」と呼んでゐた。スターとファンとの心理關係は何とエディポス的、近親的なものではないであらうか。スターは「星」、ファンは恐らくファナティック（狂信者）の略であらうから、その關係には原始宗教の心理的遺産が多分に含まれてゐると思はれる。

内外彙報

國際精神分析學雑誌の續刊

前オーストリ國ヴインの國際精神分析學會はこの度オランダのアムステルダムに移轉し、そこから在ロンドンのフロイド教授と連絡をとりつゝ機關雜誌の續刊及び新著の出版を企てることゝなつた。但し從前二種であつた『國際精神分析學雜誌』と『イマゴー』とは合併せられることゝなつた。出版者及び編輯者の顔振れに變りはない。『精神分析教育雜誌』は如何なつたか、その後報告に接しない。

續刊第一號（九月發行）にはフロイドは巻頭に『精神性に於ける進歩』と題する長論文を寄せる由。

フロイド全集の新版

フロイド全集も亦この機會に新たに版を起し、今度は年代順に配列し、各巻末に詳細な索引を附することになつたと云ふ。索引を付したる點では、日本譯（春陽堂第十巻々末）の方が不完全ながらも先鞭を付けてゐたわけである。

フロイドはまた同時に新著『人としてのモーゼと一神教』と題する新著を公にすることになつた。内容は三部に分れ、第一章は「エヂプト人モーゼ」、第二章は「モーゼもしエヂプト人ならば」、第三章は「モーゼと民衆と一神教」と題し、前二章は既にイマゴーに掲載せられたことは嘗て本誌本欄に紹介したが、第三章は書下しであるらしい。老いて益々元氣旺盛なるには驚嘆の外はない。

本研究所講習會例會

九月例會は五日、林町の假移轉先にて催された。

本夕は『集團心理』論の第七章及び第八章を精讀討議した。この二章は集團心理をリビドー關係で説明せんとするについてはまづ個人と對象とのリビドー昇華（性目的離脱）關係から研究して行かねばならない必要があるので、その關係を研究してゐる部分である。そのやうな性目的を離脱した關係には同一化（相互）と惚込み（上下）の二種がある。そこで同一化を第七章に、惚込みを第八章に論じてゐるのだ。第七章には次の五種の同一化が擧げられてゐる。

一、エディポス的競爭者の位置にとつて代らうとの願望に依る同一化。

二、對象獲得の代りに同一化へ退行する場合。

三、對象關係はないが、或る人と自分との間に共通性あることの發見のために、同じ立場に立たむことの恐怖又は願望のための同一化。

四、對象放棄の代りになる同一化、又は對象再現のための同一化（取込み）。

五、憎まれたる對象を攻擊するための同一化。

前三者が常態的で、後二者は變態又は異常とせられてゐる。第八章は同一化と惚込みと催眠狀態と集團構成との間の類似點と相違點とを明かにしたものであつて、同一化と惚込みとは自我の豐富と窮困との差があると共に、對象に就いて云へば、前者はこれを喪失し、後者はそれを有してゐる。惚込みと催眠狀態とは沒批判的傾倒に於いて同じであるが、性目的の有無が違つてゐる點。集團構成の心理に於いても性目的は昇華せられてはゐるが、その關係が二人に限られてゐるのが催眠狀態、下なる多數と上なる少數との間に存する點が違つてゐる。

出席者は藤田由美、田中虎男、倉橋久雄、延島英一、北山隆、北垣照雄、大槻憲二、同岐美の諸氏。また中島菊治氏から鄭重な缺席挨拶があつた。

通信

▼『一茶の精神分析』は最初は取付く島もないやうに存ぜられ候。私としては俳人の業績を辿り見る程の心の餘裕を持つてゐなかつたからでせう。併し讀んで見ましたところ、一茶は單なる俳人ではなく人間でした。彼はいゝ意味でも悪い意味でも幸福な人間だと思ひました。讀んだ限りでは彼に異常さは見當らないからであります。彼の性格は平凡であつて、云ひ換えれば正常に近く、只赤貧と憤怒とがよく彼を大成せしめたのでありましよう。然しこの著書は、讀んでよい事をしたと存候。書中の分析上の批評は誠に他山の石となすべきものが澤山ありました。又前半の宮田氏の勞と研究上の溫蓄とは多とせねばならぬと存候。小生未だに劣等感の病根强烈にて「リビドー」の空想に趣く事度々にて誠に不甲斐なさをかこち居候も、今後一生懸命自己分析の途に進み度く此上とも御援助賜り度願上候。（大阪、廣井重一）

×

▼ラヂオの講演できいた所によりますと、ラフカディオ・ハーンの父は英國人ですが、母はギリシヤ人、そして英國人の考へ方によりますと「ギリシヤ人は東洋人だ」さうです。そして、この國際結婚はうまく行かないで、彼の母は彼の父におん出され、すご〳〵と歸國しました。これを見たラフカディオは子供ながらも「非常に母を氣の毒に思つた」のださうです。後年、彼は日本へ來朝して、日本人に非常な愛着を示し東洋文化のすぐれたものである事をヨーロッパ人に紹介し、一生を日本文化の爲に貢げて遂に日本の土となつた。彼曰く「ヨーロッパ人は、自分等こそ世界最高の文明人だと思つてゐるが、うぬぼれも甚しいものだ。」又曰く、「自分が東洋を愛するのは當然だ。私の血の半ばは東洋人のものだから。」

私はこれをきいて、大變興味深く思ひました。彼にとつて、「東洋の土地」は母であつたのだ。日本の文化向上の爲につくした事は母にリビドーを注いだことになるのだ。私は大槻先生の「人間は、ひとの爲にやつてゐると思つてゐても、無意識的には利己的動機でやつてゐる事が多いものだ」といふ言葉を思ひ浮べました。（林弘二）

×

▼精神病（精神乖離症）とまで疑はれし自分、學校の未練も心から清算して、凡ての慾德離れて父母の願望（無理をして學校にやり出世や名譽や地位を贏ち得らせるよりも自分等の家業（文房具店並びに貸家業）を繼がせゆく〳〵は老後の面倒や世話を見て吳れるやうに當地へ落ち着かせ度きこと）やコムプレクス（時代逆轉の空想）等の押賣りに甘受して親の信賴の立ち戻るまでは自己分析をしながら辛抱する決心です。グループの計畫は靑木昭（八幡市景勝町）に一任しました。私は精神分析を熱愛するやうになつてから凡らゆる心的誘惑は一掃され、牧師の宗教指導（主として自己欺瞞）を離れても、劣等感や罪障感等の强迫思想に惱まされることなく、一本立ちすることの出來る人間、偉大なる現實自我を目標としつゝ宗教や自殺的苦闘や行爲に逃げ込むことなく、男らしく人生途上の凡らゆる障害や運命に對して敢然と眞正面より闘爭して行ける性格に一變しつゝあります。これも皆諸先生方の御薰陶の賜だと考へ深く〳〵感謝致して居ります。（八幡市、野村泰）

編輯後記

前號冊子は八錢と云ふ半端な値段でしたが、書店との取引に勘定が大變面倒になつて困ろとの會計からの苦情に已むなく今號から判然と十錢にしました。僅かなことだから我慢して下さい。どうせ研究所はこの冊子は犧牲的に出してゐるのだし、それに正誌の五十錢据置は只今の物價標準から云つて甚だ勉强なのだから讀者諸君も、多少の御辛抱を願ひたい。

北山隆氏著『夏目漱石の精神分析』は多分十月中に出版になります。

九月一日の風水害につき、田中善英、奥本島田、梅木米吉、その他諸君のお見舞を感謝いたします。幸にして大したこともありませんでした。研究所は九月十八日に舊居所に新築成つて移轉いたしました。本誌舊號を見本として寄贈してくれと云つて來ろ方が時々あるが、その儀はお容赦願ひたい。

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十三年九月廿五日印刷
昭和十三年十月一日發行
（月刊）　定價 金十錢
編輯兼發行人　東京市本郷區駒込動坂町三二七　大槻憲二
印刷所　千葉市長洲町二ノ七　千葉印刷株式會社
發行所　東京市本郷區駒込動坂町三二七　東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

東京精神分析學研究所　出版書及び取次書

東京市本郷區駒込動坂町三二七
振替口座東京七八八一七番

著者	書名	定價
岩倉具榮譯	理想の家族（マンスフィールド短篇集）	定價一圓八十錢（送料共）
岩倉具榮譯	太陽（D・H・ロレンス傑作集）	定價一圓（送料十錢）
長谷川誠也著	遠近精神分析觀（文學研究論文集）	定價二圓三十錢（送料十錢）
平塚義角譯	ドストイェフスキーの精神分析（ノイフェルド原著）	定價一圓（送料八錢）
本研究所編	阿部定の精神分析的診斷（肖像、筆蹟、傳記付）	定價五十錢（送料共）
大槻憲二著	精神分析概論（四六版・紙裝・第五版）	定價八十錢（送料六錢）
大槻憲二著	戀愛性欲の心理とその分析處置法（菊版・再版）	定價二圓五十錢（送料十二錢）
大槻憲二著	精神分析讀本（四六版・三百頁・挿圖豊富）	定價一圓・上製本二圓（送料十錢）
大槻憲二著	精神分析・社會生活法（箱入四六版・第四版）	定價一圓十錢（送料十錢）
大槻憲二著	精神分析・新らしき立身道（箱入四六版・第四版）	定價一圓三十錢（送料十錢）
大槻憲二著	現代日本の社會分析（布裝箱入・四六版）	定價二圓三十錢（送料十錢）
大槻憲二著	分析家の手帖（箱入紙型・四六版）	定價一圓八十錢（送料十錢）
宮田成子・大槻憲二共著	一茶の精神分析（箱入紙裝・四六版）	定價二圓五十錢（送料十錢）
延島英一譯	ナポレオンの精神分析（イエーケルス原著）	定價一圓五十錢（送料十錢）
北山隆著	夏目漱石の精神分析（四六版・箱入美本）	定價一圓八十錢（送料十錢）

他に合本『精神分析』第四卷乃至第五卷・及びフロイド全集十卷などあり